

スペイン語の理由

2003i. 「スペイン語. 十二の『理由』」『NHK ラジオスペイン語講座』2003/4月号~2004/3月号. 転載許可済

上田博人, 2012

1. スペイン語の産声…『聖ミリャン修道院の注解』

Glosas Emilianenses (10~11 世紀)

スペイン中北部の La Rioja 州はとても小さな自治州である。ここはブドウ酒の産地として有名だが、その中心地 Logroño の近くに中世の詩人 Gonzalo de Berceo の生誕地 Berceo 村がある。そこからさらに進むと美しい聖ミリャン修道院 (Monasterio de San Millán) にたどり着く¹。ここまで脚を伸ばしたら、ぜひ「上の修道院」(Monasterio de Suso) まで昇ることをお勧めしたい。スペイン中世の歴史に思いを馳せながら静かな田舎の景色を楽しむことができる。

スペイン語の歴史を勉強する人にとってここは最重要地点の一つである。なぜなら、この修道院(「下の修道院」Monasterio de Yuso)でスペイン語の歴史上最初の文献『聖ミリャン修道院の注解』(*Glosas emilianenses*)が発見されたからだ。スペイン語の「最初の産声」(primer vagido)と言われるこの文献はおよそ 10~11 世紀のものと思われている²。



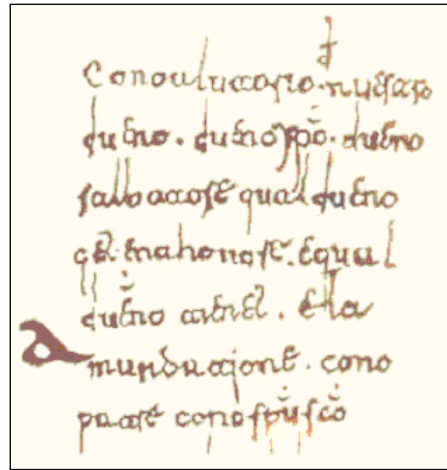
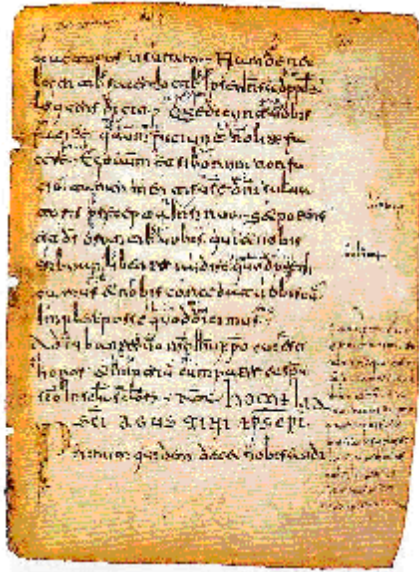
【写真 1】 聖ミリャン修道院

¹ Gonzalo de Berceo (1185?-1264) もこの修道院で教育を受けた。

² 「最初の産声」というのはスペインの言語学者 Dámaso Alonso の比喩だが、周知のようにスペイン語はラテン語の話し言葉から徐々に段階的に発展した言語であり、当然のことながら特定の時間と空間の一点で突然呱呱(ここ)の声をあげたというわけではない。("Nunca podemos cortar por un punto y decir: Aquí está el español recién nacido. Pero en el espectro hay un instante en el que ya estamos seguros de ver color amarillo y no verde. Se trata, pues, de saber cuál es el primer testimonio conocido que caiga ya del lado del español, y no del latín.") Dámaso Alonso. "El primer vagido de la lengua española", en *De los siglos oscuros al de oro*. Madrid: Gredos. 「けっしてある一点で切り取り、『ここに生まれたばかりのスペイン語がある』などと言うことはできない。しかし、スペクトルの中にもすでにはっきりと黄色であ

余白の書き込み

私たちはテキストを通して外国語を学ぶときページの余白に難解な外国語の意味を日本語で書き込むことがある。一千年前の修道院で聖人の説教などをラテン語で学んでいた修道士たちも、貴重な羊皮紙の行間や余白に彼らの話し言葉（当時のスペイン語）で意味を記していた【写真 2】。これが、ラテン語の意味を知るといふ修道士たちの意図とは反対に³、後世の私たちにスペイン語の原初の形態を知る手がかりを与えてくれることになった。



Glosas emilianenses⁴

■テキスト

本文のラテン語のテキストは紀元 4~5 世紀に遡る『教父たちの生涯』(Vitae Patrum)中の「最後の審判」についての小話である。行間や欄外に細かな字で書き込まれたスペイン語による注記を、以下のテキストでは括弧内に示した。

って、もはや緑色ではないという瞬間がある。つまり、ラテン語ではなくスペイン語となった最初の証拠がどこにあるかを探る問題である」

³ 太田 (1988, 89) によれば、ここに書かれているラテン語(中世ラテン語)はあまり教養のない人によって書かれたと思われ、俗語(当時の話し言葉であった黎明期のスペイン語)の反映と思われる誤りが多数見られる、という。

⁴ 転載許可: Real Academia de Historia. 2008/2/19

(1)

Et ecce repente (lueco) unus de principibus ejus ueniens adorabit eum. Cui dixit diabolus unde uenis? Et respondit: fui jn alia prouincia et suscitabi (lebantai) bellum (pugna) et effusiones (bertiziones) sanguinum ... similiter respondit: jn mare fui et suscitabi (lebantau) conmotiones (moueturas) et submersi (trastorne) nabes cum omnibus...

【語句】⁵lueco > luego すぐに **lebantai** > levanté 引き起こした **bertiziones** > efusiones, derramamientos 流すこと **lebantau** > levanté 引き起こした **moueturas** : agitaciones 騒動 **trastorne** > trastorné.

【訳】ここですぐに首領の一人がやって来て彼（悪魔）に挨拶した。その者に悪魔は「お前はどこから来たのか」と聞いた。すると彼は答えた「私はよその土地におりました。そして戦さと流血を引き起こして参りました」…同様に彼は答えた「私は海へ行って嵐を引き起こし皆を乗せた船を転覆させました」

このラテン語の本文の中の括弧内の注記は行間や欄外に当時のロマンス語⁶の形で書き込まれたものである。このテキストの中にすでに後のスペイン語の形を窺わせるいくつかの現象が見られる。Lat.locus > lueco (o>ue) には二重母音化があるし、bertiziones や terzero (<Lat. tertarius) には破擦音化 ([tj] > [ts]) が起きている。文法形態については-tura による動作名詞 (>-dura)、そして点過去の1人称単数形-éに至る段階-avi > -ai > -éがそろって出ている (levantau, levantai, trastorne)⁷。

⁵ 当時のスペイン語は現代スペイン語の形とかなり異なるので、以下では変化の前と後を「>」の記号と使って示し、語源の異なるものは「:」で示す。

⁶ 「ロマンス語」(Romance) とは俗ラテン語から派生した当時の話し言葉のことである。また、今日のスペイン語やフランス語、イタリア語、ルーマニア語などは「ロマンス諸語」(lenguas romances, lenguas románicas) という。

⁷ lueco や mouetura の-c-や-t-には、まだ有声化の^キ兆しが現れていない。「注解」の作者の方言（リオハ方言 el riojano）はこの点でいくぶん保守的であった。なお、Wolf (1996, 1997) は Glosas がリオハ方言ではなく、むしろ古アラゴン方言の特徴を示していると主張している。

(2)

Incipiunt sermones cotidiani beati Agustini. Gaudeamus fratres karissimi et Deo gratias agimus, quia uos, secundum desideria nostra, jncolmes (sanos et salbos) jnueniri meruimur (izioqui dugu). Et uere fratres juste et merito (mondamientre) pater gaudet quotiens filios suos et corpore sanos et Deo deuotos (promissiones) jnuenerit;

【語句】 **sanos et salbos** > sanos y salvos 無事に **izioqui dugu** : lo hemos encendido (バスク語、ただしラテン語の意味と一致しない) **mondamientre** > puramente, limpiamente **promissiones** > promesas 約束

【訳】 福者アウグスティヌスの毎日の説教が始まる。「親愛なる兄弟たちよ、喜びなさい、そして私たちは神に感謝を捧げましょう。なぜなら、あなたがたは私たちが希望がかなって無事であったからです。そして、主はその子らが健全にそして神に忠実であるのもご覧になったので、確かに主は正しく清い心のあなたがたをお喜びになっておられるのです」

副詞語尾 **mente**

スペイン語の副詞語尾 **mente** はラテン語 **mens** 「気持ち」に由来するが⁸、古くは **mientre** という語形が使われていた。これは後の *Cantar de Mio Cid* などでも多く見られる。

さて、この千年前の修道士は辞書⁹の引き方を間違えることがあった。**deuotos : promissiones** というのは意味的に見ておかしい。これはラテン語 **deuotos** を **de uotos** と誤って切り **uotos : promissiones** と解釈している。辻褄のあわない意味をそのままにしておいたのだろうか。

(3)

Intelligite (jntellegentja abete) karissimi, quia non jdeo christiani facti sumus ut dejsta vita tantum solliciti simus (ansiosusegamus) ... Non nobis sufficit (non conuienet anobis) quod chirstianum nomen

⁸ これに対して**英語の副詞語尾 ly** は古英語 (OE) の **lic** 「体」 (:body) に由来する。

⁹ 異なる「注解」に同じロマンス語形が繰り返し出現するので今日では失われているラテン語とロマンス語の**語彙集(Glosario)**が使われていたと推測されるが(Menéndez Pidal, 1942)、これには異説がある (Wright, 1989).

accepimus si opera christiana non facimus...

【語句】 **jntellegentja** > *inteligencia* 聡明さ **abete** : *tened* 持て (命令)
ansiosusegamus > *ansiosos seamos* 願うことにしよう **nos sificieremus** > *si nosotros hicieremos* もし我々がしようものなら **guedc ajutuezdugu** : *nosotros no nos arrojamus* (バスク語) 我々は墜ちるだろう **non conuenienet anobis** > *a nosotros no nos conviene*

【訳】 親愛なる人々よ。現世のことを望むだけで私たちはキリスト教徒になつたのではないということを理解しなさい。…キリスト教徒らしき行いをせずに、キリスト教徒の名をいただくだけでは足りないのです。

haber と tener

「持つ」はフランス語では *avoir* (< Lat.habere) であるが、現代スペイン語では *tener* (< Lat.tenere) を使う。しかし、スペイン語でも古くは *avere* (> Mod. *haber*) が使われていたことがこの十世紀の文献からわかる (*abete*). *vosotros* の命令形-ed は、まだラテン語の -ate, -ete, -ite のままであったらしい。

(4)

... Nolite uos occupare (parare uel applicare) ad litigandum (demandare) set potius (plus maijus) ad orandum, ut non rixando Deum offendere (gerrare).

【語句】 **plus maijus** > *más* さらに **gerrare** > *errar* 怒らせる

【訳】 争いよりも祈りを望まなければならない。争いによって神の怒りに触れないように。

比較級

ラテン語の *occupare* には 2 つのラテン語の注 (*parere uel applicare*, *demandare*) がある。また Lat. *potius* にも 2 つの語が並んでいる。 *plus* (<Lat.*plus*), *maijus* (<Lat.*magis*)。現代語では後者に由来する *más* が用いられるが、当時は両方が並存していたようだ¹⁰。

¹⁰ 隣のフランス語や中央のイタリア語では新しく出現した *plus*, *più* である。一方、*maijus* はポルトガル語 (*mais*) やルーマニア語 (*mai*) など周辺地域に残存している。ラテン語の比較級は形容詞の変化形によるものであった。

次の一節にはとくに注目したい。

(5)

... adjubante domino nostro Jhesu Christo cui est honor et jmperium cum Patre et Spiritu Sancto jn secula seculorum [conoajutorio de nuestro dueno, dueno Christo, dueno Salvatore, qual dueno get ena honore, equal duenno tienet ela mandajtjone cono Patre, cono Spiritu Sancto, enos sieculos delosieculos. Facanos Deus omnipotes tal serbitjo fere ke denante ela sua face gaudioso segamus. Amem.]

【語句】**conoajutorio** > con la ayuda 援助によって **dueno** > dueño 主 **Salvatore** > salvador 救世主 **get** > es ...である **tienet** > tiene 持つ **mandajtjone** (> mandar) 力 **cono** > con el **Patre** > padre 主 **Spiritu Sanctu** > Espiritu Santo 聖霊 **enos** > en los **sieculos** > siglos **Facanos** > Háganos 我らに...させてください **serbitjo** > servicio 奉仕 **fere** > hacer する **ke** > que **denante** > delante ...の前で **ela** > la (冠詞) **sua** > su 彼の **face** > faz, cara 顔 **gaudioso** > gozoso (次の segamus の最初の s- と融合したため複数を示す語尾 s がない) **segamus** > seamos **Amem** > Amen アメン.

【訳】^{ほま}誉れ高く、また未来永劫にわたって父であり聖霊とともに支配される我らが主イエスキリストの御力によって…

これまでは語句の注解ばかりであったが、ここに当時の言葉で書かれた完全な文がある。次がその現代語訳である¹¹。

Con ayuda de nuestro Señor don Cristo, don Salvador, Señor que está en el honor y Señor que tiene el poder con el Padre y con el Espíritu Santo. Háganos Dios Todo poderoso hacer tal servicio que delante de su faz seamos gozosos. Amén.

【訳】誉れ高く父と聖霊とともに未来永劫に支配されるわれらの主キリスト、救い主のお力によって。全能の神よ、われらがあな

Lat. Petrus *fortior* est quam Paulus. Sp. Pedro es *más fuerte* que Pablo. / Po. O Pedro é *mais forte* do que o Paulo. / Fr. Pierre est *plus fort* que Paul. / It. Pietro è *più forte* di Paolo. / Rum. Petru este *mai puternic* decât Pavel. 例文は伊藤太吾 (1994), p.118 から.

¹¹ cf. Juan B. Olarte Ruiz. (1977) p.17.

たの拝顔の喜びを享受できますようにわれらを奉仕へと導きたまえ。アメン。

el + 女性名詞

elo, ela はラテン語にはなかった定冠詞である。この elo, ela はその対格の Lat.illu(m), illa(m) にさかのぼり、ラテン語では「あの」という意味の指示詞であった。現代語で el agua のように、アクセントのある a- (ha-) ではじまる女性名詞の前に el という形が用いられるのは、ela + agua の2つの a の連続が融合したためである。よって歴史的に見れば agua の前で「男性」冠詞 el が使われている、ということではない。

融合形

最初の語は cono と ajutorio に分けられる。cono は前置詞 con と定冠詞 elo の融合形である。elo は -n で終わる前置詞がつくとはじめに語頭の e- が脱落し(>enlo)、さらに -nl- が融合して -nn- となり、これが弱勢であったために -n- と短縮したものと考えられる。同様な融合は前置詞 en でも起こる(en los > enos)¹²。

母音の変化

nuestro はすでに現代語形である。Lat.noster の対格 nostrum に由来する。dueno Christo の dueno は敬称であって、Mod.Sp.don となった¹³。sieculos は saeculu(m) の ae > e が二重母音化して ie となったもので、この e > ie も先の o > ue と同様にスペイン語の特徴である。

hacer

この節に fere (< Lat.facere) という不定詞がある。ラテン語にあった4つの動詞活用型、-a:re, -e:re, -ere, -i:re はスペイン語では -e:re と -ere が合流した結果、-ar, -er, -ir の3種となった。その例外が fac(e)re > Med. fer である。

¹² 前置詞と定冠詞の融合はとくにポルトガル語やイタリア語で顕著である。Po. em + o > no, em + a > na; por + o > pelo; por + a > pela. It. con + il > col, con + la > colla; in + il > nel, in + la > nella. これに対してフランス語では、à + le > au, à + les > aux, de + le > du, de + les > des のように、融合する前置詞は à と de に限られる。現代スペイン語では、さらにその単数形に限られる。Sp. a + el > al, de + el > del.

¹³ don と dueño のように同一の語源を持ちながら異なる音韻変化をたどったために別の語となった2語(同語源異形)を「**二重語**」(doblete) という。

しかし、これも後にほかの er 動詞の類推(analogía)が働いて Mod. hacer となった。

異化

つぎに注目したいのは *denante ela sua face* である。まず、*denante* (< Lat. *de in ante*) は後に Mod. *delante* となったが、これは2つの *n...n* の連続を避け *l...n* としたためである。このように、1つの音が別の音を異なるものにする働きを「異化」(*disimilación*)という。*ela* は先に見た定冠詞 *elo* の女性形で、次の *sua* は所有形容詞 *suo* (Lat. *suus*) の女性形である。現代語では定冠詞を所有形容詞の前につけないが、当時のスペイン語では定冠詞がついていた。

文法形態

文法形態については**定冠詞** (Lat. *illu* > *elo*, *illa* > *ela*)、**前置詞と冠詞の融合** (*cono* > *con el*; *enos* > *en los*)、**-mientras** という**副詞語尾**、**点過去形** *-é* (*-ávi* > *-ái* > *é*) などの変化に注目したい。

語彙

語彙の面でも多くの言葉がラテン語と^{なと}袂を分かつこととなった。*matata* (:Lat. *strages*), *culpauiles* (:Lat. *reus*), *uotas* (:Lat. *nubtias*)。また *sano y salvos* (:Lat. *incolmes*) など現代語でも使われる熟語がすでに現れていた。

こうしてヨーロッパの南西端の半島に産声をあげたスペイン語は母なるラテン語の多くを継承しながらも独自の道を歩み始めた。

文字と発音

現代スペイン語には、*a*, *b*, *d* などのように、1つの音だけを示している文字がある一方、*c*, *g* などのように、2つの音を示す文字があるのはなぜだろうか。*[b]* という1つの音を示すのになぜ *b* と *v* という異なる文字があるのだろうか。*ch*, *ll* のように、2つの文字で1つの音を示したり、*ñ* という英語などにはない文字があるのはなぜだろうか。先のような古いテキストを読むと、現代スペイン語の文字と発音の関係がどのような理由に基づくのかがわかる。

「注解」の原文はビシゴード文字とよばれる手書きの書体で書かれてあるので少し読みにくいだが、上のテキストと照合すればどうにか文字を辿っていける。ここで気をつけたいことはそれぞれの文字が何の音を示していたか、という点である。アルファベットは基本的に意味ではなく音を示すので、書かれたとおりに発音できるのだが、一部注意しなければならない文

字がある。それは、ラテン語から変化した音を示す文字である。

スペイン語で新しくできた音としてとくに重要なのは母音では **ie, ue** という二重母音であり、子音では現代語で **ch, ll, ñ** など書かれる硬口蓋音である¹⁴。新しく生まれた音を文字で示すには次の3つの方法が考えられる。(1) 二重母音 **ie, ue** のように古い文字をそのまま使う。(2) **ch, ll** のように古い文字を2つ組み合わせる。(3) **ñ** のように新しい文字を作る。このように現代語の文字はそれぞれ合理的だが、千年前は音と文字の関係がまだ確定されていなかったようだ。たとえばテキストにある **dueno** [due[→]o] という語では二重母音は確かに表記されているが、**[[→]]** を示す **ñ** という文字はまだ考案されていなかったもので **n** のままである。

また、**serbitjo** は当時 [serbítio] と発音されていたと思われる。これが現代スペイン語では **servicio** [serbíθio] となった。**serbitjo**(「注解」)の文字 **b** は [b] の発音を示しているが、現代スペイン語の **servicio** の **v** はラテン語の語源(**servire**「仕える」)に基づく。**servicio** の **c** の[θ]という発音は **i** と **e** の前で起きた [ti] > [ts] > [θ] という変化によるものである。一方、**a, o, u**の間ではそのような変化が起きなかったため、**con** のように [k] のままである。**g** も同様に **i** と **e** の前で [xi, xe] 「ヒ、ヘ」という音に変化した。

強勢母音の変化

強勢母音の全体の変化を示すと次のようになる¹⁵。

| | |
|----------------|-----------------------------|
| Lat.ǎ > Sp. a | Lat.lātus > Sp. lado 側 |
| Lat.ā > Sp. a | Lat.grānu > Sp. grano 粒 |
| Lat.ĕ > Sp. ie | Lat.tĕrra > Sp. tierra 土地 |
| Lat.ĕ > Sp. e | Lat.rĕte > Sp. red 網 |
| Lat.ĭ > Sp. e | Lat.cĭbu 食物 > Sp. cebo 餌 |
| Lat.ī > Sp. i | Lat.fĭcu > Sp. higo イチジク |
| Lat.ŏ > Sp. ue | Lat.nŏvu(m) > Sp. nuevo 新しい |

¹⁴ これら2つの現象は隣接する東西の2つの言語、ガリシアポルトガル語 (gallego-portugués) やカタルーニャ語とは異なるスペイン語の特徴である。先のテキストの中には次の例がある。

Lat.loco > Med. luco (>Mod. luego)

Lat.noster > Med. nuestro

Lat.tenet > Med. tiene

Lat.signale > Med. seingnale [señále] (>Mod. señal)

¹⁵ Menéndez Pidal (1968), p.44.

Lat.ō > Sp. o Lat.leōne > Sp. león ライオン
 Lat.ŭ > Sp. o Lat.bŭcca 頬 (ほほ) > Sp. boca 口
 Lat.ū > Sp. u Lat.cūpa > Sp. cuba 桶 (おけ)

無強勢の母音の変化

ここで無強勢の母音も整理しておこう。はじめに、語頭の位置では次の変化を経て5つの母音が生まれた。

Lat.ă > Sp. a Lat.ărātru > Sp. arado 鋤
 Lat.ā > Sp. a Lat.pa→nāria > Sp. panera パンかご
 Lat.ě > Sp. e Lat.těrrēnu > Sp. terreno 土地
 Lat.ē > Sp. e Lat.sēcūru > Sp. seguro 確かな
 Lat.ĭ > Sp. e Lat.plĭcare > Sp. llegar 到着する
 Lat.ī > Sp. i Lat.fĭcaria > Sp. higuera イチジクの木
 Lat.ō > Sp. o Lat.dōlōre > Sp. dolor 痛み
 Lat.ō > Sp. o Lat.sōlanus > Sp. solano (植) イヌホオズキ
 Lat.ŭ > Sp. o Lat.lŭcrāre > Sp. lograr 得る
 Lat.ū > Sp. u Lat.dūritia > Sp. dureza 堅さ

次は語末の無強勢母音の変化である。その結果、a, e, o の3つの母音になった。

Lat.ă > Sp. a Lat.causă(m) > Sp. cosa こと
 Lat.ā > Sp. a Lat.causās > Sp. cosas こと (複)
 Lat.ě > Sp. e Lat.patřēm > Sp. padre 父親
 Lat.ē > Sp. e Lat.patrēs > Sp. padres 両親
 Lat.ĭ > Sp. e Lat.legĭt > Sp. lee 彼は読む
 Lat.ī > Sp. e Lat.dixī > Sp. dije 私は言った
 Lat.ō > Sp. o Lat.amō > Sp. amo 私は愛する
 Lat.ō > Sp. o Lat.servōs > Sp. siervos 奴隷 (複数)
 Lat.ŭ > Sp. o Lat.servŭm > Sp. siervo 奴隷
 Lat.ū > Sp. o Lat.lucūs > Sp. lagos 湖¹⁶

¹⁶ 以上は Menéndez Pidal, *Gram.Hist.* の例であるが、語末の長母音にはラテン語の複数対格の例をあげている (Lat.causs, patrs, servs, lacs). これはロマンス語で-s という複数語尾が確立して、直接に cosa + -s > cosas になったとも考えられる。

異なる文字

10~13 世紀の発音と文字の関係がまだ統一されていなかった。しかし、そこには一定の傾向があった。以下はそれぞれの発音に対して用いられた異なる文字を並べたものである。

- (1) 二重母音 : [ie] i, e, ie // [ue] o, oi, u, ue
- (2) 硬口蓋音 : [ɟ] g, j, i, y, z // [ɲ] ni, nj, ng, gn, nn, n // [ʎ] li, lu, ll // [ʃ] x, ix, sc, isc, ss // [dʒ] li, lli, g, j // [tʃ] g, i, gg, x, ch
- (3) その他 : [ts] z, c, ç, cc // [z] -s- // [β] b, u, v

語根母音変化動詞 (1)¹⁷

現代語の語根母音変化動詞の活用形は歴史的には e > ie と o > ue の二重母音化から説明される。

| pensar | | contar | |
|------------------|------------------|------------------|------------------|
| pi <u>en</u> so | pensamos | cu <u>en</u> to | contamos |
| pi <u>en</u> sas | pensá <u>is</u> | cu <u>en</u> tas | contá <u>is</u> |
| pi <u>en</u> sa | pi <u>en</u> san | cu <u>en</u> ta | cu <u>en</u> tan |

それぞれの活用形の中で語根の e や o に強勢がある語形で二重母音化が生じるのである。これら二重母音化がおこる動詞はラテン語の短母音に起源のあるものだけで、たとえば *debere* > *deber* や *orare* > *orar* はラテン語の長母音に由来するので二重母音化はない。また *presentar* や *adorar* などは後期にラテン語から直接スペイン語に取り入れられた語なので¹⁸、やはり二重母音化はない。

●課題

- 【課題 1a】 ラテン語とスペイン語の名詞と動詞の変化形を比較しなさい。
- 【課題 1b】 ラテン語とスペイン語の語の形と意味を比較しなさい。
- 【課題 1c】 スペイン語の民衆語と教養語を語形（音韻）と意味の面から比較しなさい。
- 【課題 1d】 テキスト(5)の写真の文字について気づいたことを述べなさい。

¹⁷ *pedir, sentir, dormir* のタイプは 2 で扱う。

¹⁸ 後期にラテン語から直接スペイン語に取り入れられた語をスペイン語学の用語で「教養語」(*palabra culta, cultismo*) という。一方、話し言葉のラテン語が変化して伝わった語を「民衆語」(*palabra vernácula*) と呼ぶ。

【参考】

- Alatorre, Antonio. 1989. *Los 1,001 años de la lengua española*. México: Fondo de Cultura Económica.
- Alonso, Dámaso. 1958. "El primer vagido de la lengua española", en *De los siglos oscuros al de oro*. Madrid: Gredos.
- Díaz Díaz, Manuel. 1978. *Las primeras glosas hispánicas*. Barcelona.
- 伊藤太吾. 1994. 『ロマンス語学入門』大阪外国語大学。
- Lapesa, Rafael. 1981. *Historia de la lengua española*, novena edición. 9ª ed. Madrid, Gredos. 山田善郎監修、中岡省治・三好準之助訳『スペイン語の歴史』昭和堂、2004. とくに、Cap.VI.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1942. *El idioma español en sus primeros tiempos*. Madrid. Espasa-Calpe. Colección Austral.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1968¹³. *Manual de gramática histórica española*, Madrid: Espasa-Calpe. 近松洋男訳『スペイン語歴史文法教本』風間書房、1996, とくに Cap. I, II.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1980⁹ *Orígenes del español*, (9a ed.) Madrid: Espasa-Calpe.
- Ministerio de Educación y Ciencia, 1977. *Las glosas emilianense*.
- Olarte Ruiz, Juan B. 1977. "En torno a las glosas emilianenses", Ministerio de Educación y Ciencia
- 太田強正. 1988, 1989. 「Glosas Emilianenses 研究 I, II」『ロマンス語研究』(日本ロマンス語学会), 21, pp. 43-53; 22. pp.31-77.
- Quilis Merín, Mercedes. 1999. *Orígenes históricos de la lengua española*. Universidad de Valencia.
- Torreblanca, Máximo. 1992. "En torno a las glosas emilianenses y las silenses", en *scripta philologica in honorem Juan M. Lope Blanch*, México. UNAM, pp.469-479.
- Wright, Roger. 1982. *Latín tardío y romance temprano en España y la Francia carolingia*. Madrid. Gredos.
- Wolf, Heinz Jürgen. 1966. *Las glosas emilianenses*. Sevilla.
- Wolf, Heinz Jürgen. 1997. "Las glosas emilianenses, otra vez", *Revista de Filología Románica* (Univ. Complutense), 14, pp.597-604.

2. アンダルシアの光…ハルチャの詩

Jarchas (10~11 世紀)

Andalucía の Córdoba 市の郊外メディナ・アサーラ (Medina Azahara) 遺跡は 10 世紀アブデラマン 3 世 (Abderramán III, 929-961) が莫大な富の使い道として王妃アサーラのために作らせた宮殿である。今でもアーモンドの木に囲まれた華麗な建築物の跡がイスラム支配下のアンダルシアの往事の繁栄を偲ばせている。



Medina Azahara, Córdoba

当時アラビア語を話すイスラム教徒の支配下でロマンス語¹⁹を維持していたキリスト教徒たちがいた。モサラベ(mozárabe)とよばれるこの人々の言語はカスティーリャ語

(castellano)よりも古い形を残していた。かつてはこの言語の様子を知るための資料は少なく、法令集の中の用語や地名、植物名などに限られていた²⁰。

ところが、最近になって古いアラビア語の文献の中に埋もれていた叙情詩が実は当時のスペイン語の話し言葉で書かれているということが解明された²¹。それはアラビア語の長詩モアシャッハ(moaxaja)の末尾に付されたハ

¹⁹ 口語ラテン語から派生した各地の言語を「ロマンス語」(romance)という。現在のスペイン語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語、ルーマニア語などの「ロマンス諸語」(lenguas románicas)のそれぞれの原初の形である。

²⁰ Galmés de Fuentes (1983).

²¹ Watt はハルチャが「大衆的起源のものという性格をもっており、おそらくはアラビア語を理解する聴衆の前で土着の女芸人が唄った歌だったと推測される」と述べている(黒田訳 p.153)。しかし、ハルチャの言語はアラブまたはヘブライ詩人が支配者の立場から再現したモサラベ(被支配者)の言語である、とも考えられる。Gorton (1982)を参照。それならば、jarcha の

ルチャ(jarcha)とよばれる短詞で、多くは女性の心を歌っている²²。

ハルチャを含むモアシャハという詩形は、メディナ・アサーラを建造した Abderramán 3 世の時代に、Córdoba 近郊の町 Cabra の詩人 Muqaddam ibn Muafa または Muhammad ibn Hammud が創始したと伝えられる。アンダルシアから発したこの鮮烈な光は文字と言語の高い障壁を築き、その後一千年もの間、闇の彼方で人の接近を拒み続けていた。

ヘブライ文字のハルチャ

ハルチャは当時のアラビア文字またはヘブライ文字で書かれていたためスペイン語話者には文字の理解が困難であった。また、モアシャハはエジプトなど東方に伝わったものの、アラビア語圏の人々はハルチャの部分のスペイン語がわからず首を傾げていた。このような状況の中で 1948 年イギリスのヘブライ語学者 Samuel Stern がハルチャを再発見し、その文献学的な解釈に成功したのは画期的な業績であった。次は学界の注目を浴びた Stern の論文にある詩の一編である(11 世紀前半 Yosef el escriba の作)。

tnt 'm'ry tnt 'm'ry hbyb tnt 'm'ry
'nfrmyrwn wlyws gyds dwln tnt m'ly

ヘブライ文字で書かれた原文がローマ字に転写されている。たとえば最初の 2 語 tnt 'm'ry は原文で ת (t), ו (n), ת (t), א ('), מ (m), א ('), ר (r), י (y) が右から連続して תות אמארי となっている。このようにヘブライ文字は一般に子音ばかりで書かれるので一見したところスペイン語とは思えない。Stern は母音を補うことによってこれを tanto te amaré という意



Muqaddam ibn Muafa,
Cabra

スペイン語はモサラベの言語そのものではなく、少し距離をおいてその反映である、と見なければならぬだろう。

²² 後で見ると、正則アラビア語詩の後に閃光のように輝く恋愛詩が民衆の言葉(ロマンス語)で歌われる、という趣向が生み出す効果のほどは時間と空間を遙かに超えた我々にでも十分に想像できる。cf. P. Dronke (1996), とくに第 3 章。

味に解し、次のような恋の歌を復活させた²³。母音を補うと次のようになる。

(1)

| |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Yosef el escriba (11 世紀前半, Stern 18) Tan te amaré, tan te amaré, habib, tan te amaré, Enfermeron welyos gueras (?), ya dolen tan male. |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

【語句】 **tan** > tanto とても **habib** = amante (アラビア語) 恋人 **enfermeron** > enfermaron 病気にした **welyos** > ojos 目 (Lat. oculus)²⁴ **gueras** (?) = cuidados 心配 **dolen** > duelen 痛む **male** > mal ひどく

【訳】 愛しい人よ、私はあなたをととても愛することでしょう／心の苦しみで (?) この目は病んでしまった、これほど痛いくらいに。

アラビア文字のハルチャ

ヘブライ文字のハルチャを解読した Stern に続いて 1952 年今度はスペインのアラビア語学者 Emilio García Gómez がアラビア文字で書かれたハルチャの詩を解読した²⁵。次はその一つである。

(2)

| |
|---------------------------------------|
| Muhammad ibn Ubada (11 世紀末; Stern 22) |
|---------------------------------------|

²³ ハルチャが当時のスペイン語の口語で書かれていたことは、つとにエジプトの学者イブン・サナ・アル・ムルク (Ibn San al-Mulk) が指摘していたが、これを再発見し文献学的な解釈を決定したのは英国の Samuel M. Stern (1948)であった。これはモサラベの言語 (スペイン語) そのものではなくアラビア語話者がスペイン語で表現したものであるかも知れない。いずれにしても当時のスペイン語の様子を知るための貴重な資料になる。

²⁴ 現代語の -ll- [ʎ] は Lat. -ll- に由来する。caballus > caballo; scintilla > centella. よって、後に [ʎ] > [x] と発達する Med. -c'l- や -g'l- と区別しなければならない。Rafael Lapeza (1981), p.168-169.

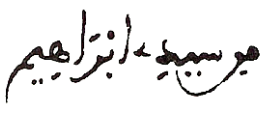
²⁵ E. García Gómez はハルチャがモアシャハに付加されたものではなく、むしろハルチャが先行し、後でモアシャハがハルチャの枠として作詞された、と述べている(1965, p. 29 y sigs.). この説が正しければ、それはイベリア半島における民衆詩の伝統の存在を裏付けるといふ文学史上の意味だけでなく、ハルチャの言語が民衆の話すロマンス語の形態により接近することになるので、言語史的にも重要な意味を帯びる。

Meu Sidi 'Ibrahim, ya nomne dolje, vent' a mib de nojte.
 In (?) non, si non queris, yirey m'a tib. Gar me 'a ob legarte

【語句】 **meu** > mi 私の **Sidi** (Ar.アラビア語) = Señor 主人 **ya** (Ar.) = ¡oh!
omne > hombre 男 **dolje** > dulce 優しい **vent'** > vente 来てください (命令)
a mib > a mí 私のところへ **nojte** > noche 夜 **In** (Ar.) = Si もし…ならば
non keris > no quieres あなたが望まないならば **yirey m'** > me iré 私が行きます
a tib > a ti あなたのところへ **Gar** (Ar.) = Di 言って(命令) **a 'ob** > a
 donde どこへ **legarte** > llegarte あなたに会うために

【訳】 ああ、やさしいお名前の私のご主人イブラヒム様、夜に私の家に来て
 ください。もしお望みでないなら、私が行きますから、どこでお会いで
 きるか教えてください。

アラビア文字は不明瞭な部分が多く、上の解釈もこれまでに多くの試み
 があったものの一つに過ぎない。たとえば最初の **Meu Sidi 'Ibrahim** の部分
 を写本で確かめると次のような手書き文字になっている(【図1】)。アラビ
 ア文字もヘブライ文字と同じように右から左に読む。

【図1】 

【図2】 

ハルチャの古文字について詳細な研究をした Alan Jones によれば、【図1】
 の最初の2文字が続いた部分はアラビア語の م (m) + و (w) = مو (m-w) と
 も読めるし、 ف (f) + ن (n) = فن (f-n) とも読める。前者の解釈では mew、
 つまりロマンス語の mio (>mi) 「私の」という意味になるが、後者の解釈
 では fen つまりロマンス語の ven 「来て(命令)」という意味になる。

先の m-w の解釈にしたがうと所有詞 **meu** は未だ古い形を保っている。
 これは後に中世スペイン語 **mio** > 現代スペイン語 **mi** となる。次の **ya** はア
 ラビア語の感嘆詞で、12世紀の『わがシッドの歌』に頻出する。**nomne** や
nojte は **nominem** > **nomne** > **nombre** と **nocte** > **noite** > **noche** という音声変化
 の中間段階を示している。

次はこのハルチャ全体の Jones による文字化を簡略に示したものである。

fen (mew) sidi Ibrahim, ya nwamni dalji, fanta mib di nuxti
 in nun shi-nun karish, fireme tib, gari mi ub legarti

ここに子音だけでなく母音も付されているのは、アラビア語の原典にあ

る母音符号などを考慮に入れ文献学的な解釈をほどこしたためである。

学者によって解釈の異なるもう一つ別の例を挙げると、最後の句 *legarti* がある(【図 2】)。これを *لفرت* (-f-r-t) とする説もあるが、Jones は *ف* (f) の上に付けられる点がスペインなどの西方アラビア語では下に付けるので、これはむしろ *g* を示す *غ* でなければならないと主張し、全体を *ل(1) + غ(g) + ر(r) + ت(t) = لغرت(l-g-r-t)* とした。前者の解釈ではスペイン語の *verte* 「あなたに会う」、後者の解釈では *llegarte* 「あなたの場所に行く」になる。

ハルチャの「発見」以来これまでの半世紀間の諸研究は多くの論争を引き起こし、未だ解釈が決定できないものが多い。スペイン語とアラビア語・ヘブライ語のそれぞれの専門家間の共同研究が待たれている。

口蓋化と音韻交替

noche や *llegar* に見られる口蓋化は中世スペイン語の初期に起きた重要な音韻変化である。現代スペイン語で、この口蓋化がある**継承語**(*voz patrimonial*)とそれがない**教養語**(*voz culta*)が次のように対応している²⁶。

| | 継承語 | 教養語 |
|---------------|-------------------|--------------------------|
| ñ : mn | <i>sueño</i> 眠り | <i>insomnio</i> 不眠 |
| ñ : gn | <i>señal</i> 印 | <i>signo</i> 印 |
| j : li | <i>concejo</i> 議会 | <i>reconciliar</i> 和解させる |
| ll: l | <i>cabello</i> 髪 | <i>capilar</i> 髪の毛 |

ほかにも継承語の **-ch-** と教養語の **-ct-** の対応がある。*despecho* 侮蔑 - *despectivo* 軽蔑的な; *noche* 夜 - *nocturno* 夜の; *ocho* 8 - *octavo* 8 番目の。

一般に教養語はラテン語形の形を大きく変えていないので他のロマンス諸語やヨーロッパの言語と共通するものが多いが、継承語は固有の音韻変化を辿ってきたのでスペイン語の個性をよく示している。

音挿入

Lat. *nomine* > Sp. *nombre* の過程に見られる **-min-** > **-mn-** > **-mbr-** について

²⁶ 「継承語」は話し言葉としてのラテン語をスペイン語が継承した語で、多くの音韻変化を経ているためラテン語とは形がかなり異なる。民衆が日常生活で使う語彙であり、ラテン語の意味が変化していることも多い。一方「教養語」は書き言葉としてのラテン語がそのままスペイン語に導入された語であり、ラテン語の形式と意味が比較的よく保たれている。

考察しよう。はじめに強勢のない語中の *-i-* が消失し、*-mn-* となったのであるが、ここから *-mbr-* に至るには途中に *-mr-* を想定しなければならない (*-mn-* > *-mr-* は異化による)。次に *-b-* が挿入されるのだが、これは *-m-* の両唇の閉鎖と鼻腔の開放から直ちに *-r-* の両唇の開放と鼻腔の閉鎖に移行するときに、途中に次に示すような中間の性質を持つ *-b-* が挿入されたためである。これを「音挿入」 *epéntesis* という。

| | -m- | -b- | -r- |
|----|------------|------------|------------|
| 両唇 | 閉鎖 | 閉鎖 | 開放 |
| 鼻腔 | 開放 | 閉鎖 | 閉鎖 |

語根母音変化動詞

スペイン語の音声史の上で重要な変化の 1 つにラテン語の強勢短母音の二重母音化がある。モサラベが話していたスペイン語にも早くからこの二重母音化があったことが他の資料によって知られているので、先に示したヘブライ文字のハルチャの *d-l-n* とアラビア文字のハルチャの *k-r-s* も、それぞれ *dolen*, *quieres* ではなく *duelen* と *quieres* のような発音であったと推定される。

さらに興味深いのは先のヘブライ文字のハルチャにある *ויליוש* (*wlyws*) である。これまで学者によって、*welyos*, *oiyos*, *uelios*, *uelyos*, *welyos*, *welyosh*, *olyos* という様々な文字化が提案されているが、これらはすべて現代スペイン語の *ojos* (目[複数]) にあたりラテン語に遡れば *oculus* になる。*cul* の部分が口蓋化して [ʎ] [リュ]に変化するが、このような口蓋化された音の前で *o* > *ue* という二重母音なるのはスペイン語音声史ではめずらしくモサラベの特徴とされる。カスティーリャ語では *o* に留まり、最終的に現代スペイン語の *ojo* という形になった。

二重母音化は現代スペイン語の *pensar* (考える), *perder* (失う), *contar* (数える), *mover* (動く) など多くの語根母音変化不規則活用を生んだ。強勢が条件となるので、*pienso*, *piensas*, *piensa*, *piensan* では *e* > *ie* の変化があるが、*pensamos*, *pensáis* では強勢が語尾にあるため二重母音化しない。

語根母音変化といえば、*pedir* (頼む), *medir* (計る) などの *ir* 動詞で、*vido*, *pides*, *pide*, *piden* というように語根母音が *i* という閉母音に変化するものがある。これはラテン語の *petio* の *io* という語尾が前にある *e* の母音を変化させて(開口度が狭い母音にして)、*petio* > *vido* となったためである。ただし、語尾に(二重母音ではない) *i* がある *pedimos*, *pedís* で *pidimos* のような *i-i* という同じ母音の連続を嫌い、*pedimos* のような *e-i* という形に落ち着

いた。sentir や dormir では二重母音化と閉母音化が同時に起きている²⁷。

語根母音変化という現代スペイン語動詞活用の最難関の峠は、ハルチャの詩が歌われていた時代以前に遡るスペイン語の造山活動の結果である。

■テキスト

(3)

Abu Bakr Yahya ibn Baqi (1145; Stern 5)
Vénid la Pasca, ed yo, sin elle!
como ... meu corachón por elle!

【語句】 **Vénid** > viene 来る **la Pasca** > la Pascua 過ぎ越し祭 **ed** > y そして **elle** > él **meu** > mi) 私の **corachón** > corazón 心臓

【訳】 過ぎ越し祭がやってくるというのに私の彼はいない。あの人のためにこんなに苦しい私の胸。

(4)

Abraham ibn Ezra (1167; Stern 15)
Gar, qué farayu? Cómo vivirayu?
Este al-habib espero. Por el morrayu.

【語句】 **farayu** > haré (私は) ... しよう **vivirayu** (Lat. vivere + habeo) > viviré (私は) 生きていこう **al-habib** (Ar.) = mi amigo 恋人²⁸ **morrayu** > moriré (私は) 死んでしまうだろう

【訳】 どうしたらよいのか教えておくれ。どう生きていけばよいの？ 恋人を待つ私は、その人のために死んでしまうのでしょうか。

²⁷ 私はスペイン語の動詞活用で一番複雑な語根母音変化動詞の活用を学生に説明するときに、e>ie, o>ue という変化をする動詞に働く強勢という条件と、e>i, o>u という変化をする動詞に働く語尾 i の条件を示している。後者は複雑なようだが要するに、語尾に(二重母音ではない) i があるとき語根母音は e, o となり、それ以外で語根母音は i, u になる、という規則にまとめられる。

²⁸ amigo は「友」ではなく、「恋人」。

未来形

この詩には 3 つの未来形が使われている。ロマンス語ではラテン語の**総合形** (forma sintética) を捨てて、不定詞+habeo の変化形という**分析形** (forma analítica) を使うようになったが、ハルチャではこの habeo > aio > ayu の古形が残っている。また不定詞の部分も *facere* > *far* (*farayu*) や *morire* > *morr* (*morrayu*) のように短縮されていることにも注意したい。前者は現代語でも *haré* のように短縮形が用いられているが、後者は *moriré* のように規則的な変化に戻った。*morrayu* は *mor(i)r* の *-i-* が脱落して *-rr-* の連続となった点で、現代語の *querré* 「(私は) 愛するだろう」と同じである。

(5)

Judá Leví (1170; Stern 2)

Gar si yes devina y debinas bil'haqq

Gar me cand me vernad meu habibi Ishaq.

【語句】 **Gar** (Ar.) = di 言うておくれ **yes** >eres お前は...である **devina** > adivina 予言者 **bil'haqq** (Ar.) = con verdad 確かに **cand** いつ **vernad** > vendrá (彼は) 来るだろう **meu** > mi 私の

【訳】 お前が正しく占いをする占い師なら、どうか私の愛しい人イサクがいつ来るのか教えておくれ。

ser の 2 人称単数形は *es* > *yes* のように二重母音化した。現代語の *eres* はラテン語の *esse* の未来形 *eris* に由来する²⁹。もう 1 つの動詞 *vernad* は *venire* + *ha* > *venrá* > *verná* の変化を経た未来形である。途中で *-nr-* > *-rn-* の**音位転換** (*metátesis*) が起きている³⁰。3 人称単数語尾の *-d* はモサラベ語の特徴である。

(6)

同 (Stern 3)

²⁹ Menéndez Pidal はこれを「不思議な」変化だと述べている。(…) el castellano tomó extrañamente el futuro *eris eres*. (カスティーリャ語は不思議なことに (ラテン語の) *eris* をとって *eres* とした) *Gram. Hist.*, p.302.

³⁰ 現代語の *vendrá* には *-nr-* > *-ndr-* という音挿入が観察される。これは先に見た、*-mr-* > *-mbr-* と類似する現象である。

Des can meu Cidello vénid tan bon'l-bixara!
Como rayo de sol exid en Wadi l-Hijara.

【語句】 **Des** > desde以来 **can** > cuandoのとき **meu** > mi 私の **vénid** > viene (彼が) 来る **exid** (< Lat. exire) = sale 出る

【訳】 私の主人がいらっしゃると、一まあ何と嬉しいことでしょう！—グワダラハラの陽光のようなお姿が見られる。

ここでも、**vénid** や **exid** に3人称単数形の語尾-d が確認される。**exid** は古い動詞 **exir** の変化形である³¹。一方現代語の **salir** (「飛び跳ねる」) は12, 13世紀に使われるようになった。

(7)

同 (Stern 4)
Garid vos, ay yermanelas, com kontener é meu mali?
Sin el-habib non bibreyo ed volarey demandari?

【語句】 **Garid** (Ar.) = Decid 言うておくれ **yermanelas** > hermanillas 姉妹たち **kontener é** > conteneré (私は) 抑えるだろう **meu** > mi **mali** > mal **bibreyo** > viviré (私は) 生きるだろう **volarey** > volaré (私は) 飛んでいこう **demandari** > preguntar, buscar 聞く、訊ねる

【訳】 妹たちよ、この悲しみをこらえる方法を教えておくれ、私の愛しい人がいなければ私は生きられない。だから、あの人を探しに飛んで行きましょう。

yermanelas は **yermana** > **hermana**) に縮小辞-**ela** がついたもので、これは Lat. -illa に由来する。**kontener + é** はいわゆる「分離未来形」というもので、中世スペイン語で頻出する。**bibreyu** には **viv(i)r** > **bibr** の母音脱落 (**síncope**) がある。**demandar** 「聞く、訊ねる」は現代語では **preguntar** に交替した。

(8)

同 (Stern 9)
Vay-se meu corachón de mib, ya Rab, si se me tornarád!
Tan mal meu doler li-l-habib Enfermo yed: cuando sanarád?

³¹ Cf. (英語) exit 「出口」. Martín Alonso, *Enciclop.* s.v. によれば、**exir** の出現は12-13世紀に限られる。

【語句】 **Vay-se** > se va 行ってしまう **corachón** > corazón 心 **de mib** > de mí **ya** (Ar.) (感嘆詞) ああ **Rab** (Ar.) 主、神 **tornarád** > tornará **meu** > mi **li-l-habib** (Ar.) = por el amado 愛しい人のために **yed** > es **sanarád** > sanará 癒えるだろう。

【訳】 私の心の人がいなくなってしまう。ああ、神よ、戻ってくるのかしら？ 愛しい人のためにこんなに苦しくて、病んでいる。いつ癒えるのかしら？

Vay-se の語順は現代語と異なる。中世では弱勢代名詞は文頭では動詞の後に置かれていた³²。**corachón** はラテン語 **cor** から派生して**増大辞** (aumentativo) -on を伴い現代語 **corazón** に近い形となっている³³。

(9)

| |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Todros Abulafia (1306; Stern 16) Qué farayo o qué serád de mibe? Habibi, non te tolgas de mibe! |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|

【語句】 **farayo** > haré (私は) ...するだろう **serád** > será ...だろう **de mibe** > de mí **tolgas** (= quitar) 離す

【訳】 私はどうなるの？ 愛しい人よ、どうか私をおいて行かないで。

farayo, **serád** の動詞活用形や **mib(e)** については先に見たので、ここでは **tolgas** の意味と形態を見よう。Lat. **tollere** 「取り除く」は現代語では **quitar** に交替した。語中の -g- については、Lat. -ny- と -ly- が -ñ-, -ll- [㊟] と -ng-, -lg- の揺れ (**vacilación**) が見られた。

(10)

| |
|-------------------------------------------------------------|
| 作者不詳 (?; Stern 33) Mamma, ayy habibi! sujjamelo aqrella, |
|-------------------------------------------------------------|

³² 中岡 (1993), p.35.

³³ cf. Po. **coraçao**, Fr. **coer**, It. **cuore**, Rum. **inim**. スペイン語のこの増大辞は Joan Corominas によれば「勇敢な男性と心優しい女性の偉大なる心」に由来するという。Corominas, *Breve Dic. s.v. corazón*: "Primitivamente sería un aumentativo, que aludía al gran corazón del hombre valiente y de la mujer amante".もちろん言葉の綾である。

el collo albo la boquilla hamrella

【語句】 **Mamma** > madre お母さん **ayy** > ay [感嘆詞] ああ **sujjamel** (Ar.) = chupamieles 蜜を吸う者 (あだ名) **aqrella** (Ar.) = rojo 赤い **collo** > cuello 首 **albo** > blanco 白い **boquilla** > boquilla (小さな) 口 **hambrella** (Ar.) = rojo 赤い.

【訳】 お母さん、私の恋人「赤い蜜吸い」は白い首筋と紅い口。

collo は後のスペイン語では **cuello** となって二重母音化した。Lat. *folia* > Sp. *hoja* ([*-ly-*] > [◎] > [*-x-*]) などの口蓋音の前では二重母音化が起きていないのに Lat. *-ll-* の場合にはそれがあるのは、後者の時期が比較的古かったためであると考えられる。ラテン語形に近い **albo** はスペイン語ではゲルマン語の **blanco** に交替した³⁴。

モサラベの言語的特徴は次のようにまとめられる³⁵。音韻的特徴としてはラテン語の短母音 *e, o* の二重母音化があり、これは硬口蓋音 (*yod*) の前でも起きていた (例: *foliu* > *fuel* 息子; *oculu* > *ualyo* 目)。また、下降二重母音 *ai, au* の保持、語頭の *f-* の保持、*g (e, i) > y (e, i)* の変化 (*germana* > *yermana* 妹) などがあげられる。文法面では代名詞 *mib(i)*, 動詞 3 人称単数形の *-d*、未来形の *-ai* の語尾、*est* > *yed* 接続詞の *ed* (などが重要である)。

モサラベは 1086 年のムラービト朝 (*almorávides*)、1146 年のムワッヒド朝のイスラム教徒たち (*almohades*) の半島侵入により衰退を免れなかった³⁶。後に国土回復運動 (*Reconquista*) によって *Córdoba* (1236), *Valencia*

³⁴ Martín Alonso, *Enciclopedia*, s.v. *albo*: "Ú. desde el s. XIII. En los textos mozárabes y desde el 929 hasta el s. XIII, ALBO se usó como latinismo. No llegó a ser forma vulgar." (13 世紀から使われている。モサラベのテキストや 929 年から 13 世紀まで、*albo* はラテン借用語 (*latinismo*) として使われ、民衆語にはならなかった) ハルチャのモサラベは特に民衆の口語の形態の特徴を示しているので、「民衆語にならなかった」とは断言できないだろう。

³⁵ Manuel Alvar (1960), pp.3-5.

³⁶ Jaime Vicens Vives (1962). *Aproximación a la Historia de España*. 「1086 年のサグラハスの合戦、1102 年のバレンシアの合戦、1108 年のウクレースの合戦はすべて侵入者の勝利に終わった。この苛烈な精神的体験は、彼らを迎え撃ったカスティーリャ人やレオン人の心理に同じ性格の反作用を引き起こした。この時代、すなわち、十二世紀の初めに国土回復戦争の思想は生まれたのである。」 (小林一宏訳『スペイン—歴史的省察』岩波書店、

(1238), Sevilla (1248) は陥落し、その後彼らの声は消えてしまった。

アラビア文字

アラビア文字は右から書かれる。そして連続するしかたによって少しずつ形が変わる。

例：

- القاضى al cadi
- القصر alcaçar
- الر بض ar-rábad
- الزيت azzeit
- حتى hatta

| 独立形 | 語頭形 | 文字名 |
|-----|-----|----------------------------|
| ا | ا | alif |
| ب | ب | baa |
| ت | ت | taa |
| ث | ث | <u>th</u> aa |
| ج | ج | jiim |
| ح | ح | h□aa |
| خ | خ | <u>kh</u> aa ³⁷ |
| د | د | daal |
| ذ | ذ | <u>dh</u> aal |
| ر | ر | raa |
| ز | ز | zaay |
| س | س | siin |
| ش | ش | <u>sh</u> iin |
| ص | ص | s□aad |
| ض | ض | d□aad |
| ط | ط | t□aa |
| ظ | ظ | z□aa |
| ع | ع | 'ain |

64 頁.)

³⁷ 無声軟口蓋摩擦音 [x] cf. Sp. hijo.

| | | |
|---|----|---------------------|
| غ | غ | ghain ³⁸ |
| ف | ف | faa |
| ق | قا | qaaf |
| ك | كا | kaaf |
| ل | لا | laam |
| م | ما | miim |
| ن | نا | nuun |
| ه | ها | haa |
| و | وا | waaw |
| ي | يا | yaa |

次の文字は語尾形と語中形が異なる。

| 独立形 | 語尾形 | 語中形 | 語頭形 | 文字名 |
|-----|-----|-----|-----|-------|
| ع | ع | ع | ع | 'ain |
| غ | غ | غ | غ | ghain |
| ك | ك | ك | ك | kaaf |
| ه | ه | ه | ه | haa |

アラビア語起源のスペイン語

現代スペイン語の高頻度語 5000 語の中に次のようなアラビア語起源のものがある。それぞれの世紀は文献に最初に現れた時期を示す³⁹。

10 世紀: barrio

11 世紀: alcalde, al c azar, aldea

12 世紀: arrabal, ronda

13 世紀: aceite, achacar, alcoba, alcohol, almacén, alquiler, arroz, asesino, auge, azar, azúcar, garra, hasta, jinete, marfil, rincón, taza

14 世紀: alfiler, alforja, andaluz, gabán, guitarra

15 世紀: almanaque, azotea, azulejo, cifra, limón, ola, tarea

● 課題

【課題 2a】 ハルチャの詩に見られる、ラテン語とスペイン語の変化の過程

³⁸ 無声軟口蓋摩擦音 [ç] cf. Sp. pago.

³⁹ 頻度調査は Juillard and Chang-Rodríguez (1952), その分類と分析は Patterson and Urrutibéheity (1975), p.16 による。

の中間段階を指摘しなさい。

【課題 2b】 アラビア語起源のスペイン語のリストを見て、全体の意味分野の特徴と品詞の分布について気づいたことを述べなさい。

【課題 2c】 アラビア語起源の語を見て気づいたことを述べなさい。アラビア語の定冠詞の部分(a, al)についても注意しなさい⁴⁰。

【参考】

Dozy R. W.H. Engelmann. 1869. *Glossaire des mots espagnols et portugais dérivés de l'arabe*. Leiden.

Dronke, Peter. 1996. *The medieval lyric*. 高田康成訳『中世ヨーロッパの歌』水声社、とくに第3章.

Eguilaz y Uanguas, Leopoldo de. 1886. *Glosario eimológico de las palabras españolas de origen oriental*. Granada, Editrial La Libertad.

Galmés de Fuentes, Álvaro. 1983. *Dialectología mozárabe*. Madrid. Gredos.

García Gómez, Emilio. 1965. *Las jarchas romances de la serie árabe en su marco*. Barcelona. Sex Barral.

Gorton, Theodore J. 他 1982. 谷口勇訳『アラブとトルバドゥール』芸立出版.

Heger, Klaus. 1960. *Die Bisher Veröffentlichten Hargas und ihre Deutungen*. Tübingen. Max Niemeyer Verlag.

池田修. 1976. 『アラビア語入門』岩波書店

Jones, Alan. 1988. *Romance kharjas in Andalusian Arabic Muwassah poetry*. London. Ithaca Press.

Juilland, Alphonse and E. Chang-Rodríguez. 1952. *Frequency dictionary of Spanish words*, The Hague. Mouton.

Manuel Alvar. 1960. *Textos hispánicos dialectales*. *Antología histórica*, I. Madrid: *Revista de Filología Española*.

中岡省治. 1993. 『中世スペイン語入門』大学書林.

Patterson, William and Hector Urrutibéheity. 1975. *The lexical structure of Spanish*, The Hague. Mouton.

Rafael Lapeza. 1980. *Historia de la lengua española*⁹, p.168-169

Solá-Solé, Josep M. 1990. *Las jarchas romances y sus moaxajas*. Madrid. Taurus.

⁴⁰ 「太陽文字」と「月文字」の区別に注意。例外は歯茎硬口蓋音の j だが、これは本来 g の音で、現代でもエジプトでは「硬い g」[g]が発音される。cf. 池田 (1976), p.6.

- Stern, Samuel. 1948. "Les vers finaux en espagnol dans les muwassahs hispano-hébraïques" *Al-Andaluz*, 13, pp.299-346
- _____. 1953. *Les chansons mozarabes*, Palermo.
- _____. 1974. *Hispanic-Arabic strophic poetry*. Oxford. Clarendon Press.
- Vicens Vives, Jaime. 1962. *Aproximación a la historia de España*. 小林一宏訳『スペイン—歴史的省察』岩波書店、1975.
- Watt, W. Montgomery, *A history of Islamic Spain*, Edinburgh, 1965. 黒田壽郎訳『イスラーム・スペイン史』岩波書店、1976. とくに第9章.
- Wilson Edward M. 1977. *Entre las jarchas y Cernuda. Constantes y variables en la poesía española*. Barcelona. Ariel.

3. 英雄の涙… 『わがシッドの歌』

Cantar de Mío Cid (1140, 1207)

Córdoba を中心に繁栄を誇っていたイスラムスペインは 11 世紀には taifa と呼ばれる群小王国に分裂し弱体化した。一方、半島の北からはキリスト教徒による国土回復運動 Reconquista の波が盛んに南進する。これを大きく推進したのがアルフォンソ六世王 (Alfonso VI) である。アルフォンソははじめ西方のレオンの王であったが中央のカスティーリャのサンチョ二世 (Sancho II, 在位 1062-72) が何者かによって謀殺されたためその領土をも支配し、カスティーリャ・レオン国王として君臨した (在位 1072-1109)。



El Cid, Burgos

悲痛な冒頭部分

この章で扱う『わがシッドの歌』 (*Cantar de Mío Cid*) はアルフォンソに仕える武将 El Cid, Rodrigo Díaz de Vivar (1043?-1099) の事績を高らかに物語る武勲詩であるが、その冒頭は次のようにとても悲しい⁴¹。

(1)

| | |
|---|--------------------------------------------|
| 1 | De los sos ojos tan fuertemiente llorando, |
| 2 | tornava la cabeça e estávalos catando. |
| 3 | Vio puertas abiertas e uços sin cañados, |

⁴¹ 武勲詩の写本の最初の一葉は失われている。テキストは基本的に Menéndez Pidal の伝統的な校訂本 (1969) に従うが、これは学者の知見と解釈力を存分に発揮したものであるため、古文書版 (Edición paleográfica) を参考にして少々の変更をほどこした。Menéndez Pidal に批判的な最近の諸版は古文書版により忠実である。Colin Smith (1976), Ian Michael (1989), Alberto Montaner (1993). 日本では橋本一郎 (1979)、岡村一 (1996)、長南実 (1998) が Menéndez Pidal 版を、牛島信明・福井千春 (1994) が Michael の版を底本に使用している。

| | |
|---|--------------------------------------------------|
| 4 | alcándaras vazias sin pieles e sin mantos |
| 5 | e sin falcones e sin adtores mudados. |
| 6 | Sospiró mio Çid, ca mucho avie grandes cuidados. |
| 7 | Fabló mio Çid bien e tan mesurado: |
| 8 | "Grado a tí, señor padre, que estás en alto! |
| 9 | 'Esto me an buelto mios enemigos malos. |

【語句】1 **sos** > sus 彼の **-mientras** > **-mente**(副詞の語尾) / 2 **catar** > mirar 見る / 3 **uços** (*stiu, Lat. ostiu) = canceles 内扉 **cañado** > **candado** かんぬき⁴² / 4 **alcándara** (Ar.) 掛け木 (服を掛けたり、狩猟用の鳥を止めた) / 5 **falcón** > **halcón** ハヤブサ **adtor** > **azor** アオタカ **mudados** mudar 羽が生え変わる (アオタカの羽が生え変わる時期は気が立っていて危険であるという) / 6 **sospirar** > **suspirar**⁴³ **avía** **aver**⁴⁴ = **tenía, tener** 持つ **mucho** > **muy**⁴⁵ とても / 7 **Fabló, hablar** > **hablar** 話す **mesurado** = **comedidamente** 慎重に / 8 **grado** = **agradecimiento** 感謝 (Lat. grātu) / 9 **buelto, bolver** = **urdir** 画策する。

【訳】1 (シッドは)目からとめどなく涙を流しながら、/ 2 振り返って見た。/ 3 (自らの館の)かんぬきはかけずに戸は開き、/ 4 掛け木には皮の衣もマントも、/ 5 ハヤブサも、羽が生え変わったアオタカもいない。/ 6 わがシッドは非常な心痛で溜息をついた。/ 7 そして思慮深く慎重に言った。/ 8 「天におわします父なる神よ、感謝を捧げます。/ 9 これは私の心悪しき敵どもの仕業でございます」

「目からとめどなく涙を流しながら」という描写は猛々しい武将 Cid にそぐわないように思われるかもしれないが、この武勲詩には荒々しい戦闘場面ばかりでなく、人間の悲しさや優しさを微妙に描く表現が随所に見られる⁴⁶。

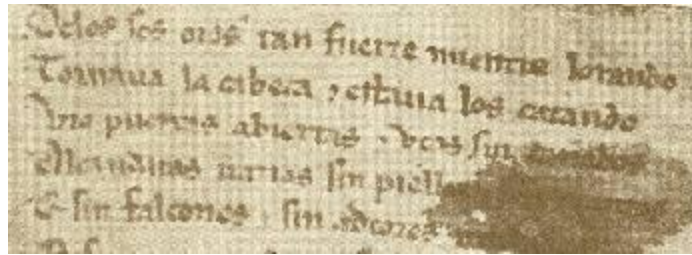
⁴² **canta** > **tu** > **candado** > **cadnado** > **cannado** > **cañado**.

⁴³ **sospirar** (Lat. **susprre**) の **o** に注意。現代語の **suspirar** の **u** は教養語のためであり、民衆語ではアクセントのない **Lat. u** は **o** となった。

⁴⁴ **aver** の本動詞の用法。現代語では助動詞の用法が主である。

⁴⁵ **Med. muito** > **Mod. mucho**. **Mod. muy** は **muito** の語尾が脱落した形。

⁴⁶ スペイン文学研究者牛島信明氏はフランスの『ロランの歌』、ドイツの『ニーベルングンの歌』と比較し、『わがシッドの歌』の特徴として「リアリズム(超自然的要素の欠如)」「個人的生の充足」「人間的振幅を示すユーモア」「民主的流動性の中で成り上がる英雄の姿」の4点を挙げている。



Cantar de Mio Cid の冒頭部分

Ministerio de Educación y Ciencias. 1961

伝えられる唯一の写本(【写真 3b】)には最初の一葉が欠損しているため、Cid がアルフォンソ六世の逆鱗(げきりん)にふれ追放された事情が説明されていない。年代記 *Crónica de Veinte Reyes* によれば Cid と戦って破れたある貴族の遺恨による讒言(ざんげん)が原因であるという。このときの英雄の涙は追放という憂き目や家族(妻と二人の娘)との別離の切なさと同時に、伺候すべき主君の無理解による無念の涙でもあったのだろう。

分離未来形

続く章では Cid が自宅のある Vivar 村を去り Burgos 市に入ったものの誰もが王の怒りを恐れて彼を迎えようとしなかったことが語られる。しかし、少数ながら Cid に従う健気(けなげ)な部下たちもいた。槍(やり)使いの名将 Martín Antolínez もその一人である。彼は傷心の Cid に次のように忠言する。

(5b)

| | |
|----|-----------------------------------------------------------|
| 70 | Fabló Martín Antolínez, odredes lo que a dicho: |
| 71 | " Ya Canpeador, en buen ora fuerdes naçido! |
| 72 | ' esta noch yagamos e vayámosnos al matino, |
| 73 | ' ca acusado seré de lo que vos e servido, |
| 74 | ' en ira del rey Alffons yo seré metido. |
| 75 | ' Si convusco escapo sano o bivo, |
| 76 | ' aun çerca o tarde el rey querer me ha por amigo; |
| 77 | ' si non, quanto dexo no lo preçio un figo." |

【語句】 70 **Fabló** > Habló 話した **odredes** > oiréis お聞きください/ 71

牛島信明・福井千春(1994), 299-316 頁。歴史的な背景については次が参考になる。リチャード・フレッチャー著、林邦夫訳(1997)。ラモン・メデンデス・ピダル著、安達丈夫訳(2000)。

fuestes > **fuisteis** / 72 **yagamos** > **yazcamos** 休みましょう **al matino** = a la madrugada 夜明けに **vayámosnos** > **vamonos** 行きましょう / 73 **ca** = pues なぜなら / 75 **convusco** > **con vos** あなたとともに / 76 **querer me ha** > **me querrá** 私を愛するだろう / 77 **dexo** > **dejo** (私は)置いていく **preçio** > **aprecio** 私は評価する **un figo** > **un higo** イチジク(ここでは「価値のないもの」を表す⁴⁷⁾)

【訳】70 マルティン・アントリネスは次のように話した。皆さんもお聞きください。/71 「ああ、よき時にお生まれになったカンペアドール(シッド)様、/72 今夜は休息し、夜明けに出発いたしましょう。/73 私はあなたにお仕えたことで訴えられ、/74 王のお怒りに触れることでしょう。/75 もし私があなたとともに無事に脱出できれば、/76 いつの日か王も私を味方と思われるでしょう。/77 たとえそのようにならなくとも、この地に捨てていくものすべてを少しも惜しいとは思いません」

ここで語学的な話題に移ろう。今回取り上げるテーマは動詞の未来形である。未来形は現在形や過去形など他の活用形と比べると次の点が異なっている。

(1) 活用語尾が(語根ではなく)不定詞の後につけられる。

| | |
|-----------|-------------|
| cantar-é | cantar-emos |
| cantar-ás | cantar-éis |
| cantar-á | cantar-án |

⁴⁷ こうした語による否定文の強調は現代語では口語体に限られる。例：No me importa *un comino (un ardite, un bledo, una chita, una higa, una patata, un pepino, un pimiento, un pito, un pitillo, tres pitos, un rábano, etc.* 「私は全然かまわない」 cf. W. Beinhauer, p.244) しかし、中世スペイン語ではベルセオ (Gonzalo de Berceo) やイタの主席司祭 (Arcipreste de Hita) など教養ある作者にも自然に使われていた (Menéndez Pidal, 1960, p.109, n.77)。歴史的に見るならば、*nada* ('cosa nacida' 「生まれたもの」) も同様に否定の強調語であった。例：No me importa **nada**.

(2) 母音が消失する不規則変化がある。

| | | | |
|-------------------------------|----------|--------------------------------------|-----------|
| (1) e が消失する動詞 saber | | (2) 語尾の e, i が d に変化 poner | |
| sabré | sabremos | pondré | pondremos |
| sabrás | sabréis | pondrás | pondréis |
| sabr ^á | sabrán | pondr ^á | pondrán |
| 同種 : poder, querer | | 同種 : tener, salir, venir | |

| | | | |
|------------------|---------|------------------|---------|
| (3) 語根が短縮する動詞 | | | |
| hacer | | decir | |
| haré | haremos | diré | diremos |
| harás | haréis | dirás | diréis |
| har ^á | harán | dir ^á | dirán |

(3) 未来形の意味が「未来」とは限らず、逆に未来のことを述べるときでも未来形が使われるとは限らない。

これらの理由は上のテキストの中に見つかる。現代スペイン語の未来形は不定詞に haber の活用 (he, has, ha, hemos, habéis, han) に由来する未来形語尾 (é, ás, á, emos, éis, án) を結合させて、amar-é, amar-ás, amar-á, amar-emos, amar-éis, amar-án のように作る。元来は「…すべきだ、…のはずである」という「義務・必然性」の意味であったが、「…だろう、…するつもりだ」という「推量・意志」の意味に変わった。この「…」にあたる部分が不定詞で表され、「推量・意志」の意味は é, ás, …の部分(語尾)に相当する。中世では不定詞と haber の活用形が上の 73 行の **seré** のように結合している形と、76 行の **querer ... ha** のようにまだ分離している形があった。

上の 70 行では oír の未来 2 人称複数形 **odredes** (< aud(i)re + edes) がある。このように er 動詞と ir 動詞が未来の語尾と結合すると不定詞語尾の e と i が強勢を失って脱落することがあった。一方、口を大きく開く母音 a は安定していたため脱落しなかった(例 : llegar-legarán)。現代スペイン語には **saber-sabré**, **poder- podré** などのように母音が脱落する動詞、**poner-pondré**, **salir-saldré** などのように母音が脱落した後に d が入る動詞、そして **hacer-haré**, **decir-diré** という短縮する動詞があるが、中世スペイン語ではさらに多くの動詞で不規則変化があった。

よって、先の(1)の理由はスペイン語の未来形が「不定詞+haberの現在活用形」という結合に由来するためである。(2)の不規則形は古い時期にer動詞とir動詞のeとiが弱化し脱落してできた。(3)についてはhaberの形に注目するとわかる。たとえばamaréの語尾(é)は本来haberの現在形で、「現在時における推量」を示しているからだと考えられる。(未来時ではなく)現在時のことでも推量の意味を際立たせるときはAhora serán las cinco。「今は5時だろう」のように未来形が使われ、逆に未来のことでも推量をとくに示さなければMañana voy al mercado。「明日私は市場に行きます」のように現在形で表現する。したがっていわゆる未来形は未来時制というよりも「(時制ではない)推量形」と呼ぶこともできる。

成立年代

『わがシッドの歌』の成立年代はテキストの綿密な校訂を行ったMenéndez Pidalによって1140年頃とされたが⁴⁸、さらに新しく13世紀の初頭とする説もある。後者を主張する学者は3700行余りの詩の末尾にある次の3行に注目する。

| | |
|------|---------------------------------------------------|
| 3731 | Quien escrivio este libro del Dios paraiso, amen! |
| 3732 | Per Abbat le escrivio en el mes de mayo |
| 3733 | en era de mill e .cc xlv. años. |

【訳】 この書を書いた者に天の栄光あれ、アメン。1245年5月、ペル・アバットこれを記す。

ここでmill e .cc xlvという数字は当時のユリウス暦の1245年、すなわち西暦1207年となる。これを記したPer Abbatは今失われた作品を単に筆写したのであろうか、それとも当時の伝承を踏まえて創作したのであろうか？この問題は動詞escrivioの解釈にかかるとは、作品の年代だけでなく作者さえも特定される可能性があるため重要である。Menéndez Pidalはこの3行を筆写生の付記にすぎないとし、本文には入れていない。一方、彼がそのオリジナルの制作年代を1140年頃とするのは次の詩行による。

| | |
|------|------------------------------------------------------|
| 3722 | Ved qual ondra creçe al que en buen ora naçió, |
| 3723 | quando señoras son sus hijas de Navarra e de Aragón! |
| 3724 | Oy los reyes d'España sos parientes son. |

【語句】 3722 **ondra** > honra 名誉 / 3724 **Oy** > hoy 今日

⁴⁸ Ramón Menéndez Pidal (1969).

【訳】見よ、よき時に剣を帯びし人（シッド）の名誉がいや増す様を。彼の娘は今やナバラとアラゴンの妃となられた！そして今日ではスペインの諸王は彼の親戚なのだ。

3724 行は Navarra 王家に嫁いだ Cid の娘 Cristina の孫にあたる Blanca が Castilla の Sancho III 世と婚約した 1140 年のことを指している⁴⁹。

このように成立年代について対立する説がある。また、先に見た英雄の「涙」は想像であって、歴史上の Cid の人物像については毀誉褒貶(きよほうへん)がある。そして今回取り上げたスペイン語の動詞未来形の分析も文法学者の間で必ずしも一致しているわけではない。どのような問題でも排他的な見解は研究の発展を妨げることになるので、対象と論点を相対化し見渡すことができる柔軟な姿勢が必要だ。

■テキスト

(1)

[前掲]

(2)

| | |
|-----|-----------------------------------------------------|
| 10 | Allí pienssan de aguijar, allí sueltan las riendas. |
| 11 | Ala exida de Bivar ovieron la corneja diestra, |
| 12 | e entrando a Burgos oviéronla siniestra. |
| 13 | Meçió mio Çid los ombros e engrameó la tiesta: |
| 14 | "Albricia, Álbar Fáñez, ca echados somos de tierra! |
| 14b | [' Mas a grand ondra tornaremos a Castiella.] " |

【語句】 11 **exida** = salida 出口 / 11 **ovieron** = tuvieron 持つ **diestra** = derecha 右 / 12 **siniestra** > izquierda 左 / 13 **engrameó**, engramear = sacudir

⁴⁹ Menéndez Pidal (1908, 44, 76, pp.21-22)はこの年 1140 年を Cantar de Mio Cid の成立年代の上限に定めている。Colin Smith (1980: 349)は、 (...) no se puede usar el verso 3724 del poema (sobre el cual se ha hecho correr mucha tinta) para establecer la fecha de éste, ya que se trata de una afirmación puramente encomiástica, y no de un dato históricamente exacto. と述べ、この説を一蹴している。詳細は Colin Smith (1983, 1985), cap. II を参照。

振る **tiesta**⁵⁰ = cabeza 頭 / 14b **grand** > gran 大いなる⁵¹ **ondra** > honra 名誉 **tornar** = volver

【訳】 10 皆は馬に拍車をかけ、手綱をゆるめた。11 ビバール村を出るときは右手にカラスを見たが、12 ブルゴス市に入るとそれは左手にいた。13 わがシッドは肩を揺すり頭を振った。14 「これは吉兆だ、アルバル・ファニェス！今、われわれはこの土地から追放されても、[14b 大いなる誉れをもってカステイーリャに戻るのだ]」

文字と発音

原本の書き方を尊重した校訂版で用いられる文字の発音の大部分は現代語と同じ発音でかまわない。しかし一部は現代語にはない中世スペイン語の音韻を表している。次の文字に注意したい。

ss /s/: 日本語の「ス」 /su/. **pienssan** /piénsan/, **oviesse** /oviése/.

s /z/: 母音の間では日本語の「ズ」 /zu/ の発音. **mesurado** /mezurado/, **osava** /osáva/, **posada** /pozáda/. その他の位置では/s/となる。 **sos** /sos/, **esto** /ésto/.

x /ʃ/: 日本語の「シュ」 /syu/, 英語の **sh**. **exida** /eʃída/, **çinco** /tsínʃo/, **dexar** /defár/.

j, g (+e, i) //: 日本語の「ジュ」、英語の **pleasure** の /ʒ/. **ojos** /óʒos/. **ç** /ts/: 日本語の「ツ」 /tsu/, 英語の **cats**. **Çid** /tsíd/, **cabeça** /kabétsa/

z /dz/: 日本語の「ズ」 /zu/, 英語の **ds** (**cards**). **razón** /radzón/, **fazer** /fadzér/. ただし、語末では/ts/. **Díaz** /díats/.

(3)

| | |
|----|-------------------------------------------------------------------------|
| 15 | Mio Çid Ruy Díaz por Burgos entrava, |
| 16 | En sue conpañas sessaenta pendones; Exien lo ver mugieres e varones, |
| 17 | burgeses e burgesas por las finiestras son, |
| 18 | plorando de los ojos, tanto avien el dolor. |
| 19 | De las sus bocas todos dizían una razón: |
| 20 | " Dios, qué buen vassallo, si oviesse buen señor! " |

【語句】 16 **sessaenta** > sesenta 60 の **Exien** exir = salir 出る / 17 **burgeses** 町

⁵⁰ cf. Fr. tête; It. testa.

⁵¹ 現代語の **grande** の語尾脱落形 **gran** は、このように中世スペイン語の語末の母音 -e の脱落に始まる。 **grande** > **grand** > **gran**.

の人々 **finiestra**⁵² = ventana 18 **plorando** plorar > llorar 泣く 19 **avien** > tenían 20 si 願望をあらわす接続詞

【訳】 15 わがシッド・ルイ・ディアスはブルゴスの町に入った。16 彼に従うのは槍旗をなびかせる六十騎。彼を見ようと皆は覗き、17 町の者たちは男も女も窓辺に寄った。18 皆悲痛で目に涙し、19 誰もが同じ思いを呟いた。20「神よ、なんとすばらしい家臣であることか！願わくば良き主君に恵まれんことを！」

アラゴン方言

『わがシッドの歌』の原作者は現在の Soria 県の Medinaceli あたりの人であろうと考えられる。ここは 12 世紀になってはじめて再征服された土地で、Castilla 王国から見ればアラゴン方言(aragonés)が話される辺境の地であった。18 plorando の語頭の pl の保持はアラゴン方言の特徴で、Castilla ではすでに pl->ll-の変化が完了していた。この作品には両者が混在している (cf. l llorando)。

(4)

| | |
|----|------------------------------------------------------|
| 21 | Conbidar le ien de grado, mas ninguno non osava: |
| 22 | el rey don Alfonsso tanto avie la grand saña. |
| 23 | Antes de la noche en Burgos dél entró su carta, |
| 24 | con grand recabdo e fuertementre sellada: |
| 25 | que a mio Çid Ruy Díaz, que nadi nol diessen posada, |
| 26 | e aquel que gela diesse sopiesse vera palabra |
| 27 | que perderie los averes e más los ojos de la cara, |
| 28 | e aun demás los cuerpos e las almas. |

【語句】 21 **conbidar** > convidar 招く⁵³ **de grado** 喜んで (=de buena gana) / 22 **saña** = enojo 怒り / 24 **recabdo** > prevención 用心 (Lat. recapitre) / 25 **nadi** > nadie 誰も...ない (Lat.natu)⁵⁴ **nol** > no le⁵⁵ / 26 **gela** > se la⁵⁶ **vera**

⁵² Lat. fenestra, cf. Fr. fenêtre.

⁵³ Conbidar le ien は分離過去未来形。不定詞 conbidar と aver の活用形 (ien) の間に代名詞が介入している。

⁵⁴ nadi は後に nadie という形で定着したが (15 世紀頃)、最初は否定文の中で no と共に用いられた。現代語では nadie のような否定語が動詞の前にあると no は使われない。語源は homines nati で「生まれた者」すなわ

vero > verdadero 真の / 27 **perderie** > perdería 失うだろう **aver** = lo suyo, hacienda 財産 / 28 **aun demás** > además さらに

【訳】 21 町の人々は喜んでシッドを歓待したいところだが、しかし敢えて迎え入れようとはしない。22 アルフォンソ王はシッドに激怒していたからだ。23 夜になる前にブルゴスに王の文書が届いていた。24 厳しい命令であり、しっかりと封印が押されていた。25 誰もシッドに宿を与えてはならない。26 もし宿を与えるようなことをする者があれば、肝に銘じよ、27 財産も顔の両眼も失うということ。28 その上、体も魂もないものと思え。

(4b)

| | |
|----|-------------------------------------------------------|
| 29 | Grande duelo avien las yentes christianas; |
| 30 | ascóndense de mio Çid, ca nol osan dezir nada. |
| 31 | El Campeador adeliñó a su posada; |
| 32 | así commo llegó a la puerta, fallóla bien çerrada, |
| 33 | por miedo del rey Alfonsso, que assí lo avien parado: |
| 34 | que si non la quebrantás, que non gela abriesse nadi. |
| 35 | Los de mio Çid a altas voces llaman, |
| 36 | los de dentro non les querien tornar palabra. |
| 37 | Aguijó mio Çid, a la puerta se llegava, |
| 38 | sacó el pie del estribera, una ferídal dava; |
| 39 | non se abre la puerta, ca bien era çerrada. |

【語句】 29 **grande** > gran 大きな **duelo**⁵⁷ > dolor 苦しみ **yentes** > gentes 人々⁵⁸ / 30 **ascóndense** ascondere > escondere 身を隠す **ca** = pues なぜなら **nol** > no le **dezir** > decir 言う / 31 **adeliñar** = encaminarse 進む (Lat. ad-delinere) / 32 **fallóla** = la encontró それを見た / 33 **avien parado** > habían

ち「誰でも」という意味。

⁵⁵ nol は no と le の結合したもので、弱勢の代名詞は強勢形の支えが必要であったためである。結合した後、1語となった nole は語尾の -e を落とした。

⁵⁶ Lat. ille illa > Med. gela > Mod. se la. 一方、現代語の**再帰代名詞**の se は Lat. se を受け継いだものである。

⁵⁷ 動詞 doler からできた派生名詞 (postverbal)。

⁵⁸ yentes cristianas は「皆」という意味。否定文によく使われ、そのときは「誰も...ない」という意味になる。

dispuesto そのようにしておいた / 38 **estribera** > **estribo** あぶみ⁵⁹ **ferídal**
dava > **herida le daba** 叩いた、蹴った / 39 **era çerrada** > **estaba cerrada** 閉ま
っていた⁶⁰。

【訳】 29 人々はみな悲痛な気持ちであった。30 シッドに会おうとしなかつた。話すことさえ控えていた。31 カンペアドールは彼の定宿に向かい、32 そこに到着したが戸は閉まったままだった。33 アルフォンソ王を恐れて、そのようにしたのだ。34 打ち破らない限りけっして開けることはできないように。35 シッドの配下の者たちは大声で呼ぶが、36 中の者は一言も答えようとしない。37 わがシッドは戸口まで進み、38 あぶみから片足を外し、戸を蹴った。39 それでも戸は開かない。しっかり閉ざされたままだった。

子音 f-

『わがシッドの歌』では現代語では無音 (h-で書かれる) となる語頭の f- がまだ保たれている(32 falló)。f- は 15-16 世紀に氣息音⁶¹となって、さらに無音化した。途中の段階の氣息音は現在でもアンダルシアやラテンアメリカの一部の地域で聞かれる。

(4c)

| | |
|----|-----------------------------------------------------------|
| 40 | Una niña de nuef años a ojo se parava: |
| 41 | " Ya Campeador, en buena ora çinxiestes espada! |
| 42 | ' El rey lo a vedado, anoch dél entró su carta, |
| 43 | ' con grant recabdo e fuertemiente sellada. |
| 44 | ' Non vos osariemos abrir nin coger por nada; |
| 45 | ' si non, perderiemos los averes e las casas, |
| 46 | ' e demás los ojos de las caras ⁶² . |
| 47 | ' Çid, en el nuestro mal vos non ganades nada; |
| 48 | ' Mas el Criador vos vala con todas sus vertudes santas." |

⁵⁹ **estribera** は女性名詞だが、冠詞 **el** (de+el) がついている。このように母音の前では **la** ではなく **el** が使われる。現代語ではアクセントのある母音 **a** に限られる。例 **el agua** 水, **el hacha** 斧 (おの)。

⁶⁰ 当時はまだ **ser** と **estar** の意味が分化していないことがわかる。

⁶¹ **aspiración**. 日本語の「ハ」の子音 [h]。

⁶² **las caras** は現代語ならば **la cara** となるところ。意味による一致である。

49 Esto la niña dixo e tornós pora su casa.

【語句】 40 **nuef** > nueve 9 の⁶³ **se parava** pararse = plantarse 立つ⁶⁴ / 41 **Ya** = (Ar.) Oh! ああ!⁶⁵ **çinxiestes** (強変化)> **ceñiste**(弱変化) (剣を) 帯びる / 42 **vedar** = prohibir 禁じる / 44 **coger** > **acoger** 迎える / 48 **vala** (規則変化) **valer** > **valga** (不規則変化) (神が) お守りなさいますように **vertudes** > **virtudes**⁶⁶ 徳 / 49 **dixo** > **dijo** 言った **pora** > **para**... ...に向かって⁶⁷。

【訳】 40 九歳になる少女がシッドの前に進み出て、このように言った。41 「ああ、よき時に騎士になられたシッド様！42 王様がお禁じになりました。昨夜お触れが届いたのでございます。43 恐ろしい戒めが書かれ、重々しい封印が押された勅書でございました。44 けっして誰もあなたに戸を開くこともあなたを家に招き入れることもできません。45 さもないと、財産も家も失うのでございます。46 さらに、この顔の両眼さえも失います。47 シッド様、私たちの不幸であなたが得るものは何もございません。48 それでも神の御加護があなたにありますように」49 少女はこのように言うと、家に戻った。

(4d)

50 Ya lo vee el Çid que del rey non avie graçia.
51 Partiós dela puerta, por Burgos aguijaua,

⁶³ nueve > nuev > nuef. 語末の母音 -e が脱落して、v が無声化した。必ずしも nuev という中間段階を通過したと実証されるわけではないが、ve > f には語尾 -e の脱落と無声化 (v>f) という2つの過程がこの順で論理的に想定されなければならない。

⁶⁴ pararse 「立つ」はアカデミア辞書によれば現代 España の Murcia、そしてラテンアメリカ一般にある語義 ('estar' o 'ponerse de pie')。確かに México の学者 Bolaño e Isla はこの行を Una niña de nueve años se le acercó, **parándose** ante él. と訳している (太字は筆者)。

⁶⁵ cf. **ya omne dolje**, ハルチャ Stern 22.

⁶⁶ e は民衆語、i は教養語の特徴である。

⁶⁷ 現代語の para は por に a がついた合成語に由来する。この a という要素によって、por にはない「目的」や「方向」の意味がある。例：No tengo tiempo **para** leer. 私は読書をする時間がない。el tren **para** París パリ行きの列車。

| | |
|----|----------------------------------------------------|
| 52 | llegó a Santa María, luego descavalga; |
| 53 | fincó los inojos, de corazón rogava. |
| 54 | La oración fecha , luego cavalgava; |
| 55 | salió por la puerta e Arlançon passava. |
| 56 | Cabo essa villa en la glera posava, |
| 57 | fincava la tienda e luego descavalgava. |
| 58 | Mio Çid Ruy Díaz, el que en buen ora çinxo espada, |
| 59 | posó en glera quando nol coge nadi en casa; |
| 60 | derredor dél una buena conpañã. |
| 61 | Assí posó mio Çid commo si fuesse en montaña. |
| 62 | Vedada l'an compra dentro en Burgos la casa |
| 63 | de todas cosas quantas son de vianda; |
| 64 | non le osarien vender al menos dinarada. |

【語句】 50 **vee** veer⁶⁸ > ve, ver 見る / **avie** > tenía 持っていた。 / 52 **luego** = inmediatamente すぐに⁶⁹ / 53 **fincó** fincar > hincar 打ち込む **inojo** (Lat. genuculu) = rodilla 膝 / 56 **cabo...** (前置詞) = junto a... ...のそばで / 60 **derredor** > alrededor 回りで⁷⁰ / 64 **dinarada** 一人あたりの一日本分の食料⁷¹。

【訳】 50 シッドはもはや国王の寵愛を失ったことを知り、51 戸口から離れ馬に拍車を入れた。52 サンタ・マリア修道院に着いて馬から降りた。53 ひざまづき熱心に祈りを捧げた。54 祈りを終わるとすぐ馬に乗り、55 城門を出て、アルランソン川を渡った。56 ブルゴス市の外れで、河原に野宿した。57 テントを張らせると、馬から降りた。58 よき時に騎士となられたわがシッド・ルイ・ディアスは、59 だれも迎える者がいないため、河原に野宿したのだ。60 彼の回りには多くの部下がいた。61 こうして、わがシッドは山中の野営のように夜を過ごした。62 ブルゴスでは食物の購入をすべて禁じられ、63 だれも一人分の一日本分の食料ですら、売ろうとする者は

⁶⁸ Mod. veo (直説法・現在・1 人称単数) と Mod. veía (直説法・線過去・1.3 人称単数) の-e-は古形 veer の-e-に由来する。

⁶⁹ Lat. loco すぐに。luego の「後で(después)」の意味は後に発達したもので、とくに 16 世紀以降に見られる。

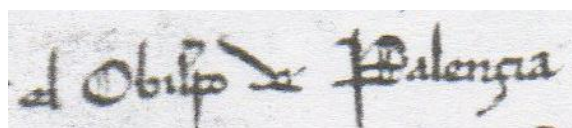
⁷⁰ derredor の他に aderredor, en derredor の形もあった。現代語の alrededor は al + derredor に由来し、de と rre の音位転換を経て出来た。

⁷¹ 1 ディネーロ (dinero, 当時の貨幣の単位) で買える食料。現代語の dinero 「お金」は Lat. denarius 「銀貨」に由来する。

いなかった。

セディーリャ (ç)

中世の文献には現代語で使われていない文字が 1 つある。C の下にひげがついた文字で、スペイン語でこれを *cedilla* といった。「小さな *ceda* (=zeta)」という意味で⁷²、C の下についての記号のことである。c の文字の下に z に似た文字を加えたものです。ラテン語にはなかった /ts/ の音を表すために 13 世紀のスペインのビシゴード人が工夫したものである⁷³。



el Obispo de Palencia

(5)

| | |
|----|---------------------------------------------------------------------|
| 65 | Martín Antolínez, el Burgalés conplido, |
| 66 | a mio Çid e a los suyos abástaes de pan e de vino; |
| 67 | non lo compra, ca él se lo avie consigo; |
| 68 | de todo conducho bien los ovo bastidos . |
| 69 | Pagós mio Çid el Canpeador e todos los otros que van a so çervicio. |

【語句】65 **Burgalés** ブルゴスの人 (Burgos) / 68 **conducho** 旅に必要な糧秣 / 69 **pagós** pagarse = contentarse 満足する⁷⁴ **çervicio** > servicio 奉仕 / 70 **Fabló** hablar > hablar **odredes** > oiréis 諸君は聞くだらう(耳を傾けよ)⁷⁵

【訳】65 高潔なるブルゴス人マルティン・アントリネスが、66 われらが

⁷² 語尾の *-illa* は指小辞 (*diminutivo*) である。

⁷³ 今日ではフランス語で使われるが (セディーユ)、これは 16 世紀にスペイン語から借用したものである。

⁷⁴ *pagar* は他動詞では「満足させる」の意味で、これが「借金の相手を満足させる」から現代語の「払う」という意味になった。英語の *pay* も、同語源 (Lat. *pacre*) の古フランス語の *payer* 「満足させる」に遡る。なお、Lat. *pacre* は Lat. *pax* (平和) から派生した動詞である。

⁷⁵ Lat. *audīre*. 不定詞は *oyr* (*oir*) であるが、未来形語幹にラテン語源の *-d-* が残っている。

シッドとその家臣に食料と葡萄酒を差し出した。67 これは(町で)買ったものではなく、みずから携えてきたものだった。68 旅に必要な糧食は十分に用意し、69 わがシッド、エル・カンペアドールと彼に仕える者たちは満足した。

(5b)

[前掲]

(6)

| | |
|----|-------------------------------------------------|
| 78 | Fabló mio Çid, el que en buen ora çinxo espada: |
| 79 | " Martín Antolínez, sodes ardida lança! |
| 80 | ' si yo bivo, doblar vos he la soldada, |
| 81 | ' Espeso e el oro e toda la plata, |
| 82 | ' bien lo vedes que yo no trayo nada, |
| 83 | ' huebos me serié pora toda mi compañía; |
| 84 | ' fer lo e amidos, de grado non avrié nada. |
| 85 | ' Con vuestro consejo bastir quiero dos arcas; |
| 86 | ' inchámoslas d' arena, ca bien serán pesadas, |
| 87 | ' cubiertas de guadalmeçí e bien enclaveadas. |

【語句】79 **sodes** > sois 汝は...である **ardido** = valiente 勇敢な / 80 **doblar vos he** > os doblaré(分離未来形) / 81 **Espeso** (過去分詞), **espender** > Mod. **despender** 消費する⁷⁶ / 82 **vedes** > véis 汝は見る **trayo** > traigo 私は運ぶ / 83 **huebos** (Lat. opus) = necesidad 必要⁷⁷ / 84 **fer** > hacer する **amidos** = de mala gana いやいやながら、しかたなく **de grado** = gustosamente 喜んで / 85 **bastir** = preparar 用意する / 86 **inchamos** **inchar** > **hinchar** 膨らませる / 87 **guadalmeçí** > **guadamecí** モロッコ革

【訳】78 めでたき時に騎士になられたわがシッドはこのように話した。79

⁷⁶ **Espeso e** > **He gastado**. 直接の目的語は **el oro** であるため、**espeso** という男性・単数形が使われている。**e toda la plata** は文が一度完成した後に加された句で枠外構文であるため、**espeso** の変化には関与しない。

⁷⁷ 非人称構文。**huebos me serié** は現代語の **me sería necesario** 「私には必要だ」に対応する。**aver huebos de ...** という人称形もよく使われる(後述、123行)。

「マルティン・アントリネスよ、そちは勇敢な槍の使い手だ！80 わしの命があるならば、そちの禄を倍にしよう。81 わしは金も銀のすべても使い果たした。82 見てのとおり、わしに残るものはなにもない。83 それでも家臣のためにしなくてはならないことがある。84 気が進まないことではあるが、好きなようにしては何も手に入らない。85 そちさえよければ、櫃(ひつ)をふたつ用意しよう。86 それに砂を詰め、ずっしりと重くして、87 モロッコ革で覆い、釘をしっかりと打つのだ。

強変化動詞

現代スペイン語の点過去には弱変化と強変化の2種類がある。弱変化は規則変化と語根母音変化を含む。

| ar 動詞 cantar | | er 動詞 comer | |
|--------------|------------|-------------|-----------|
| canté | cantamos | comí | comimos |
| cantaste | cantasteis | comiste | comisteis |
| cantó | cantaron | comió | comieron |

これに対して、強変化動詞の活用は語根も語尾も次のような特徴がある。

| 語尾 | | 例 : saber | |
|-------|----------|-----------|-----------|
| -e | -imos | supe | supimos |
| -iste | -isteis | supiste | supisteis |
| -o | -(i)eron | supo | supieron |

強変化では語根(sup-)は変化しない。「わがシッドの歌」には次のような強変化動詞が見られる。aduxo (aduzir), andido (andar), cinxo (çenir), crovo (creer), dixo (dezir), estido (estar), fizo (fazer), fue (ir), nazco (naçer), ovo (aver), plogo (plazer), priso (prender), pudo (poder), puso (poner), respuso (responder), sopo (saber), tovo (tener), vino (venir), visco (vivir), yogo (yazer). aver を例にとれば次のように活用する。

| aver | |
|--------|------------------------|
| ove | ovíamos |
| oviste | oviestes ⁷⁸ |
| ovo | ovieron |

なお、-ra 形の過去完了、接続法過去、接続法未来も同じ強変化語幹になる。

(7)

| | |
|----|------------------------------------------------------------|
| 88 | ' Los guadameçís vermejos e los clavos bien dorados. |
| 89 | ' Por Raquel e Vidas vayádesme privado: |
| 90 | ' quando en Burgos me vedaron compra e el rey me a airado, |
| 91 | ' non puedo traer el aver, ca mucho es pesado, |
| 92 | ' empeñar gelo he por lo que fuere guisado; |
| 93 | ' de noche lo lieven, que non lo vean christianos. |
| 94 | ' Véalo el Criador con todos los sos santos, |
| 95 | ' yo más non puedo e amidos lo fago." |

【語句】 89 **privado** = en seguida すぐに / 90 **quando** > cuando ...のとき (ここでは原因を示す、...なので) **vedar** > prohibir 禁じる **ayrar** > airar 怒る / 91 **mucho** > muy とても / 92 **empeñar gelo e** それを質に入れよう **fore** > fuere **guisado** > justo, conveniente 正しい、適切な **lieven** > lleven 彼らは運ぶ / 95 **fago** > hago (私は)する

【訳】 88 朱の革で覆い、金をかぶせた釘を打つのだ。89 そしてラケルとビダスの家に急いで行ってもらいたい。90 ブルゴス市内での買い付けが禁じられ、王の怒りにも触れた。91 この櫃の中の財産は非常に重くて携行できない。92 そこで、相応の値段で質に入れたい。93 夜に誰にも見られないように運び入れよ。94 神も、また神に仕える聖人たちも、ご照覧あれ、95 私にはこうするほかにしかたなく、これがわが意に反することを」

3 人称代名詞の目的格

対格(直接目的語)では男性 lo (<Lat. illum)と女性 la (<Lat. illam)を区別し

⁷⁸ **oviestes** は作品中には現れないが、他の動詞の語尾を考えれば (fazer-fiziestes, dezir-diziestes, etc.)、この形が想定できる。

た。与格では男女とも *le* (< Lat. *illi*) となる。後の **レイスモ** はまだ稀であった。3 人称与格 + 3 人称対格は *gelo* [ʒelo] となったが、これは Lat. *illi illum* > (*i*)*lliello* > *gello* という音韻変化の結果である⁷⁹。-*llo* > -*lo* は他の対格の *lo* の類推による。そして、中世後期(14 世紀)になって *ge-* が再帰代名詞の *se* の影響で *se lo* となった⁸⁰。

(8)

| | |
|----|-----------------------------------------|
| 96 | Martín Antolínez non lo detardava |
| 97 | passó por Burgos, al castiello entrava, |
| 98 | por Raquel e Vidas apriessa demandava. |

【語句】 96 **detardar** = retardar 遅れる / 97 **castiello** > castillo 城 / 98 **apriessa** > de prisa 急いで **demandar** = buscar 探す

【訳】 (8) 96 マルティン・アントリネスは時を無駄にしなかった。97 ブルゴスをめざして進み、その市内 に入り、98 急いでラケルとビダスを探した。

音韻変化 *ie* > *i*

Med. *castiello*, *apriessa*⁸¹ は現代語で *castillo*, (*de*) *prisa* となった。*castiello* > *castillo* は語尾の -*llo* /*o*/ の硬口蓋音に吸収されたためである。同じことが *apriessa* についてもいえる。つまりカスティーリャ語の /*s*/ の発音は舌先歯茎音 (*apicoalveolar*) で硬口蓋音性が強い⁸²。

(9)

| | |
|-----|----------------------------------------------------|
| 100 | Rachel e Vidas en uno estavan amos, |
| 101 | en cuenta de sus averes, de los que avien ganados. |

⁷⁹ ラテン語の *illi* と *illum* が合体することで *ge* [ʒe] という音韻が成立した。合体して *gelo* という 1 語となったために与格の *ge* は語中に *s* を入れることができず、*le* / *les* のような単数と複数の区別が不可能になった。

⁸⁰ ほかに *g* (/ʒ/ > /ʃ/) と *s* /*s*/ の音声的な類似も原因の 1 つと考えられる。R. Menéndez Pidal, *Gram. Hist.*, p.254.

⁸¹ Lat. *castellu(m)*, *apriessa*.

⁸² 確かに日本人の耳には「シュ」のように聞こえる。*prisa* 「プリシャ」。なお、スペイン南部やラテンアメリカでは日本語や英語の /*s*/ と同じ舌面歯茎音 (*dorsoalveolar*) であり、ふつうに「ス」と聞こえる。

- | | |
|-----|---------------------------------------------------|
| 102 | Llegó Martín Antolínez a guisa de membrado: |
| 103 | "O sodes, Raquel e Vidas, los mios amigos caros?" |
| 104 | ' En poridad fablar querría con amos. ' |
| 105 | Non lo detardan, todos tres se apartaron. |

【語句】 100 **amos** > ambos 二人 / 101 **avien** > habían / 102 **a guisa**⁸³ **de** = a manera deのように / 103 **membrado** = prudente 慎重な **o** (Lat. unde) > dónde どこに **sodes** > sois⁸⁴ **caros** = queridos 親愛なる⁸⁵ / 104 **poridad** = secreto 秘密

【訳】 100 ラケルとビダスは二人で一緒に、101 商売の儲けを勘定していた。102 そこにマルティン・アントリネスが慎重に近づいた。103「私の親友ラケルとビダスはお在宅かな？104 実はお二人に内密な話があるのだ」105 早速三人は場を移した。

(9b)

- | | |
|-----|---------------------------------------------------------|
| 106 | " Rachel e Vidas, amos me dat las manos, |
| 107 | ' que non me descubrades a moros nin a cristianos; |
| 108 | ' por siempre vos faré ricos, que non seades menguados. |
| 109 | ' El Canpeador por las parias fue entrado , |
| 110 | ' grandes averes priso e mucho sobejanos, |
| 111 | ' retovo dellos quanto que fue algo; |
| 112 | ' por en vino a aquesto por que fue acusado. |

【語句】 106 **me dat** > dadme 私に与えよ / 107 **no me descubrades** > no me descubráis 私を (人に) 教えてはならない / 108 **por siempre** > para siempre⁸⁶ / 112 **por en (ende)** = por eso, por lo tanto それゆえ **aquesto** = esto このこと **por que fue acusado** 彼が訴えられることになった理由⁸⁷

⁸³ ゲルマン語の *wīsa* に由来し、英語の *wise, guise* と同語源。英語の例 : *in like wise* 同様に、*clockwise* 時計回りに、*lengthwise* 縦に、*in the guise of a beggar* こじきの身なりをして。

⁸⁴ *ser* で「所在」を示した。現代語では *estar* を用いる。¿Dónde estáis?

⁸⁵ cf. Fr. *cher* 親愛なる。

⁸⁶ *pora* から変化した *para* が現れるのはさらに後の 13 世紀中頃である。

⁸⁷ 現代語の関係文では、*Vino a esto por lo que* のように定冠詞が必要。

【訳】106 ラケルとビダスよ、さあ握手して(約束して)おくれ。107 キリスト教徒にもモーロ人にも誰にも口外しないと。108 おぬしたちを生涯生活に困ることのない金持ちにしてやろう。109 闘将シッド様はモーロの貢ぎ物を受け取りに出かけられ、110 大変な財宝を集められ、111 そのかなりのものを手に入れられた。112 そのために訴えられたのだ。

弱勢代名詞の位置

弱勢代名詞 *me* は動詞の前にあるが、これは前に *amos* という強勢の名詞があるからである。このように弱勢代名詞は休止の後には起こらなかった。動詞との関係で言えば、現代語で動詞の後につくのは、動詞が不定詞、現在分詞、肯定命令形であるときに限られる。肯定命令(*Dame.*)と否定命令(*No me des.*)で代名詞と動詞の相対的な位置が異なるのは否定語 *No* があるためである。

校訂版 (edición crítica)

(1)の前掲のテキストには校訂がほどこされているが(*edición crítica*)、原本に忠実な古文書版(*edición paleográfica*)では次のように転記されている⁸⁸。

| | |
|---|------------------------------------------------------------|
| 1 | De los sos ojos tan fuerte mientras lorando, |
| 2 | tornaua la cabeça estava los catando. |
| 3 | Vio puertas abiertas uços sin cañados, |
| 4 | alcándaras vazias sin pieles e sin mantos |
| 5 | E sin falcones sin adtores mudados. |
| 6 | Sospiro myo Çid, ca mucho auie grandes cuidados. |
| 7 | Ffablo myo Çid bien tan mesurado: |
| 8 | "Grado ati , señor padre, que estas en alto! |
| 9 | 'Esto me an buelto myos enemigos malos." |

2つのテキストを対比すると母音字の *u-v* (6 *auie-avie*), *y-i* (6, 7 *myo*)、子音字の *l-ll* (1 *lorando-llorando*), *Ff-f* (7 *Ffablo-fabló*)の違いがある。アクセント記号もなかった(6 *Sospiro*, 7 *Flablo*)。1 *fuerte mientras* (*fuertemientras*), 2 *estava los* (*estávalos*), 8 *ati* (*a tí*)のように語の切れ目も曖昧であった。イタリック体の部分は校訂者による補充である(6 *grandes*, *bien*, *que*)。このように当時のスペイン語には今日のような厳格な正書法はなかったので、校訂を

⁸⁸ R. Menéndez Pidal (1969a). これに句読点 (., : ; ! ?) と引用符 (" ") が補われている。

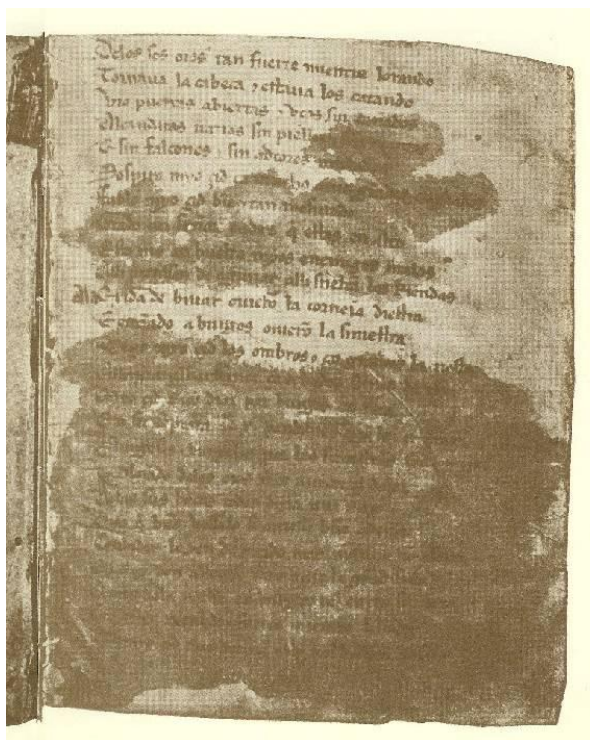
経たテキストを使うほうが便利である。ただし単純に現代語の正書法に変えてしまうと当時の音韻や形態の差異が不明になるので、スペイン語史のテキストとしてはその区別が残るように配慮しなければならない。

●課題

【課題 3a】 歴史の概説書からレコンキスタの進展を調べ、それと現代スペイン語の方言区画との関係を述べなさい。

【課題 3b】 史実と Cantar de Mio Cid の筋と映画『El Cid』（Anthony Mann 監督, 1961）の展開を比較しなさい。

【課題 3c】 次の写本の状態について調べたことや気づいたことなどを述べなさい⁸⁹。



Ministerio de Educación y Ciencias. 1961

【参考】

Bolaño e Isla, Amancio. Poema de Mio Cid. Versión antigua con prólogo y versión moderna. México. Editorial Porrúa. 1972.

長南実訳. 1998『エル・シードの歌』岩波文庫.

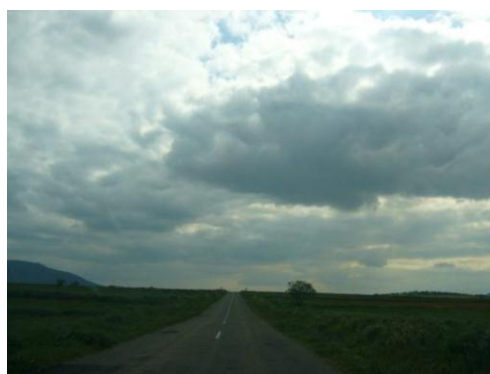
⁸⁹ cf. Ian Michael (1989), pp.52-56..

- Fletcher, Richard. 1989. *The quest for El Cid*, London. リチャード・フレッチャー著、林邦夫訳. 1997. 『エル・シッド. 中世スペインの英雄』法政大学出版会.
- 橋本一郎. 1979. 『わがシッドの歌』大学書林.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1969a. *Cantar de Mio Cid. Vol. III. Texto del Cantar y adiciones (Edición paleográfica)*. 4^a ed. Madrid: Espasa-Calpe.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1969b. *Cantar de Mio Cid. Texto, gramática y vocabulario*. Madrid. Espasa-Calpe.
- Menéndez Pidal, Ramón. ラモン・メデンドス・ピダル著、安達丈夫訳. 2000. 『エル・シッド・カンペアドル』文芸社.
- Michael, Ian. *Poema de Mio Cid*. 1989. Madrid: Castalia.
- Ministerio de Educación y Ciencias. 1961. *Poema de Mio Cid. Edición facsímil del códice de Per Abat, conservado en la Biblioteca Nacional*.
- Montaner, Alberto. *Cantar de Mio Cid*. 1993. Barcelona: Crítica.
- 岡村一訳. 1996 『スペイン武勲詩. わがシッドの歌』近代文芸社.
- Smith, Colin. 1976. *Poema de Mio Cid*. Madrid: Catedra.
- _____. 1983. *The Making of the "Poema de Mio Cid"*. 1985. *La creación del "Poema de Mio Cid"*. Barcelona. Editorial Crítica.
- 牛島信明・福井千春. 1994. 『わがシッドの歌』(スペイン中世・黄金世紀文学選集1) 国書刊行会.

4. 人を導く星…『三博士の礼拝劇』

Auto de los Reyes Magos (12 世紀末)

Madrid から真南に Andalucía を目指す国道 4 号線のドライブは快適だ。一気に Córdoba に向かうのもよいが、国道を西に外し Ciudad Real 県の Almagro という町に寄るのも趣きがある。小さな町なので Plaza Mayor の周りをぶらぶらと散歩するだけでも楽しい。スペイン文学に興味のある人にとっては 16 世紀に建てられた屋根のない「中庭劇場」Corral de Comedias は見逃せない。ここでは毎年国際古典劇フェスティバルが開催されている。私が訪れたとき芝居は行われていなかったが見学は自由で舞台に上がることで許された。



Campo de Ciudad Real

スペインの景色が一番美しく輝くのは黄昏(たそがれ)時の一瞬だと思う。昼過ぎに Almagro を発ち、左手に夕陽を見ながら田舎道を北の Toledo に向かったときも、素晴らしい夕暮れの景色を目の当たりにした。そして夜が更けてもさらに楽しみがある。安全な場所に車を寄せて見上げれば、乾燥した Meseta の高原の空に何一つ遮(さえぎ)る物もなく満天の星が見られる。まさに宇宙の広大さと地球の奇跡をあらためて実感させられる。

最古のスペイン語劇

二千年前にひたすら夜空を観察し珍しい星を発見した人がいた。『聖書』「マタイによる福音書」(*Evangelio según San Mateo*)に記されたエルサレム東方の占星術師たちである。ここで扱う古いスペイン語のテキスト『三博士の礼拝劇』*Auto de los Reyes Magos* はこの占星術師たちの物語である。スペイン語で書かれた現存する最古の劇で Toledo の大聖堂の写本の中で発見された。

この礼拝劇は内容と言語的な特徴から 12 世紀末の作品とされている。完全な形では伝わらず今日読むことができるのはわずか 147 行にすぎない。次の 5 つの場面から成る。第一場：星占いの三博士が珍しい星を見つけイエスの生誕の徴(しるし)ではないかと疑う。第二場：はたして赤子は王か、

人か、それとも神か。王ならば金の進物を、人ならば没薬を、神ならば香を望まれるだろう。第三場：ヘロデ王の登場。王の逡巡。第四場：王の独白。第五場：王と三博士の議論。博士たちの疑念。現存するテキストはここで中断するが、おそらく原典は三博士が赤子のイエスに礼拝する場面で終わっていたと思われる。早速第一場を読もう⁹⁰。

(1)

| | |
|-----------------|------------------------------------|
| <i>Escena I</i> | |
| | <i>(Caspar, solo)</i> |
| 1 | Dios criador, ¡qual marauila, |
| 2 | no se qual es achesta strela! |
| 3 | Agora primas la e ueida, |
| 4 | poco timpo a que es nacida. |
| 5 | ¿Nacido es el Criador |
| 6 | que es de la gentes senior? |
| 7 | Non es uerdad, non se que digo; |
| 8 | todo esto non uale uno figo. |
| 9 | Otra nocte me lo catare; |
| 10 | si es uertad, bine lo sabre. |
| | <i>(Pausa)</i> |

【語句】2 **achesta** > esta この 3 **Agora** > ahora agora は今日でも各地の方言に残っている **primas** = por primera vez はじめて **ueida** > vista 4 **a** = hace ... 前に 5 **Nacido es** = Ha nacido 8 **uale uno figo** > vale un higo 価値がない 9 **nocte** [C:\Users\Administrator\Documents\HP aptana\kenkyu\ã“ c” Ž•l\My Documents\Kyozei-< 3•P¥f Xf yf Cf “ ŒêŽ j¥HISESP.htm - N 112](#) > noche **catare**, **catar** = miraré, mirar 見る、観察する 10 **bine** > bien よく。

【訳】1 創造主の神よ！何と不思議なことか、2 あの星は何だろう。3 私が目にするのはこれが初めてだ 4 ほんの少し前に星が誕生した。5 神がお生まれになったのか。6 諸々の民の主であられる神が。7 いや、そうではない。私は自分が何を言っているのかわからない。8 こんなことはすべて何の価値もない。9 もう一度明日の晩よく観察しよう。10 それが真実か、よく見きわめよう。

⁹⁰ テキストは R. Menéndez Pidal. *Revista de Archivos, Bibliotecas y Museos*, IV. (1900), p. 453. による。Gifford y Hodcroft (1966) pp.37-42. に再録。

2行目の感嘆符(¡...!)も、6の疑問符(¿...?)も当時の書記法にはなかったの
で校訂者の解釈によるものである⁹¹。前者については大きな意味の違いがな
いが、疑問符の有無は重要だ。ここでは7-8で自分の発見をにわかには信
じられない様子があるので、やはり5-6の全体が(自らに発した)疑問文であ
ろう。9-10で現象の再現性を確認しようとするのはいかにも学者らしい。

現在完了形

現代スペイン語の**現在完了**は「haberの活用形+過去分詞」という組み合
わせで作られる。英語の「have (has)+過去分詞」とよく似ている。英語の
haveと同様にスペイン語のhaberにも昔は「持つ」という意味があった。
それでは、①なぜ「持つ」+過去分詞が現在完了形として働くようになった
のだろうか。②現在完了とはそもそも何なのだろうか。

①の理由を探るには、上の本文の3の *la e ueida*、つまり「aver + verの過
去分詞」という形が鍵になる。これが古い現在完了の形であった。ver「見
る」のように他動詞のときは助動詞に aver (> haber) が使われる。ここで過
去分詞 ueida が目的語 *la* と性数が一致していたことに注目したい。これは
「主語(S. Sujeto)+動詞(V. Verbo)+目的語(O. Objeto)+目的語の補語(C.
Complemento)」という構文であったことを示している。目的語の補語だか
ら目的語と性数が一致していたわけである。よって、この文の原義は「私
はそれ(星)を見られたものとして持っている」というような意味になるだろ
う。もちろん現代語の haber には「持つ」という意味はなく、全体で「…
した、…してしまった」という意味である。

本文5の *Nacido es el Criador* も「創造主がお生まれになった」に、もう1
つ興味深い現在完了形が見られる。この *nacer*「生まれる」のような自動詞
の場合は aver (> Mod. haber) ではなく、*es* という *ser* 動詞が使われていた。
これは存在を意味する *ser* 動詞と完了を意味する過去分詞が組み合わさっ
て「…してある」という現在完了の意味になっている。現代スペイン語で
は *Ha nacido el Criador* となる。

現在完了は「過去に完了したこと」(過去分詞が示す)を現在の時点でもら
える(haberの現在形)、という複合的な意味になる。このように②の疑問は

⁹¹ 文頭の逆転する疑問符(¿)はなかったが文末の疑問符(?)はあった。
Menéndez Pidal (1976: 176) の *Lámina xxv* を見ると *Nacido es el criador* の直
後にアクセント記号(?)があるのがわかる。逆転する疑問符(¿)と感嘆符(¡)
はスペイン王立アカデミーが1754年に発行した『正字法』によって規定さ
れ、その後一般に浸透した。

その由来を考えると答えが見つかる⁹²。

指示形容詞・代名詞 **este, ese, aquel**

本文中の 2 *achesta* (*aquesta*), 14 *achesto* (*aquesto*), 16 *achest* (*aqueste*) は、それぞれ *esta, esto, est(e)* が *ach-* (<Lat. *eccum*) によって補強され形である(後の 19 に *esta*, 83 に *est(e)* の形もある)。esse にも *aquesse* という補強形があった。これらの形は 15 世紀から衰退したが、*aquel, aquella, aquello* だけは現代語まで残った。これは補強部 *aqu-(ach-)* がないと定冠詞の *el* と同形になるために区別が保たれたのだろう。

作者はフランス人か

劇の続きを見よう。

(2)

| | |
|----|-------------------------------------------|
| 11 | ¿Bine es uertad lo que io digo? |
| 12 | En todo, en todo lo prohio. |
| 13 | ¿Non pudet seer otra sennal? |
| 14 | Achesto es i non es al; |
| 15 | nacido es Dios, por uer, de fembra |
| 16 | in achest mes de december . |
| 17 | Ala ire o que fure, aoralo e, |
| 18 | por Dios de todos lo terne. |

【語句】 11 **Bine** > Bien 本当に **uertad** > verdad 真実 **io** (> yo) 私 12 **en todo** [C:\Users\Administrator\Documents\HP aptana\kenkyu\ã“ c” Ž • l\My Documents\Kyozei-< 3 • P\yf Xf yf Cf “ ŒêŽ j\HISESP.htm - N 116](http://C:\Users\Administrator\Documents\HP aptana\kenkyu\ã“ c” Ž • l\My Documents\Kyozei-< 3 • P\yf Xf yf Cf “ ŒêŽ j\HISESP.htm - N 116 >) > en todo caso, siempre 常に、確かに 12 **prohio** > porfío 私は確かめる 14 **al** = otra cosa

⁹² 現在完了の *haber* と過去分詞の間には他の要素が入らない。たとえば、×*Ya te lo he yo dicho.* (もう君にそれを言っておいた) のように現在完了形の中に *yo* を挟むことはできない。中世と違って現代のスペイン語では *haber* と過去分詞が一体化しているからである。しかしよく調べてみると、たとえば *Ya te lo había yo dicho.* のような過去完了形や *Habrá usted bebido demasiado.* (あなたは飲み過ぎたのでしよう) のような未来完了形に分立状態が見つかる。現在完了では *he, has, ha* というような短い形になって完全に一体化しているが、過去形や未来形は *haber* の元の形がよく保たれているので一体化がまだ完全ではないのだろう。

他のこと 15 **uer** > verdad **fembra** > hembra, mujer 女性 16 **december** > diciembre 17 **ala** > allá **o** = dond ... …のところへ **fure** > fuere =fuera **aoralo e** > lo adoraré 分離未来形 18 **terne** > tendré 私は持つだろう 融合未来形

【訳】11 私の言っていることは真実なのだろうか。12 これを確かめよう。13 ほかの徴(しるし)でないだろうか。14 (いや)これこそ確かで、ほかではない。15 神が本当に女性からお生まれになったのだ。16 この12月に。17 どこであろうと、そこに行って礼拝しよう、18 皆の神であられるのだろうか。

私たち日本人は音節のリズムには敏感だが脚韻には気がつかないことがある。しかしスペイン語話者ならば脚韻の不一致を見逃さない。たとえば15の **fembra** と16の **dicember** の語末は似ているが厳密に言えば脚韻が揃っていない。このことからスペイン語歴史言語学の権威 **Rafael Lapesa** はこの劇が当時 **Toledo** に多かったフランスのガスコーニュ人がカスティーリャ語で記したものだ と推定した (**Lapesa, 1954**)。

原典はスペイン語で正しく書かれてあったのにフランス人が間違えて筆写したのだろうか。それとも中世カスティーリャには演劇の伝統はなかったのだろうか。事実中世スペイン演劇の一番星 **Auto de los Reyes Magos** に続く作品は皆無に等しかった。カスティーリャ語劇の本格的な幕開けはずっと遅く近代まで待たなければならない。やがて百花繚乱(りょうらん)の演劇が競い合うスペイン黄金世紀を迎え、あの **Almagro** の舞台でも星空の下で盛んに上演されていたはずである。

■テキスト

スペインに限らず中世ヨーロッパの劇の起源は礼拝劇であった。はじめは教会内で短い句がラテン語で歌われていたが、12世紀になると土地の言葉で演じられる劇が現れ、教会内ではふさわしくないとされ野外劇に転じた。

(1, 2)

[前掲]

(3)

(Baltasar, solo)

| | |
|----|--------------------------------|
| 19 | Esta strela non se dond uinet, |
| 20 | quin la trae o quin la tine. |

| | |
|----|------------------------------|
| 21 | Por que es achesta sennal? |
| 22 | en mos dias no ui atal. |
| 23 | Certas nacido es en tirra |
| 24 | aquel qui en pace i en guera |
| 25 | senior a a seer da oriente |
| 26 | de todos hata in occidente. |
| 27 | Por tres noches me lo uere |
| 28 | i mas de uero lo sabre. |
| | (<i>Pausa</i>) |
| 29 | En todo, en todo es nacido |
| 30 | Non se si algo e ueido. |
| 31 | Ire, lo aorare, |
| 32 | i pregare i rogare. |

【語句】19 **strela**⁹³ > estrella 星 19 **non** > no 「否定」の副詞 19 **dond** > de dónde どこから 19 **uinet** > viene 来る 20 **quin** > quien 誰が 20 **tine** > tiene 持つ 21 **sennal** > señal 徴し 22 **mos** > mis 私の 22 **atal** > tal cosa そのようなもの 23 **Certas** > ciertamente 確かに 23 **tirra** > tierra 土地 24 **qui** > quien 関係代名詞 24 **pace** > paz 平和 **guera** > guerra 戦争 25 **senior** > señor 主 25 **a a** = ha de ... …であるはずだ **seer** > ser ...である 26 **hata** > hasta ... …まで(< Ar.) 27 **uere** > veré 私は見よう 28 **mas** > más さらに 27 **de uero** > de verdad 確かに 30 **ueido** > visto ver の過去分詞 31 **aorare** > adoraré 私は礼拝しよう 32 **pregare, pregar** (s. XIII) = oraré, orar 祈る

【訳】19 この星はどこから来たのだろうか、20 だれがもたらしたのか、だれのものか。21 なぜこの徴しが現れたのか？ 22 私の生涯にこのようなものを見たことはない。23 確かに地上にお生まれになったのだ。24 平和のときも戦争のときも 25 東方の主であられるはずの方が。26 西方の皆の主にもなられずはずの方が。27 三晩たった後に、あの方にお会いしよう。

⁹³ Lat. st- > Esp. est- の変化により、stella > estrella となった。ここで strela とあるのは前の Esta の母音 -a によるものと考えられる。実際、後の 36 では Tal estrela となっている。Mod. estrella の -r- はギリシャ語源の astro との類推からと説明されることがあるが、これは日常ではあまり使われることがない言葉なので、むしろ音声的な原因を探るべきである。つまり、後の流音 -ll- が影響して -r- を生んだものと思われる。cf. Corominas y Pascual, s.v. *estrella*。

28 そして確かめよう。(間) 29 本当にお生まれになったのだ。30 私は何を
見たか確信が持てない。31 さあ、行こう。あの方にお目にかかろう。32 そ
して礼拝し祈願しよう。

(4)

| | |
|----|----------------------------------|
| | <i>(Melchor, solo)</i> |
| 33 | Ual, Criador, atal facinda |
| 34 | fu nunquas alguandre falada |
| 35 | o en escriptura trubada? |
| 36 | Tal estrela non es in celo, |
| 37 | desto so io bono strelero; |
| 38 | bine lo ueo sines escarno |
| 39 | que uno omne es nacido de carne, |
| 40 | que es senior de todo el mundo, |
| 41 | asi cumo el cilo es redondo; |
| 42 | de todas gentes senior sera |
| 43 | i todo siglo iugara. |
| 44 | Es? non es? |
| 45 | Cudo que uerdad es. |
| 46 | Ueer lo e otra uegada, |
| 47 | si es uertad o si es nada. |

【語句】 33 **Ual** > Val 護りたまえ 33 **Criador** > Creador 創造主 33 **atal** > tal
そのような 33 **facinda** = suceso 出来事 34 **fu** > fue (ser の点過去) 34
nunquas > nunca 「一度も...ない」 34 **alguandre** > alguna vez かつて Lat.
aliquando. 34 **falada** > hallada, hallar 見つかる 35 **escriptura** > escritura, libro
書物 35 **trubada** = encontrada 見つける。cf. Fr. trouver 「見つける」。36 **es** =
está ある 37 **desto** > de esto このことについては 37 **estrelero** 星占い師 38
bine > bien よく 38 **ueo** > veo 私は見る 38 **escarno** = error, engaño 間違い
39 **omne** > hombre 人 Lat. homine > Med. Esp. omne > Mod. Esp. hombre. 他
の語では -mn- > -mbr- の変化は当時進行していた。cf. 15 fembra (Lat.
femina); 81 nombres (Lat. nomine). 40 **cumo** > comoのように 40 **cilo** >
cielo 天空 41 **siglo** > siglo 時、時代 41 **iugara** > juzgará 裁くだらう pron.
[u(d)gará] 45 **cudo** = creo 私は思う Lat. cogito (cogitre). pron. [kuído]. 46 **ueer**
> ver 見る ueer lo he は分離未来形 46 **uegada** (s. XIII-XVII) = vez 度、回

【訳】 33 ああ神よ、救いたまえ。このような出来事が、34 かつて一度としてあったことか。35 書物にも見い出せることか? 36 あのような星は天空にはないものだ。37 このことは私は星占いに通じているのでよく知っている。38 これは間違いない。39 人が肉体からお生まれになったのだ。40 その方は諸国民の主であられる。41 あたかも天空が丸いごとく、42 諸国の民の主であられ、43 未来永劫治められる方(かた)だ。44 果たしてそうなのか、そうでないのか? 45 私は真実だと思う。46 もう一度確かめよう。47 それが真実なのか、そうではないのか? (間)

虚辞の否定語

34 は疑問文なので本来ならば否定語は必要ないはずだが、心理的に「かつて一度もなかったことだ」という否定の意味が含まれているために表現されたもので、「**虚辞**」(expletivo)という。

(5)

| | |
|----|----------------------------|
| 48 | Nacido es el Criador |
| 49 | de todas las gentes maior; |
| 50 | bine lo ueo que es uerdad; |
| 51 | ire ala, par caridad. |

【語句】 51 **par caridad** 是非、本当に (強調、「誓い」の表現で用いられた)、cf. 87.

【訳】 48 創造主がお生まれになったのだ。49 諸国の民の上に立たれる方が。50 私はそれが真実だと確信する。51 是非、その地を訪れよう。

(6)

| | |
|-------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| <i>Escena III</i> | |
| <i>Caspar y los otros dos Reyes, a Herodes.</i> | |
| <i>(Caspar)</i> | |
| 74 | Salue te el Criador, Dios te curie de mal, |
| 75 | un poco te dizeremos , non te queremos al, |
| 76 | Dios te de longa uita i te curie de mal; |
| 77 | imos in romeria aquel rei adorar |
| 78 | que es nacido in tierra, nol podemos fallar. |
| <i>(Herodes)</i> | |

| | |
|----|---------------------------------------------------|
| 79 | Que decides, o ides? A quin ides buscar? |
| 80 | De qual terra uenides, o queredes andar? |
| 81 | Decid me uostros nombres, nom los querades celar. |

【語句】 74 **Salue** > salve 救いたまえ 74 **curie** curiar (s. XII-XIII) = guarde, guardar; cuide, cuidar 護る 75 **dizeremos** > diremos 私たちはお話しいたしましょう。90 を参照 76 **al** = otra cosa 他のこと 76 **longa** = larga 長い 77 **imos** > vamos 私たちは行く 78 **fallar** > faltar 会わずにおく 79 **decides** > decís 言う 79 **o** > adónde どこへ 79 **ides** = vais 80 **terra** > tierra 土地 cf. 84 terra 80 **uenides** > venís 汝らが来る 80 **queredes** > queréis 81 **uostros** > vuestros 汝らの 81 **querades** > queráis 81 **celar** > ocultar 隠す

【訳】 74 (カスパル) あなたに神の救済がありますように。神があなたを悪からお護りになりますように。75 少しだけお話しいたしましょう。ほかでもありません。76 神があなたに長生きをお許しになりますように。77 われらはあの王を崇めに巡礼に参ります。78 この地にお生まれになられた方です。お会いしないわけにはいきません。79 (ヘロデ王) そちたちは何ということ申すのだ? どこに行こうというのだ? 80 この土地から参ったのか? どこに行こうとするのか? 81 そちたちの名を申せ。隠すことはならぬ。

(7)

| | |
|----|------------------------------------------------|
| | <i>(Caspar)</i> |
| 82 | A mi dizen Caspar, |
| 83 | est otro Melchior, ad achest Baltasar. |
| 84 | Rei, un rei es nacido que es senior de tierra, |
| 85 | que mandara el seclo en grant pace sines gera. |
| | <i>(Herodes)</i> |
| 86 | Es asi por uertad? |
| | <i>(Caspar)</i> |
| 87 | Si, rei, por caridad. |
| | <i>(Herodes)</i> |
| 88 | I cumo lo sabedes? |
| 89 | Ia prouado lo auedes? |

【語句】 83 **ad** (ed) > a ...…に 85 **mandara** > mandará 治めるだろう 85 **seclo** > siglo 時、時代 cf. 43 seclo 85 **gera** > guerra cf. 24 guera 88 **cumo** > cómo い

かにして 89 **auedes** > **habéis**

【訳】 82 (カスパル) 私の名はカスパル、83 この者はメルチョル、そしてこの者はバルタサルと申します。84 王よ、地上の主であられる王がお生まれになりました。85 この時代を大いなる平和のうちに戦さなくお治めになられる方です。86 (ヘロデ王) それは確かなことか? 87 (カスパル) 王よ、それは確かなことでございます。88 (ヘロデ王) どうしてそれがわかるのか? 89 もう確かめたことなのか?

(8)

| | |
|-----|---------------------------|
| | <i>(Caspar)</i> |
| 90 | Rei, uertad te dizremos, |
| 91 | que prouado lo auemos. |
| | <i>(Melchor)</i> |
| 92 | Esto es grand marauila, |
| 93 | un strela es nacida. |
| | <i>(Baltasar)</i> |
| 94 | Sennal face que es nacido |
| 95 | i in carne humana uenido. |
| | <i>(Herodes)</i> |
| 96 | Quanto i a que la uistes |
| 97 | i que la percibistis? |
| | <i>(Caspar)</i> |
| 98 | Tredze dias a, |
| 99 | i mais non auera, |
| 100 | que la auemos ueida |
| 101 | i bine percebida. |

【語句】90 **dizremos** > diremos, cf. 75 **dizeremos** 94 **face** > **hace** 95 **in** > **en** 96 **i a** > **hay**, = **hace** 「時間がたつ」。97 **percibistis**, **percebir** > **apercibisteis**, **apercibir** 認める。-istis はラテン語の活用語尾。98 **tredze** > **trece** 13 の 99 **auera** > **habrá** 100 **la auemos ueida** > **la hemos visto**

【訳】 (8) 90 (カスパル) 王よ、真実を申し上げます。91 われらはすでに確かめたのでございます。92 (メルチョル) これは奇跡でございます。93 新星が出現したのでございます。94 (バルタサル) あの方がお生まれになった徴しがあり、95 それも人の体からお生まれになったのでございます。96

(ヘロデ王) そちたちがそれを見て、97 知ったのはどれほど前のことか? 98 (カスパル) 13 日前のことです。99 それ以前のことではありません。100 私たちが星を見て、101 その徴しに気づいたのは。

「存在」の hay

96 「そこに」という意味の弱勢の副詞 *i* (Lat. *ibi*) は動詞 *a* の前にも後にもあった。次第に動詞の後に位置に固定し *a+i* から現代語の *hay* 「ある、いる」が成立した。

●課題

【課題 4a】スペイン文学の古典や現代の定型詩を取り上げ、脚韻の種類や効果について考察しなさい。日本の定型詩の形式と比較しなさい。

【課題 4b】スペインの中世の劇が教会で行われた理由を社会的・心理的要因を含めて考察しなさい。

【課題 4c】本文と『聖書』「マタイによる福音書」2 を比較しなさい。

【課題 4d】現代の *Reyes Magos* の祝祭について調べなさい。

【参考】

Gifford, D. J. y Hodcroft, F. W. 1966. *Textos lingüísticos del medievo español*. Oxford. The Dolphin Books.

Lapesa, Rafael. 1954. “Sobre el *Auto de los Reyes Magos*: sus rimas anómalas y el posible origen de su autor”, *Homenaje a Fritz Krüger*, II. Universidad Nacional de Cuyo, Mendoza, recogido en *De la edad media a nuestros días. Estudios de historia literaria*, Madrid, Gredos, pp.37-47.

Menéndez Pidal, Ramón. 1976. *Textos medievales españoles. Ediciones críticas y estudios*. Madrid. Espasa-Calpe, pp.169-177.

5. 不思議な話…『愛の歌』

Razón de amor (1205 年頃)

スペインではボリュームたっぷりの昼食とワイン、そしてけだるい午後の時間を過ごす「シエスタ・午睡」(siesta)という習慣が一日をくっきりと二分し、まったく異なる午前と午後の生活を豊かに作り上げている。1日か2倍になり得をしたような気分だ。都会を離れて田舎で暮らすと時の経過はさらに緩やかになる。しかし、ここでも美しい自然と人々の興味深い暮らしぶりを間近に見ることができるので退屈することはない。スペイン旅行では都市を点で結ぶ見物だけでなく、その線上にある小さな村の生活を知ることもお勧めしたい。



Olivos

想像をたくましくすれば私たちは時間と空間を超え、歴史的事実という制限さえも超えて旅することも可能だ。ここでは八百年前にスペインの田舎で詩人が見た午睡の夢の中に入りたい。

春の午後、泉のほとりで

イスラム教徒と「常時戦時体制にあった」(Pierre Vilar) とされる中世の Castilla で何ともものどかな春の午後の出来事を歌う詩が作られていた。色とりどりの草花に囲まれた泉のほとりで魅力的な女性と出会い恋を語る、という『愛の話』 *Razón de amor* は次のように始まる⁹⁴。

(1)

| | |
|---|------------------------------------|
| 1 | Qui triste tiene su coraçõ, |
| 2 | benga oyr esta razon. |
| 3 | Odra razon acabada, |
| 4 | feyta d'amor e bien rymada. |

⁹⁴ González Ollé (1980).

| | |
|----|-------------------------------|
| 5 | Vn escolar la Rimo |
| 6 | que siempre duenas amo; |
| 7 | mas siempre ouo tryança |
| 8 | en Alemania y en Françia |
| 9 | moro mucho en Lombardia |
| 10 | pora prender cortesia. |

【語句】 1 **Qui** > Quien …する人 (関係代名詞) 2 **benga** > venga venir (来る) の接続法 3 **Odra** > oirá 聞くことだろう 3 **acabada** = perfecta, completa 完全な、よく出来た 4 **feyta** > hecha 6 **duenas** > doncellas 娘たち 7 **ouo** > tuvo 持つ 7 **tryança** = actividad, trato 活動、経験、生活 9 **moro** = vivió 暮らした 10 **pora** > para … …のために **prender** > aprender 学ぶ 10 **cortesia** = amor cortés 都人 (宮廷) の愛 11 **depues** > después de … …の後で

【訳】 1 沈んだ気持ちでいる者よ、2 この歌を聞きに来なさい。3 上出来の歌が聞けるだろう、4 愛を語る、美しい歌を。5 学生が書いた歌だが、6 彼はいつも娘たちに恋をした。7 いつも多くの経験を積んだ、8 ドイツで、フランスで。9 また、長い期間ロンバルディアで暮らし、10 都人の恋愛を学んだ。

パリ国立図書館に保存されているテキストは Aragón の書記生が写したもので原典はおそらくカスティーリャ方言で書かれていたと考えられる。スペインの方言学の権威であった Manuel Alvar によれば上の太字で示した4行の **feyta** の -yt- はアラゴン方言の特徴で、カスティーリャ語では -yt- > -ch- [tʃ チ] となった。

por と para

現代語の前置詞の **por** と **para** は使い分けがむずかしい。辞書などでは、**por** は行為の出発点となる(内在的な)「動機・理由」を示し、**para** は「目的、目標、利益」など行為の外にある「到達点」を示すと説明され、次のような例文が挙げられている。Iré a España **por** hablar con el Sr.López. 「私はロペス氏に話ができればと思ってスペインへ行きます」(動機)。Iré a España **para** aprender el idioma. 「私はことばを学ぶためにスペインへ行くつもりだ」(目的)。

よく見ると **por** と **para** は形がよく似ている。それは **para** が **por** と **a** (方向を示す) という2つの前置詞が合成してできたためだ。この **por** (理由) + **a** (方向) → **para** (目的) という変化を証明するミッシングリンクがまさに先

に見た白昼夢の導入部(10行)にあった **pora** という語形である(【写真-2】は Cantar de Mío Cid, 49行にある **pora**)。



Esto la niña dixo, tornos **pora** su casa.
(女の子はこう言って彼女の家に戻った)

(2)

| | |
|----|----------------------------------|
| 11 | En el mes d'abril, depues yantar |
| 12 | estaua so un oliuar. |
| 13 | Entre çimas d'un mançanar |
| 14 | un uaso de plata ui estar; |
| 15 | pleno era d'un claro uino |
| 16 | que era uermeio e fino, |
| 17 | cubierto era de tal mesura |
| 18 | no lo tocas la calentura. |
| 19 | Vna duena lo y auí' puesto, |
| 20 | que era senora del uerto, |
| 21 | que quan su amigo uiniese, |
| 22 | d'aquel uino a beuer le diesse. |
| 23 | Qui de tal uino ouiesse |
| 24 | en la mana quan comiesse |
| 25 | e d'ello ouiesse cada dia, |
| 26 | nuncas mas enfermarya. |

【語句】11 **depues** > después de …の後で 11 **yantar** = comer 食事をする 12 **so** = bajo …の下で **oliuar** > olivo オリーブの木 13 **mançanar** > manzano 林檎の木 15 **pleno** (アラゴン方言) > lleno 満ちた 16 **uermeio** > bermejo 赤い 17 **mesura** = manera 様子、方法 18 **tocas** > tocarse さわらないように 19 **y** > ahí **eua** (アラゴン方言) = había 21 **quan** > cuando … …の時に 22 **beuer** > beber 飲む 24 **mana** > mañana 朝 24 **quan** … > cuanto … どれほど…しても

【訳】11 四月のある日、食事の後、12 私はオリーブの木陰にいた。13 林檎の木の梢に 14 銀の杯があるのを見つけた。15 透き通った葡萄酒で満たされていた。16 上等の赤葡萄酒である。17 覆いがあり、18 暖かくなならないようにしてあった。19 ある女性がそこに置いていったのだ。20 彼女は畑の主人だった。21 彼女の恋人が来たら、22 その葡萄酒を差し上げようと。23 こんな葡萄酒を飲む者は、24 朝満腹に食事をしようと、25 また、毎日そんなことをしても、26 けっして病むことはないだろう。

葡萄酒の入った杯が林檎の木の梢にある、という設定は現実的でないが、詩人がすでに夢の世界にいたと考えれば納得できるし、元々創作なのだからどんな設定も自由だろう。しかし、問題は筋の展開までもが不自然であることである。たとえば、せっかく用意された上等の葡萄酒が詩の最後まで「私」の口に届かない。ほかにも後で見るように腑に落ちない箇所がいくつもある。作者と主人公は思考能力を放棄して眠り続けているのだろうか。夢の続きは…。

■テキスト

詩人の夢

また別の林檎の木の梢に今度は林檎畑に湧き出る冷たい水で満たされた杯が置かれていた。詩人はそれが魔法にかけているのではないかと恐れ手をつけない。やがて春の草花に囲まれて絶え間なく水が湧き出る涼しげな泉にやって来た。彼は水を一口飲み花を一輪摘んで、歌でも歌いたい気分になっていた。そこに美しい女性が登場する。

(3)

| | |
|----|----------------------------------|
| 27 | ARiba del mançanar |
| 28 | otro uaso ui estar; |
| 29 | pleno era d'un agua fryda |
| 30 | que en el mançanar se naçia. |
| 31 | Beuiera d'ela de grado, |
| 32 | mas oui miedo que era encantado. |
| 33 | Sobre un prado pus mi tiesta, |
| 34 | que nom fiziese mal la siesta; |
| 35 | parti de mi las uistiduras, |
| 36 | que nom fizies mal la calentura. |

| | |
|----|--------------------------------|
| 37 | Plegue a una fuente pererenal, |
| 38 | nunca fue omne que uies tall; |
| 39 | tan grant uirtud en si auia, |
| 40 | que de la frydor que d'i yxia, |
| 41 | C. pasadas adeRedor |
| 42 | non sintryades la calor. |

【語句】 29 **fryda** > fría 冷たい 33 **tiesta** = cabeza 頭 34 **siesta** = la hora de sexta, mediodía 37 **Plegue** > llegué 37 **pererenal** > perenne 40 **frydor** > frío 冷たさ 40 **yxia** = salía 出ていた 41 **pasadas** > pasos 歩 41 **adeRedor** > alrededor 回りに

【訳】 (3) 27 林檎の木の梢に、28 杯がもう一つ置かれていた。29 冷たい水で満たされ、30 それは林檎畑に湧き出る水だった。31 私は喜んで飲もうとしたが、32 魔法にかけているのではないかと恐れた。33 私は草原に頭を横たえ、34 午の暑気にあたらないようにした。35 服を脱ぎ、36 暑さをしのいだ。37 絶え間なく湧き出る泉にやって来た。38 人がこれまで見たこともない、39 すばらしい力があって、40 そこから生ずる冷気で、41 百歩回りは、42 暑さを感じないほどだった。

(4)

| | |
|----|----------------------------------|
| 43 | Todas yeruas que bien olien |
| 44 | la fuent çerca si las tenie: |
| 45 | y es la saluia, y sson as Rosas, |
| 46 | y el lyryo e las uiolas; |
| 47 | otras tantas yeruas y auia |
| 48 | que sol nombrar no las sabria; |
| 49 | mas ell olor que d'i yxia |
| 50 | a omne muerto Ressuçitarya. |
| 51 | Prys del agua un bocado |
| 52 | e fuy todo esfryado. |
| 53 | En mi mano prys una flor, |
| 54 | sabet, non toda la peyor, |
| 55 | e quis cantar de fin amor. |

【語句】 46 **uiolas** > violetas すみれ **sol** > sólo…だけ 51 **Prys**, prender = tomé, tomar (水を)飲む 52 **esfryado**, esfryar > resfriado, resfriar 冷やす **fin** > fino 上

品な

【訳】43 あらゆる種類のかぐわしき草花が、44 泉のまわりに咲き、45 そこここにサルビアが、そしてバラが、46 また、ユリが、スマレが、47 ほかにも多くの草花が咲いていたが、48 私には名をあげることさえかなわない。49 しかし、そこから生ずる香りは、50 死人を生き返らせることもできるだろう。51 私は水を一口飲んで、52 すっかり涼んだ。53 手に一輪花を摘んだ。54 それはなかなかの見事な花だった。55 そこで雅な歌を歌いたい気分になったものだ。

(5)

| | |
|----|------------------------------------|
| 56 | Mas ui uenir una doncela; |
| 57 | pues naçi, non ui tan bella: |
| 58 | blanca era e bermeia, |
| 59 | cabellos cortos sobr'ell oreia, |
| 60 | fruenta blanca e loçana, |
| 61 | cara fresca como maçana; |
| 62 | naryz equal e dereyta, |
| 63 | nunca uiestes tan bien feyta; |
| 64 | oios negros e Ridientes, |
| 65 | boca a Razon e blancos dientes; |
| 66 | labros uermeios, non muy delgados, |
| 67 | por uerdat bien mesurados; |
| 68 | por la çentura delgada, |
| 69 | bien estant e mesurada; |
| 70 | el manto e su brial |
| 71 | de xamet era, que non d'al; |
| 72 | vn sombrero tien en la tiesta, |
| 73 | que nol fiziese mal la siesta; |
| 74 | vnas luuas tien'n la mano, |
| 75 | sabet, non ie las dio uilano. |

【語句】57 **pues** > después de que ... …して以来 60 **fruenta** > frente 額 (ほしい) 60 **loçana** > lozana 若々しい 61 **maçana** > manzana リンゴ 62 **equal** > igual 形が整った 65 **a razón** ほどよい 66 **labros** > labios 唇 67 **mesurados** = proporcionados 調和のとれた 68 **çentura** > cintura 腰 69 **bien estant** = de

buena postura 姿勢のよい 71 **xamet** > jamete 絹布 71 **al** = otra cosa 他のもの
72 **tiesta** = cabeza 頭 73 **siesta** = calor de mediodía 真昼の暑気 74 **luuas** =
guantes 手袋 75 **ie** > se 彼女に 75 **uilano** > villano 田舎者

【訳】 56 そこに一人の女性がやって来た。57 私は生まれてこのかたこれほど美しい人を見たことがなかった。58 色白で、赤味がさし、59 髪は短く耳にかかり、60 額は白く若々しい。61 顔はリンゴのようにみずみずしい。62 鼻の形は整って、真っ直ぐで、63 皆もこんな美しい人はけっして見たことはないはずだ。64 目は黒く、笑みを浮かべ、65 口は大きくもなく小さくもなく、歯は白く、66 唇は赤く、あまり薄くなく、67 本当に釣り合いがとれている。68 腰は細く、69 姿勢がよく、釣り合いがとれている。70 肩掛けと衣は、71 絹で他ではない。72 頭には帽子をかぶり、73 真昼の暑気を避けていた。74 手には手袋をしていたが、75 これは卑しい身分の者の贈り物であるはずがない。

(6)

| | |
|----|----------------------------------|
| 76 | De las flores uiene tomando, |
| 77 | en alta uoz d'amor cantando. |
| 78 | E deçia: " Ay, meu amigo, |
| 79 | si me uere yamas contigo! |
| 80 | Amet sempre, e amare |
| 81 | quanto que biua sere! |
| 82 | Por que eres escolar, |
| 83 | quis quiere te deuria mas amar. |
| 84 | Nunqua odi de homne deçir |
| 85 | que tanta bona manera ouo en si. |
| 86 | Mas amaria contigo estar |
| 87 | que toda Espana mandar. |

【語句】 78 **meu** > mi 私の 78 **amigo** 恋人 79 **uere** > viere 79 **yamas** (jamás) = siempre つねに、いつも 80 **Amet** = Te amé 81 **sere** = estuviere 82 **escolar** = estudiante 学生 83 **quis quiere** = cualquiera 誰でも 84 **odi** > oí 私は聞いた 84 **homne** > hombre 人 85 **ouo** = tuvo 持った 86 **amaria** = querría 私は望むことだろう。

【訳】 76 彼女は花を摘みながらやって来た。77 愛の歌を大きな声で歌いながら。78 彼女は言いました「ああ、私が愛する人よ! 79 いつもあなたと

一緒にいられたら! 80 私はいつもあなたを愛し、また愛し続けること
しよう。81 私に命があるかぎり、82 あなたは学生だから、83 誰でもあなた
をもっと好きになることでしょう。84 私は聞いたことがありません。85 こ
れほどの美点をそなえた方のことを。86 私の望みはあなたと一緒にいるこ
と、87 スペイン全土を手にするよりも。

(7)

88 Mas d'una cosa so cujtada:
89 e miedo de seder enganada;
90 que dizen que otra duena,
91 cortesa e bela e bona,
92 te quiere tan gran ben,
93 por ti pierde su sen;
94 e por esso e pauor
95 que a esa quieras mejor.
96 Mas s'io te uies una uegada,
97 a plan me queryes por amada"
98 Quant la mia senhor esto dizia,
99 sabet, a mj non uidia.

* * *

【語句】 88 **so** = estoyである 88 **cujtada** = ansiosa, preocupada 89 **e** < habere = tengo 持っている 89 **seder** > ser ...である 89 **enganada** > engañada 91 **cortesa** = de la Corte, urbana 都の 92 **ben** > bien よく 93 **sen** > sentido 意識、良識 94 **pauor** = miedo 恐れ 96 **uies** > viese ver 「見る」の接続法過去 **una uegada** = una vez 一度 97 **a plan** = ciertamente 確かに 98 **senhor** = señora 婦人 99 **uidia** > veía 見ていた

【訳】 88 しかし、ひとつ心配事があります。89 私は騙されるのではないかと恐れております。90 人の噂によると、一人の若い女性が、91 都の美しく心のよい女性が、92 あなたを愛するあまり、93 心を乱しているということ。94 それゆえ私は怖ろしいのでございます。95 あなたが私よりも彼女を愛するのではないかと。96 でも、私があなたにお会いすれば、97 あなたは私を本当に愛することでしょう。」98 私の女性がこのように話すとき、99 皆様、うつむいていたのです。

(8)

| | |
|-----|---------------------------------------------------|
| 134 | Vna grant pieça ali estando, |
| 135 | de nuestro amor ementando, |
| 136 | elam dixo: "el mjo señor, oram serya de tornar, |
| 137 | si a uos non fuese en pesar." |
| 138 | Yol dix: "yt, la mia señor, pues que yr queredes, |
| 139 | mas de mi amor pensat, fe que deuedes." |
| 140 | Elam dixo: "bien seguro seyt de mj amor, |
| 141 | no uos camiare por un enperador." |
| 142 | La mja señor se ua priuado, |
| 143 | dexa a mj desconortado. |
| 144 | Que que la ui fuera del uerto, |
| 145 | por poco non ⁹⁵ fuy muerto. |

【語句】 134 **pieça** = rato しばらくの間 134 **ali** > allí あそこで 135 **ementando** = hablando 話しながら 136 **oram** = hora me 136 **tornar** = volver 戻る、帰る 138 **dix** > dije 私は言った 139 **fe que debes** = ciertamente, en verdad 本当に 141 **camiare** > cambiaré 私は変えよう 142 **priuado** = de prisa 急いで 143 **desconortado** = desconsolado 意気消沈して 144 **que que** = en cuantoするとすぐに

【訳】 134 長い間そこにおいて、135 私たちの愛を語ると、136 彼女は私にこう言った。「あなた、今はもう帰らなければなりません、137 あなたに辛いことでなければ、138 私は彼女に答えた「お行きなさい、それをお望みならば、139 しかし、お願いだから私の愛を忘れないでおくれ。140 彼女は言った「私の愛を信じてください、141 たとえ相手が皇帝であってもあなたと変えるようなことはいたしません。」142 私の女性は急ぎ足で去り、143 私を悲しませた。144 彼女の姿が果樹園から消えると、145 私はあやうく命を失いかけた。

葡萄酒と水

奇妙なのはこれに続く後半部である。彼女が去った果樹園に一羽の鳩が飛来する。それが「私」に気づいて逃げるとき葡萄酒に水をまき散らしてしまう。すると唐突に葡萄酒と水がそれぞれの自慢話で口論を始め、これが最後まで延々と続くのである。このように性格が明確に異なる二部に分かれるので元々別の話を無理に合体させたという説もあるが、前半で葡萄

⁹⁵ 虚辞の no.

酒と真水に言及しているので統一された作品であるとも考えられる。それにしても不思議な話だ。

●課題

- (1) 辞書で“razón”の意味を調べ、気づいたことを述べなさい。
- (2) 次の Leo Spitzer (1950, 1981:161-165)の論考を読み、あなたの意見を述べなさい。

"Hay una relación entre el debate del vino y del agua y la escena amorosa: la de la "sed", la sed que anhela la saciedad por bebidas refrescantes, y la sed de amor que se alivia en el goce sexual." (p.162) "Después de la escena amorosa, conoce a su amante en su persona individual y en su carne. Pero ¿no hay cierta analogía, que el poeta se cuida de subrayar, por una parte entre el amor puro ("platónico", trovadoresco) y el agua pura; por otra entre la experiencia sexual, embriagadora, y el vino?" (p.163) "La paloma, que no quería otra cosa que referescarse en el agua como el joven clérigo --nótese la repetición de la palabra *esfriado* en ambas esenas--, ha provocado el "desastre", querido por poderes misteriosos, de la mezcla de los dos líquidos. He aquí la interpretación, destinada al poeta y al lector, de la escena amorosa: ¿no mostraría ésta el efecto saludable de la combinación de las dos variantes del Amor, de la pura y de la sensual, que el agua y el vino simbolizan?" (p.164).

- (3) この詩は次の連で終わるが、この部分を解釈し、気づいたことを述べなさい。

| | |
|-----|---------------------------|
| 260 | Mi Razon aqui la fino, |
| 261 | e manda nos dar uino. |
| 262 | Qui me scripsit, scribat, |
| 263 | semper cum Domini bibat. |
| 264 | Lupus me fecit, de Moros. |

【参考】

- González Ollé, F. 1980. *Lengua y literatura españolas medievales*. Barcelona. Ariel.
- Rico, Francisco y Alan Deyermond. 1981. *Historia y crítica de la literatura española, Edad Media*. Barcelona. Editorial Crítica.

- Spitzer, Leo. 1950 "Razón de amor", *Romania*, 51, pp.145-165, recogido parcialmente en Francisco Rico y Deyermond (1981), pp.161-165.
- Menéndez Pidal, Ramón. 1976. *Textos medievales españoles. Ediciones críticas y estudios*. Madrid. Espasa-Calpe, pp.103-160.

6. 詩の中の請求書…『聖ミリアンの生涯』

Gonzalo de Berceo, *Vida de San Millán* (1234)

スペインの各地にある修道院は、あわただしく動き回る旅行者に静かな憩いの場と時間を与えてくれる。都会の喧騒から離れて心を落ち着ければゆったりと贅沢な時間を味わうことができるだろう。このような場所で読書三昧などという夢を思い描くこともある。

しかし気楽な旅行者の勝手な想像とは裏腹に中世スペインの修道院は経済的に非常に苦しかったようだ。ゴンサロ・デ・ベルセオ(Gonzalo de Berceo, 1185?-1264)の作品を読むとそれがよくわかる。このことは後述することにして、はじめに著者と作品を簡単に紹介しよう。Gonzalo de Berceo は中世スペインで名が知られた最初の詩人で、現在の Rioja 自治州 Logroño 県の Berceo 村に生まれた。「教養派文学」(Mester de Clerecía)の詩人として多くの作品を残したが、『聖母の奇跡』(*Milagros de Nuestra Señora*)と、今回取り上げる『聖ミリアンの生涯』(*Vida de San Millán*)がとくに有名である。

San Millán は Berceo 村に近い聖ミリアン修道院の創設者である。伝説によれば聖人は徳行を積んで 574 年に長寿をまっとうし、没後も多くの奇跡を起こしたという。*Vida de San Millán* は全編 489 連の比較的短い作品で 3 章に分かれている。牧童として過ごした少年時代(一章)、修道院で起こした数々の奇跡(二章)、没後の奇跡が語られている(三章)。



**Monasterio de Suso
San Millán, La Rioja**

シマンカスの戦い

とくに興味深いのは第三章である。聖人が亡くなってはるか後の 939 年に現在の Valladolid 市郊外 Simancas でレコンキスタの戦いがあった。León 王国の Ramiro II 世(在位 931-950)と Castilla 伯 Fernán González の連合軍がイスラム教徒の王 Abderramán III 世を破った戦いであるが、そのとき「奇跡」が起きたことが語られている。これは Berceo の作品中唯一の戦闘場面である(Dutton, 1967)。

(1)

| | |
|------|---------------------------------------------------------------|
| 433a | Moviéronse las huestes, tovieron sue carrera |
| b | por acorrer al rey ⁹⁶ , ca en porfazo era . |
| c | mas quando aplegó la punta delantera, |
| d | ya pisavan los reys el suelo de la era. |
| 434a | Ya eran en el campo entrambas las partidas, |
| b | avién ambos los reys mezcladas las feridas ⁹⁷ ; |
| c | las azes de los moros ⁹⁸ ya eran embaídas, |
| d | ca la ira de Christo las avié confondidas. |
| 435a | Sennores e amigos quantos aquí seedes , |
| b | si escuchar quisiéredes, entenderlo podedes, |
| c | qual acorro lis traxo el voto qe sabedes |
| d | e Dios como lis fizo por ello sues mercedes. |

【語句】433 **huestes** = ejércitos 軍 **sue** > su **acorrer** = acudir corriendo **porfazo** = situación desairada 窮地 **era** = estaba **aplegó** > llegó 到着した **era** Lat. area = tierra. // 434 **entrambas** > ambas 両方の **feridas** = golpes 打撃 **az** = tropa en fila 戦列 **embaídas** = desordenadas 乱れた **confondidas** = malparadas 痛めつけた 435 **seedes** = estéis いる **acorro** = socorro 救い

【訳】433 軍は動き、走った。/ 窮地にあった王を救うために。/ しかし、前衛が到着したときは、/ すでに両王は戦場の土に足を降ろしていた。/ 434 両軍はすでに戦場にあり、/ 干戈(かんか)を交えていた。/ すでにモーロの戦列は乱れていた。/ キリストがお怒りになり懲らしめられたのだ。// 435 ここにお集まりの皆様、/ 耳を傾ければおわかりになります。/ 皆様もご存じの供え物のおかげでどのような援助が得られたのかを、/ また、神がそれに報いてどのような御恵みを彼らに賜れたのかを。

語学的には **era, eran, seedes** という ser 動詞の変化形が興味深い(433 最後の **era** は別の言葉)、これは次節で述べることにして戦いの帰趨を見よう。「奇跡」が起きたのは次の場面である。

(2)

| | |
|------|-------------------------------------------------|
| 436a | Quando estaban en campo los reys, azes paradas, |
|------|-------------------------------------------------|

⁹⁶ Rey Ramiro II (在位 931-950) 151.

⁹⁷ 434b は過去完了の文。過去分詞は目的語の性・数と一致した。

⁹⁸ アブデラマンの軍。

| | |
|------|--------------------------------------------------|
| b | mezclavan las heridas las lanzas abaxadas, |
| c | temiense los christianos de las otras mesnadas |
| d | ca eran ellos pocos e ellas muy granadas. |
| 437a | Mientras en esta dubda sedién las buenas yentes, |
| b | asuso contra'l cielo fueron parando mientes; |
| c | vidieron dues personas fermosas e luzientes, |
| d | mucho eran más blancas qe las nieves rezientes. |

【語句】 436 **abaxadas** > bajadas 下げて **meznada** = ejército 軍 **granadas** = grande, abundante 大勢の 437 **mientras** > Mientras …の間 **asuso** = arriba 上で **parar mientes** = prestar atención 注意する **dues** > dos 二人の **fermosas** > hermosas 美しい **luzientes** = que luce 輝く

【訳】 436 両王は戦場に着くと、戦列を整え、/ 槍先を下げて、突き合った。/ キリスト教徒は敵の大軍に恐れをなした。/ 自軍は少数で、敵は多勢だからだ。/ 437 良き民はこうした懸念を抱きながら/ 上空を仰ぎ目をこらした。/ そこに美しく輝くお二人の姿を見た / 新雪よりもはるかに白いお姿であった。

この「お二人」とは聖ヤコブと聖ミリヤンである。以下はテキストを参照。

SER と ESTAR

途中だが、今回のテーマである **SER** と **ESTAR** に触れておこう。**SER** 動詞の活用が極端に不規則であるのは、ラテン語の *esse* 「…である」と *sedere* 「座っている」という 2 つの動詞がスペイン語でモザイクのように融合したという理由による。直説法現在 *soy, es, somos, sois, son* と、線過去 *era*, 点過去 *fui*, 接続法過去 *fuera* はラテン語の *esse* に由来するが、これらはラテン語ですでに不規則変化であった。一方規則的な不定詞 *ser*、過去分詞 *sido*、現在分詞 *siendo*、未来 *seré* と過去未来 *sería*、接続法現在 *sea* は *sedere* に由来する。直説法現在 2 人称単数 *eres* だけが特別にラテン語 *esse* の未来 *eris* からできたが、これはラテン語の現在 2 人称単数 *es* と 3 人称単数 *est* が類似していて紛らわしかったためである。

sedere, ser は「座っている」から「…という状態である」という意味になり、その後「…である」という意味にも使われるようになった。上で見た本文中に *ser* の過去形 *era* や *fueron* が「…という状態である」という意味で使われている。435 と 437 には *seedes* と *sedién* という形も見られる。一方、

ESTAR は本文 436 のように「立っている、…にいる」という意味だけで使われた。それが、しだいに現代スペイン語のように「…という状態である」という意味にも使われるようになった⁹⁹。

苦しい台所事情

上の(1) 435 行に **el voto qe sabedes** 「皆様もご存じの供え物」という句がある。これは何を意味しているのだろうか。このような緊迫した戦闘場面で、なぜ詩人は修道院に奉納すべき供え物のことをわざわざ念を押すように言わなければならなかったのだろうか。

このテキストを校訂した Brian Dutton の研究によれば、この聖人伝のモチーフは San Millán のありがたい奇跡の数々を民衆にわかりやすい言葉で語って聞かせる、というより聖人の名を各地に知らせ、本書に記された供え物によって貧窮した修道院を救うことであった、という。確かに後続する詩の 5 連にわたって各町村が修道院に納めるべき供物の詳細なリストが請求書のように記され、それも格調高いクアデルナ・ビア Cuaderna Vía という形式で歌われている¹⁰⁰。さらに「もしこれらの供え物が確かに届けられていれば / この聖人たちは我々に満足するであろうし、 / 我々も折々に適量のパンと葡萄酒があって、 / 今のような惨めな生活をしなくてもすむだろう」と嘆いている。修道僧たちの窮状を切々と訴える中世スペイン語の響きが聞こえてくるようだ。

■テキスト

リオハ方言

Rioja 地方はかつては Navarra に属していたが、11 世紀になると Castilla の一部となった。f- > h > の音変化はバスク語の影響で早かった。Berceo の作品に見られる言語的特徴は Castilla の北部のものである。語末の -i (= -e) は頻繁に見られるが (esti, essi, li, pudi, fizi, salvesti)、これは今日でも León レオン方言に残存している。-mb- > -m- の変化はない。また、比較級に más と並んで plus が用いられた¹⁰¹。

⁹⁹ cf. Joan Corominas. 1976. *Breve Diccionario Etimológico de la Lengua Española*, s.v. ser.

¹⁰⁰ 七・七音節で脚韻が完全に一致する 4 行詩。

¹⁰¹ cf. R. Lapesa. *Historia de la Lengua Española*, 48, 2.

(1) - (2)

[前掲]

(3)

| | |
|------|--------------------------------------------------|
| 438a | Vinién en dos cavallos plus blancos que cristal. |
| b | armas quales non vío nunqa omne mortal; |
| c | el uno tenié croça, mitra pontifical, |
| d | el otro una cruz, omne non vío tal. |
| 439a | Avién caras angélicas, celestíal figura, |
| b | descendién por el áer a una grand pressura, |
| c | catando a los moros con turba catadura, |
| d | espadas sobre mano, un signo de pavura. |

【語句】 438a **plus** = más ... より… 438b **vío** > vió 見た 438b **omne** > hombre 人 438c **croça** = báculo pastoral o episcopal 錫杖(しゃくじょう) 438c **mitra** ミトラ、司教冠 439a **Avién** = Tenían 439b **áer** > aire 空中 439b **pressura** (s. XIII-XV) = prisa 急ぎ 439c **catando** = mirando 見ながら (catar 'mirar'; s. XII-XV) 439c **turba** > torva 恐ろしい 439c **catadura** (s. XIII-XV) = gesto 形相 439d **pavura** (s. XIII-XV) > pavor 恐れ

【訳】 438a お二人は水晶よりも白い馬に跨って来られた。438b つぎのような武器は人が目にしたことの無いものだった。438c 一人は錫杖を持ち、司教の冠をしていた。438d もう一人は十字架を手にしていた。このようなものを見た者はいない。439a お二人の顔は天使のごとく、またそのお姿は崇高であった。439b 速やかに空中を下り、439c 恐ろしい形相でモーロ人をにらみつけていた。439d 剣を手にした様子はまさに恐怖の徴しだった。

(4)

| | |
|------|--------------------------------------------------|
| 440a | Los christianos con esto foron más esforzados, |
| b | fincaron los inojos, en tierra apeados; |
| c | firién todos los pechos con los punnos cerrados, |
| d | prometiendo emienda a Dios de sus peccados. |
| 441a | Quando cerca de tierra fueron los cavalleros, |
| b | dieron entre los moros, dando golpes certeros; |
| c | ficieron tal damage en los más delanteros |
| d | qe plegó el espanto a los más postremeros. |

【語句】 440a **foron** > fueron …であった(cf. 441a fueron) 440b **fincaron los inojos** > hincaron los hinojos 跪いた 440c **firién** > herían = golpeaban 打った 441b **colpes** > golpes 打撃 441b **certeros** (s. XIII-XV) = seguros 確かな 441c **domage** (s. XIII) > daño 被害 cf. Fr. dommage 441d **postremeros** (s. XIII-XV) > postreros, traseros, últimos

【訳】 440a このことでキリスト教徒は大いに勇気づけられた、440b 地面に降りて、ひざまづき、440c 握ったこぶしで胸を打ち、440d 神に自らの罪の償いを約束した。441a 二人の騎士たちが地上に近づくと、441b モーロ人の中に突入し、過たず剣を打ちつけた。441c 敵の最前列に与えた被害は大きく、441d その恐怖は最後列にまで達した。

(5)

| | |
|------|-------------------------------------------------|
| 442a | Abuelta d'estos ambos qe del cielo vinieron, |
| b | aforzaron christianos, al ferir se metieron; |
| c | juravan los moriellos por leí qe prisieron, |
| d | qe nunca en sos días tal priessa non ovieron. |
| 443a | Cayén a muy grand priessa los moros descreídos, |
| b | los unos desmenbrados, los otros desmedridos; |
| c | repisos eran mucho qe y eran venidos, |
| d | ca entendién del pleyto qe serién mal exidos. |

【語句】 442a **Abuelta de** = Junto con …と一緒に 442b **aforzaron** (s. XIII) = cobrar ánimo 元気を出す 442c **moriellos** = moros + iellos (縮小辞)¹⁰² モーロ人ども 442d **sos** > sus 彼らの 442d **priessa** (s. XII-XV) = apuro 窮地 442d **ovieron** = tuvieron 持った 443a **Cayén** > Caían 倒れた 443b **desmedridos** = amedrentados おじけづいて 443c **repisos** = arrepentidos 悔悟して 443c **y** = allí そこに 443c **eran venidos** > habían venido 来た(過去完了) 443d **pleyto** (s. XIII-XV) = contienda, lid, batalla 戦い 443d **exidos** = salidos 結果となる (exir 'salir', s. XII-XIII)

【訳】 442a 天空から降りてきたこのお二人の援護を受け、442b キリスト教徒は発奮し、敵に切り込んだ。442c モーロ人どもは彼らが奉じる信仰にかけて誓って言った。442d 生まれてこのかた、このような窮地に陥ったことはない、と。443a 神を信じぬモーロ人は無惨に倒れていった、443b あ

¹⁰² この縮小辞 -iello は「軽蔑」の意味があったと思われる。

る者たちは手足を奪われ、またある者たちは恐れをなした。443c ここまでやって来た者たちは後悔した。443d この戦いに勝ち目がないとわかったからだ。

(6)

| | |
|------|----------------------------------------------|
| 444a | Cuntiólis otra cosa qe ellos non sonnavan, |
| b | essas saetas mismas qe los moros tiravan, |
| c | tornavan contra ellos, en ellos se fincavan; |
| d | la fonta qe ficieron, carament la compravan. |

【語句】444a **Cuntiólis**¹⁰³ > Les aconteció 彼らに起きた (cuntir 'acontecer, s. XI-XV) 444b **saeta** (s. XIII-XV) = flecha 矢 444b **se fincavan** (s. XIII-XIV) = se clavaban 刺さった 444d **fonta** (s. XIII-XV) = afrenta, ultraje

【訳】444a ほかに彼らが夢にも想わなかったことが起きた。444b モーロ人たちが射た矢が、444c 自分たちのもとに舞い戻り体に突き刺さったのだ。444d 彼らのなした悪行の代償はかように大きかったのである。

線過去 (不完了過去)

次はラテン語の不完了過去の形態である。スペイン語では AR 動詞で *aba* という活用語尾がつき、ER 動詞と IR 動詞で *ía* という活用語尾がつくが、ラテン語ではすべて *ba* で統一されていた。

| Lat. 第一種活用 <i>amāre</i> | | Lat. 第二種活用 <i>monēre</i> | |
|-------------------------|-----------------|--------------------------|------------------|
| <i>amābam</i> | <i>amābāmus</i> | <i>monēbam</i> | <i>monēbāmus</i> |
| <i>amābās</i> | <i>amābātis</i> | <i>monēbās</i> | <i>monēbātis</i> |
| <i>amābat</i> | <i>amābant</i> | <i>monēbat</i> | <i>monēbant</i> |

| Lat. 第三種活用 <i>regere</i> | | Lat. 第四種活用 <i>audīre</i> | |
|--------------------------|------------------|--------------------------|-------------------|
| <i>regēbam</i> | <i>regēbāmus</i> | <i>audiēbam</i> | <i>audiēbāmus</i> |
| <i>regēbās</i> | <i>regēbātis</i> | <i>audiēbās</i> | <i>audiēbātis</i> |
| <i>regēbat</i> | <i>regēbant</i> | <i>audiēbat</i> | <i>audiēbant</i> |

Med. Sp. では第一種活用が *aua* (*ava*), 第二・三・四種活用では *ía* という活用語尾になった。*ía* は *a* が *i* に同化して、*íe* という形、また *ié* という二

¹⁰³ *lis* (> *les*) リオハ方言の特徴。

重母音化もあったが、14世紀になると *ía* に統一される¹⁰⁴。

●課題

【課題 6a】 現代スペイン語の *ser* と *estar* 動詞の使い分けを歴史的な理由を考慮に入れて説明しなさい。

【課題 6b】 現代スペイン語の線過去の規則性をラテン語と比較しながら考察しなさい。

【課題 6c】 聖ヤコブまたは聖ミリヤンの信仰について調べなさい。

【参考】

Dutton, Brian. 1967. *La “Vida de San Millán de la Cogolla” de Gonzalo de Berceo. Estudio y edición crítica.* London. Tamesis Books Limited.

¹⁰⁴ cf. 中岡 (1993), pp.108-111.

7. インドからスペインへ… 『カリラとディムナ』

Calila y Dimna (1251)

今回扱う作品 "*Calila y Dimna*" をインターネットで検索してみると多くのウェブサイトが現れる。以前ならかなり苦勞しなければ手に入らなかったスペイン語古典文学の膨大なテキストがほとんど瞬時にダウンロードできる。現代の科学技術の進歩と膨大な情報量は驚くばかりだ。

しかし、この作品の成立と伝播の過程を辿るには悠久の歴史を縦断し、東西の言語と文化を横断しなければならない。原典は 3 世紀にインド・カシミールで書かれたサンスクリット語の寓話集『パンチャタントラ』であるが、それから 4 世紀後の 8 世紀中頃イブヌ・ル・ムカフフィ(Ibn al-Muqaffa)によってアラビア語に翻訳された。その邦訳(菊池 1978)によると、あるペルシャの医者が国王の命によってインドに旅立ち、大変な苦勞をして本書を書き写し国に持ち帰ったという。このアラビア語の原本は失われ、トルコ・イスタンブールのアヤ・ソフィア寺院)に所蔵された写本が最古のものである。

そしてアラビア語やヘブライ語を通じてスペインにも伝わった。アラビア語からスペイン語に翻訳を命じたのは Castilla 王国の Alfonso 王子、後の Alfonso X 世国王(在位 1252-1284)である。これが 1251 年のことであるからアラビア語に訳されてからさらに 5 世紀が過ぎたことになる。このスペイン語訳の写本は Madrid 郊外の Monasterio de El Escorial に所蔵されている。

この作品の構成そのものも息が長い。書名『カリラとディムナ』*Calila y Dimna* は第一章に登場する二匹のオオカミの名であるが、全編を通じてほかにも多くの動物が登場し、さまざまな事態に直面しながら知恵を披露する。そこに道徳や処世訓を示すための短い物語が組み込まれているが、その話の中にまた別の話が挿入され、その話のなかに別の話が挿入され、さらに幾層にも重なって展開する¹⁰⁵。



Monasterio de El Escorial

¹⁰⁵ 14 世紀の写本。A. Galmés (1956), González Ollé (1980)に再録。

月の光に抱きついた泥棒

次に取り上げるテキストは序章にある挿話である。ここでは動物は登場せず人間の愚かさが描かれている。

(1)

Et después que esto vi, non fallé carrera por donde siguiese a **ninguno** dellos: et sope que si yo creyese a **alguno** dellos lo que non sopiese, que sería atal como el ladrón engañado que fabla en un exemplo.

【語句】 **fallé** > hallé 私は見つけた **sope** > supe 私は知った **sopiese** > supiese saber の接続法過去 **atal** (s. XI-XV) > tal (s. XII-) そのような **fabla** > habla 語る。

【訳】 私はこれを見て彼らのうち誰にも従うことはできないとわかった。自分がわからないことにもかかわらず他人の言うことを信じたりすると、次の話で語られる騙された泥棒の二の舞になるだろう。

ここにある **alguno** と **ninguno** については次節で述べることにして、早速泥棒の話を書くことにしよう。

(2)

Et fue así que andava una noche un ladrón sobre una casa de un omne rico, e fazía luna, e andavan algunos compañeros con él et en aquesta casa avía una finiestra por donde entrava la luz de la luna al omne bueno. Et alas pisadas dellos despertó el dueño dela casa e sintiólos e pensó que tal ora non andarían por sus tejados salvo ladrones.

【語句】 **omne** > hombre 人 **fazía luna** = había luna 月が出ていた **aquesta** > esta この **avía** > había あった **finiestra** (XI-XV) = ventana 窓 **alas pisadas** > por las pisadas 足音で **sentir** 聞く¹⁰⁶。

【訳】 ある晩のこと、一人の泥棒が金持ちの家の屋根に上っていた。月が

¹⁰⁶ この意味 ('oír') は現代のスペインで使われないが、イタリア語 (It. sentire) など他のロマンス諸語にある。プエロトリコ、コロンビア、チリ、アルゼンチンなどラテンアメリカのスペイン語でも観察される。cf. Corominas y Pascual, s.v. sentir.

出ていた。仲間も一緒だった。この家の天窓から月光が射し込み主人を照らしていた。そして家の主人は彼らの足音で目を覚まし、こんな時間に屋根を歩くのは泥棒に違いないと思った。

(3)

Et despertó a su muger et díxole: "Fabla quedo, que yo he sentido ladrones que andan sobre nuestra casa, et yo fazermehé adormido, et tú despiértame a grandes bozes, de guisa que lo oyan los que están sobre la casa; et díme quando los sintieres çerca de aquí: Ay marido! No me dirás estas tamañas rriquezas que as, dónde las ayuntaste? Et quando yo non te quisiere responder, sigue me preguntando fasta que te lo diga".

【語句】 **muger** > mujer 妻 **Fabla** > Habla 話せ **quedo** = con voz baja 小さな声で **fazermehé** > me haré ふりをする **adormido**, adormirse (s. XII-XIV) > dormido, dormirse 眠りこむ **guisa**¹⁰⁷ (s.XI-XV) = modo, manera 方法 **oyan** > oigan oír の接続法現在 **tamañas**¹⁰⁸ (x. XII-XV) = tan grande **as** = tienes あなたが持つ **ayuntaste**, **ayuntar** (s. XIII-XV) > juntar, reunir 集める **fasta** > hasta …まで。

【訳】そして妻を起こして言った「小声で話すんだ。この家の屋根を泥棒が歩いている音が聞こえた。俺は寝ているふりをするから、おまえは上にいる奴らに聞こえるぐらい大声を出して俺を起こしてくれ。そして、奴らがそばにやってきたとわかったら、こう言うんだ『ねえ、あんた。あんたが持っているこんなに多くの財産、どうやって築いたの?』俺はそれに答えられないから、そのとき俺がおまえにそれを話すまで同じことを聞き続けてくれ」

不定語と否定語

話の途中だがここで不定語(algo, alguno, alguien)と否定語(nada, ninguno, nadie)について見ておこう。algo はラテン語の aliquod「何か」に由来する。alguno はラテン語の aliquis (意味は'alguno, alguien') と unus ('uno')が繋(つな)がった形である。alguien は後の 15 世紀頃 quien の語尾の形に準じて出

¹⁰⁷ ゲルマン語 (germánico) 起源の言葉。cf. Ing. likewise, clockwise, (古) in any wise, in some wise.

¹⁰⁸ Lat. tan magnus 'grande'.

来上がった。否定語の **nada** はラテン語の **res nata 'cosa nacida'** 「生まれたもの」という形に由来し、**nadie** は **homines nati** 「生まれた者たち」に由来するので、どちらも初めは「否定」の意味はなかった。

一方 **ninguno** はラテン語の **nec unus 'ni uno'** に由来するので始めから否定語だった。このように **algo** と **nada**, **alguien** と **nadie** はそれぞれ独自に作られた語であるから形が似ていないが、**alguno** と **ninguno** は **uno** 「1」を示す語尾を共有している。そしてこれらは **uno** と同じように性と数の変化をする。また上のテキストにあるように、**alguno** と **ninguno** にはどちらも「…の中の1つ(uno)」という意味がある。

さて、話の続きは…

■テキスト

(4)

Et fízolo así como le mandó el marido et oyó el ladrón lo que ella dixo. Et entonçes recudió el ome a su muger: "Tú, por qué lo demandas? Ca la ventura te traxo grand algo, come, bebe et alégrate et non demandes tal cosa, casi telo yo dixere, non so seguro que lo non oya **alguno**, e podría acaescer cosa por ello que pesara amí e ati.

【語句】 **fízolo** > lo hizo それをした **recudió, recudir** (s.XII-XIV) > responder 答える、返事をする **ome** > hombre 人 **demandas, demandar** (XIII-XV) > 聞く **Ca** = Como …なので、…だから **algo** (s.XI-XIV) = hacienda, caudal 財産 **casi** = pues si ... なぜなら、もし... **so, seer** = estoy, estar …(という状態)である **pesar** (s.XIII) = causar dolor 苦しませる

【訳】 妻が夫の言うとおりにすると、泥棒は妻の話に聞き耳を立てた。そこで夫は妻に言った「おまえは何でそんなことを聞くのだ？ 幸運が巡ってきてこんなに財産が手に入ったのだから、食べて、飲んで、楽しくやっていたらいいではないか。そんなことは聞かなくてもよい。もし俺がおまえにそれを話したりすれば、誰かに聞かれ、そのせいで俺にもおまえにも不幸が起こらないともかぎらないぞ」

この段落には「物」を表す **algo** が出ている。また、上の **alguno** は現代語にすれば **alguien** に相当するが、これは中世には「人」を表す **alguien** という形がまだできていなかったためである。

(5)

Et dixo la muger: "Por la fe que me debes, que me lo digas, ca non oirá ninguno lo que dixéremos a tal ora".

Dixo el marido: "Yo te lo diré pues que tanto lo quieres saber. Sepas que yo non ayunté todas estas riquezas salvo de ladronía".

Et dixo la muger: "Cómo ayuntaste esto de ladronicio, teniéndote las gentes por omne bueno?"

【語句】**Por la fe que me debes** = Por favor お願いだから **ninguno** (s.XII-XV) > ni uno solo, nadie 誰も…でない **pues que** = porque …だから **ladronía** (s. XIII-XV) > latrocinio, ladronería 盗み **tener** (s. XII-XV) = estimar, considerar 見なす、思う

【訳】(5) 妻は言った「どうかお願いですから、教えてください。こんな時間に私たちが話すことを聞いている人などいないでしょうから」

夫が言った「おまえがそんなに知りたいのなら話してやろう。いいか、おれがこんな財産を築いたのはほかでもない、盗みをしたからだ」

すると妻が言った「世間からは善人だと思われているあなたが、どうやって盗みでこんなにお金をためることができたの？」

(6)

Et dixo él: "Esto fue por una sabiduría que yo fallé al furtar, et es cosa muy encubierta et sutil, de guisa que non sospechava alguno de mí nin me tenían por mal fechor". Et dixo la muger: "Cómo fue eso?"

【語句】**fallé, fallar** > hallar 見つける **furtar** > hurtar 盗みを働く **sotil** > sutil 絶妙な **nin** > ni …もない **mal fechor** > malhechor 悪人

【訳】夫「これは俺が泥棒をしているときに手に入れた知恵のおかげだ。とてもうまく隠し、じょうずしたもんだから、誰も俺を疑わないし俺を悪人だとも思わないのだ」。妻「それはどんな方法なの？」

(7)

RRepondió el e dixo: "Yo andava la noche que fazia luna e mis compañeros comigo, fasta que sobía en somo de la casa do quería entrar, e llegava a alguna finiestra por donde entrava la luna e dezía

siete vezes: 'sulan, sulan'. Desí abraçávame con la luna e entrava por la finiestra e descendía por ella ala casa et non me sentía ninguno cuando caía; e iva de aquella casa atodas las otras casas. Et después que tomava lo que fallava, tornava a la casa donde era la luz, e dezía otras siete veces 'xulan, xulan', et abraçávame con la luna e subía a la finiestra e eneste estado gané todo esto que tú vees."

【語句】**sobía** > subía 上った **somo** (s.XII-XV) = lo más alto 一番高いところ
do (s.XII-XV) > donde …のところで **Desí** (s.XII-XV) > Desde allí そこから、
そして **fallava** > hallaba 見出した **vees** > ves おまえが見る

【訳】夫は答えて言った「俺は月が照らす晩に、仲間を連れて歩き、これから押し入ろうとする家の屋根に上った。そして月の明かりが射し込んでいた窓辺に行き、サウラン、サウランと七回唱えた。そして月の光を抱(か)かえるようにして窓から忍び込み、光線を伝って家の中に降りていった。俺が侵入しても誰も気がつかなかったんだ。そしてその家が終わると他の家々も全部押し入った。手当たりしだい盗んでから月の光の射し込む家に戻り、今度はシュラン・シュランと七回唱えて、月の光を抱えて窓まで登ったのだ。こうやってここにおまえが見るものをすべて盗み出したというわけさ」

半可通の報い

事の顛末(てんまつ)を見ることにしよう。

(8)

Et quando esto oyeron los ladrones, plógoles mucho dello et dixeron: "Más avemos ganado desta casa que nos non queríamos, et deste saber que nos dende avemos, nos devemos más preçiar que de todo quanto ende ganaremos".

【語句】**plogo, placer** の点過去 (s.XII-XV) = agradar, dar gusto 喜ばせる
avemos > hemos **nos** (s.XII-XV) > nosotros われわれ **preçiar** (s.XII-XV) > apreciar 価値があると思う **dende** (s.XIII-XV) = de ello それから **ende** = de esto, de ello これから、それから

【訳】これを聞いた泥棒たちは大いに喜び、こう言った「この家では予想外の大収穫をした。この知恵はここで手に入れるもの全部合わせたものよ

り価値があると思わなければならないぞ」

(9)

Desí estodieron grande ora quedos, fasta que cuydaron que el dueño de la casa era adormeçido, et su muger otrosí et después que cuydaron ser ciertos desto, levantóse el cabdiello dellos et fuese para la finiestra, que estava en somo de casa, por do entrava la luz de la luna, et dixo siete vezes: "saulan, saulan" et abraçóse conla luna por descender por ella ala casa, et cayó cabeça ayuso.

【語句】 **Desí** = después その後 **estodieron** > estuvieron 彼らはいた **quedos** (s.XIII) > quietos 静かにして **otrosí** (XIII-XIV) > también …もまた **cuydaron, cuidar** (s.XIII-XIV) = pensar, creer 思う、信じる **cabdiello** (s.XIII-XV) > caudillo 首領 **do** (s.XII-XV) > donde …のところに **ayuso** (s.XI-XV) = abajo 下に。

【訳】 そのあと彼らは家の主人とその妻が寝入ったと思うまで長い間じっとしていた。もう大丈夫だと思いと、彼らの首領が立ち上がって屋根にあった月光の射し込む天窓のところまで行き、サウラン・サウランと七回唱え家に押し入ろうと月光を抱えこんだ。するとまっさかさまになって落ちた。

(10)

Et levantóse el dueño de la casa et dióle tantos de golpes fasta que le quedó diciendo el ladrón: "Yo merezo quanto mal me has fecho porque creí lo que me dexiste et me engañé con vanidat".

【語句】 **quedó, quedar** (s.XIII-XV) = acabar …で終わる **merezo** > merezco …に値する、…を受けて当然だ **vanidad** (s.XII-XIV) = palabra falsa 偽りの言葉

【訳】 そこで家の主人が起き上がり泥棒を打ちのめすと、泥棒はこう言った「俺はこんな目にあって当然だ。おまえの言ったことを信じ、嘘で騙されたからだ」

●課題

【課題 7a】イブヌ・ル・ムカッフイのアラビア語版からの邦訳『カリーラとディムナーアラビアの寓話』(菊池淑子訳)とスペイン語版を比較しなさい。

【課題 7b】『カリーラとディムナーアラビアの寓話』(菊池淑子訳)を読み、その枠構造の効果について考察しなさい。

【課題 7c】次を参考にして、algo - nada, alguno - ninguno, alguien - nadie のそれぞれの歴史と現代スペイン語の語形、統語法の平行的な面と平行的でない面を比較しなさい。

algo, alguno. alguien: algo は Lat. aliquod (íd) に由来する。alguno, algún (S. XI < Lat. vg. *alicūnus íd) は Lat. aliquis 'alguno, alguien' と Lat. ūnus 'uno' の縮約 (contracción) である。alguien は S.XV まで現れなかったもので、それまでは alguno が名詞・形容詞として使われた。alguien はかなり遅い時期に出現したので、Lat. aliquem に由来するのではなく、alguno が quien の形に準じて変化したものである。もし、alguien が Lat. aliquem に直接遡るとすれば、*alque という形になったはずである。(cf. Comorinas y Pascual, s.v. alguno)

nada, nadie, ninguno: nada (S.XI) は nacer の古い過去分詞 nato (<Lat. nātus) の女性形である。これは Lat. res nata 'cosa nacida' 「生まれたもの」という形からできた。同様に nadie は Lat. homines nati 「生まれた者たち」に由来する。一方、ninguno は Lat. nec ūnus 'ni uno' に由来するので最初から否定語だった。(Corominas y Pascual, s.v. nacer, no)

【参考】

Galmés, A. 1956. *Influencias sintácticas y estilísticas del árabe en la prosa medieval castellana*, Madrid,

González Ollé. 1980. *Lengua y literatura españolas medievales. Textos y glosario*. Barcelona: Ariel

菊池淑子訳. 1978. 『カリーラとディムナーアラビアの寓話』(平凡社東洋文庫 331)

8. 演劇不在の証明…アルフォンソ賢王『七部法典』

Alfonso X. *Las Siete Partidas* (1265 年頃)

Madrid の街角のいたる所で乾電池などのリサイクルを呼びかける掲示と回収容器が設置され、そこに次のように書かれてある。Por un futuro más limpio, Madrid recicla sus pilas usadas. 「さらに清潔な未来のためにマドリードはあなたの古い乾電池をリサイクルします」当然のことであるがリサイクル運動があるのは社会にとってそれが必要だからである。乾電池、瓶、缶、紙などが大量になかった時代ではこのような地域活動は不要だった。さらに時代を遡(さかのぼ)れば現在のような深刻な廃棄物問題もなかった。物質的に貧しかった日本の江戸時代ではすべてが再利用されていたのでゴミそのものがなかったようだ(石川英輔『大江戸リサイクル事情』講談社)。

先に中世カスティーリャの演劇のテキストがほとんど残存していないということに触れた。当時隣りの Cataluña や Francia では演劇が盛んに行われていたのに中世カスティーリャでは芝居の伝統がなかったのだろうか。実は、たとえ脚本という証拠が見つからなくても、リサイクル運動のメッセージがリサイクルの対象物の存在を示すように、演劇の存在を暗示するような間接的な証拠がないわけではない。



礼拝劇から狂乱劇へ

アルフォンソ十世賢王(Alfonso X (Décimo), el Sabio, 在位 1252-84) がローマ法などに準拠して編纂させた『七部法典』(*Las Siete partidas* は 1555 年 Salamanca で印刷された注釈本)はキリスト教と教会、皇帝、王、領主、裁判、婚姻と家族、商法、相続、遺産、訴訟という 7 部で構成されている。細かな条文を読むと当時(13 世紀)のスペインの風俗・習慣を知ることができる。たとえば第一部(34, 4)には教会で芝居を上演することを禁じている箇所がある(González Ollé, 1980.)。

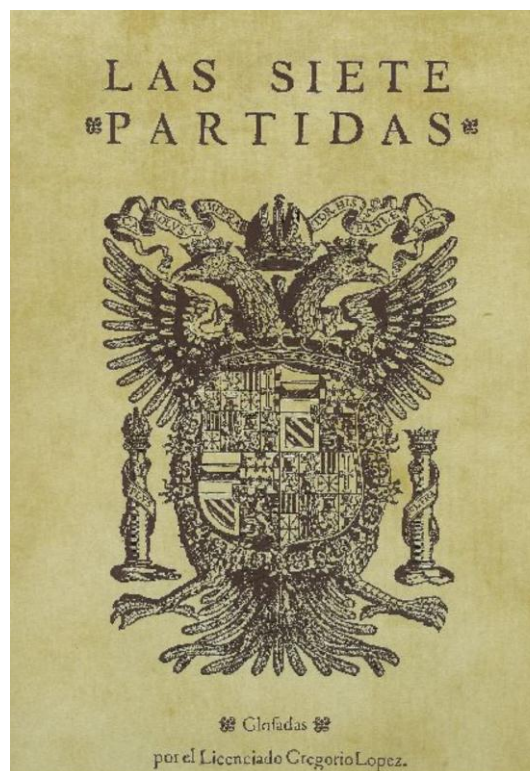
(9)

Trabaiarse deuen los clérigos en seruir a Dios quanto pudieren... e no deuen iugar dados ni tablas... ni deuen seer fazedores de **iuuegos de escarnio** porque los uengan las gentes a ueer cuémo los fazen. E si los otros omnes lo fizieren, no deuen los clérigos y uenir porque fazen y muchas villanías e desaposturas, ni deuen otrossí estas cosas fazer en las iglesias, ante dezimos que los deuen ende echar desonradamiente, sin pena ninguna, a los que los fizieren, ca la iglesia de Dios fue fecha pora orar e no pora fazer escarnios en ella...

【語句】 y = allí そこで **desapostura** (s.XIII) = faseldad, desaliño みつともないこと **otrossi** > así mismo, también …もまた **ende** (s.XIII-XIV) = de allí そこから **pena** (s.XIII-XV) = cuidado, aflicción 気遣い **ca** (XII-XV) = porque, pues なぜなら

【訳】 聖職者はできる限り神への奉仕に努めなければならない。賽子(さいころ)やチェスなどに興じたり、物見の人々を集めようと愚弄する戯れ事(ざれごと)をしてはならない。ほかの者たちがそれを行ったとしても聖職者はその場に行ってはならない。そこでは多くの下卑たことや偽りが行われているからだ。また、このようなことを教会で行ってはならない。むしろ情け容赦なく追い払うべきである。神の教会は祈りのために作られたのであって、愚弄するために作られたのではないからである。

この中にある **iuuegos de escarnio** 「愚弄する戯れ事」は物見客を集めるためであるから芝居のようなものであったのかもしれない。López Estrada (1979)はこれを証拠として、当時のカステリーヤにも礼拝劇だけでなく世俗劇も行われていたと論じている。たとえば夜間のスケートボードを禁止する掲示が実際にそのような行為が行われていることを示す、といった



【写真 8b】 Las Siete Partidas

具合である。事実ヨーロッパ各地で行われていた礼拝劇がやがて「狂乱劇」にも変化したことが知られている(Pignarre, 1969, 44, 邦訳 p. 54)。

動詞活用語尾の y

狂乱劇を禁止したアルフォンソ賢王であっても、民をキリスト教の信仰に正しく導く礼拝劇は大いに奨励している。

(10)

Pero representaciones **y ha** que pueden los clérigos fazer, assí cuemo de la nascencia de Nuestro Sennor Ihesu Christo, que demuestra cuémo el ángel uino a los pastores e les dixo cuémo Ihesu Christo era nascido, e otrossí de su aparecimiento, cuémo los tres reyes le uinieron adorar, e otrossí de la su Resurrección, que demuestra cuémo fue crucifigado e resucitó al tercero día. Tales cosas cuemo estas que mueuen a los omnes a fazer bien e a auer deuoción en la fe, fazerlas pueden e demás porque los omnes **ayan** remenbrança que segund aquello fueron fechas de uerdat. Pero esto deue seer fecho muy apuestamiente e con grand deuoción.

* * *

【語句】 **y ha** > hay ある **nascencia** (s.XIII-XIV) = nacimiento 生誕 **aparecimiento** (s.XIII) = aparición 出現 **crucifigado**, crucifigar (s.XIII) > crucificar 十字架に掛けられる **demás** (s.XI-XII) > además さらに **remenbrança** (s.XIII) = recuerdo 記憶

【訳】しかし聖職者が行うことのできる演劇もある。たとえば天使が羊飼いの前に現れ、われらが主イエス・キリストの誕生を告げる生誕劇や三人の王が礼拝に集まる公現劇、十字架磔刑(たっけい)と三日後の復活の様子を示す復活劇である。これらは人々を善行と信仰への帰依に導き、人々はこれが真実であったことを思い起こすので行ってもよい。しかし、正しく篤(あつ)い信仰によってなされなければならない。

haber の現在形 3 人称単数は **ha** であるのに「存在」を示す非人称文では **hay** という特殊な形が使われる。この理由は上のテキストの 1 行目の **y ha** を見るとわかる。**hay** の **y** は中世に「場所」を示す時に使われていた **y** であって、これを遡るとラテン語の **ibi** になる。日本語の「アリバイ」(現場不在証明)はラテン語の **al**「ほかの」+ **ibi**「場所で」> **alibi** に由来する。「ほ

かの場所」にいたのだから犯行現場にはいなかったことになる。なおスペイン語では *coartada* という。

同じように活用形の語尾に *y* が現れる動詞がある。**ser, estar, ir, dar** の現在形 1 人称単数の **soy, estoy, voy, doy** である。これらも元の形はそれぞれ **so, esto, vo, do** であって、たとえば現在のイスタンブールに残るユダヤスペイン語では今でも使われている。この語尾の *y* も中世スペイン語の「場所」を示す *y* に由来するのだろうか。Ralph Penny (1991) は疑義を示しているが、これらが共通して単音節であることは偶然の一致ではないだろう¹⁰⁹。また中世には **ser** は「所在」の意味で使われていたので「存在」の *y* と親和性が高かったようだ。**estoy, voy, doy** に関しても「場所」の意識が働いたのかも知れない。

反論

1993 年現在のスペイン語アカデミー協会の会長である Humberto López Morales 氏が来日したとき、発表されたばかりの論文 "*Alfonso X y el teatro medieval castellano*" を大学の図書館で私に見せてくれた。留学中のスペイン文学史の講義で氏の中世カスティーリャ劇不在論を知っていたが、この論文でも、『七部法典』は当時の社会を知るための資料にはならない、という主張を変えていなかった。この法典は法王イノケンティウス 3 世の書簡やそれに基づく布告、さらにその注釈など当時参照できた数多くの外来のラテン語文書を典拠にしている、という。したがって『七部法典』は独創的な立法ではなく、教会での芝居の上演が禁じられているからといって当時カスティーリャで宗教劇が行われていたとは言えない、と述べている。

個人が他所にいればそれが現場不在証明 (*alibi*) になるが、演劇のような芸術活動の不在の証明は簡単ではない。芸術活動は伝播によって普及するので近隣の他所にあることがむしろその存在を支持することもある。また演劇の存在を証明するよう見えた『七部法典』も López Morales が指摘するような問題があり一筋縄では行かない。教会や古文書館などに保存された資料のさらなる発掘が期待される。

■テキスト

(1)

¹⁰⁹ **estoy** は例外的に 2 音節のように見えるが、実は語頭の **e** はラテン語にはなく後から発達したものである。

Este es el prólogo del Libro del fuero de las leyes que fizo el noble don Alfonso, rey de Castiella, de Toledo, de León, de Gallizia, de Seuilla, de Córdoua, de Murcia, de Jahén e del Algarue¹¹⁰, que fue fijo del muy noble rey don Ferrando e de la muy noble reyna donna Beatriz. E començólo el quarto anno que regnó, en el mes de junio, en la vigilia de Sant Johan Baptista, que fue en era de mill e dozientos e nouaenta e quatro¹¹¹ annos, e acabólo en el trezeno anno que regnó, en el mes de agosto, en la uíspera deste mismo Sant Johan Baptista, quando fue martiriado, en era de mill e trezientos e tres annos ...

【語句】 **fizo** > hizo hacer の点過去 3 人称単数 **fijo** > hijo 子 **annos** 年 (複数) **trezeno** > tercer 3 番目の **regnó, regnar** > reinó, reinar 治める

【訳】 これは、カスティーリャ、トレド、レオン、ガリシア、セビリア、コルドバ、ムルシア、ハエン、そしてアルガルベの王であり、やんごとなきドン・フェルナンド王とドニャ・ベアトリス女王の子息であるドン・アルフォンソ王が編纂させた法典の序文である。王はこの編纂を統治の 4 年目、すなわち 1294 年、6 月洗礼者聖ヨハネの生誕の祝日の前日に開始し、統治の 13 年目、すなわち 1303 年の 8 月やはり洗礼者聖ヨハネの殉教の祝日の前日に完成した。

(2)

Porque¹¹² las uoluntades e los entendimientos de los omnes son departidos en muchas maneras, por ende los fechos e las obras dellos no acuerdan en uno, e desto nascen grandes contiendas e muchos otros males por las tierras. Por que conuiene a los reyes que an a tener e a guardar sus pueblos en paz e en iusticia, que fagan leyes e posturas e fueros, por que el desacuerdo que han los omnes naturalmiente, entre ssí se acuerde por fuerça de derecho; assí que los buenos uiuan bien e en paz e los malos sean

¹¹⁰ 現在のポルトガル南部の地方(Algarve)。

¹¹¹ 現代語の数詞では、接続詞 y は 10 と 1 の位の間だけに用いられる。mil doscientos noventa y cuatro.

¹¹² Porque が文頭で使われていることに注意。

escarmentados de sus maldades.

【語句】**departido** (s.XIII-XV) = diverso, distinto 異なる **por ende** (s.XIII-XV) = por ello そのため **fecho** > hecho 行い **an a** = han de …のはずである **postura** = decreto 法令 **naturalmientre** = por naturaleza 生来。

【訳】人の意志や理解は様々に異なるので、その行動と業は同一ではなく、そこから世間に大きな紛争やその他多くの不幸が生まれる。また、領民を平和と正義をもって治めるべき国王は、人が自然に行う係争を法律によって調停し、善人が正しく、つつがなく暮らし、また悪人がその罪を償うべく、法と法令と条例を制定すべきある。

(3)

E por ende nos, el sobredicho rey don Alfonso, entendiendo e ueyendo los grandes males que nascien e se leuantauan entre las gentes de nuestro sennorio por los muchos fueros que usauan en las uillas e en las tierras, que eran contra Dios e contra derecho, assí que los unos se iudgauan por fazannas desaguisadas e sin razón, e los otros por libros minguidos de derecho, e aun aquellos libros rayen e escriuén y lo que les semeiaua a pro dellos e a danno de los pueblos, tolliendo a los reyes su poderío e sus derechos e tomándolo pora ssí lo que non deuie seer fecho en ninguna manera.

【語句】**nos**¹¹³ = yo 予 **ueyendo** > viendo ……を見て **nascien** > nacían 生まれていた **iudgauan** > juzgaban 裁いていた **fazannas** (s.XIII-XIV) = sentencia, fallo 判決、裁き **desaguisado** (s.XIII-XV) = injusto 正しくない **minguado de** (s.XII-XIII) = menguado de, falta de, escaso de…がない **rayen**¹¹⁴, raer = borrar 消す **semeiuava**, semeiar (s.XIII-XIV) = parecer 思える **pro** (s.XII-XV) = provecho 有益 **toller** (s.XII-XV) = quitar 奪う **pora** > para ……のために

【訳】そこで、先に述べたとおり国王である予ドン・アルフォンソは、わが領土の町ごとに、また土地ごとに多くの条例が行われ、ある者は不正で

¹¹³ nos は王が自分を指して使う。loyal "we".

¹¹⁴ pron. [ayén].

不合理的な判決を受け、またある者は正義のない書によって裁かれ、しかもその書は人々の都合のよいように改竄され、領民を傷つけ、あろうことか国王の領土を奪い、勝手に自分のものとし、そのために人々の間に多くの不幸が生じるのを知り、また目にしてきた。

(4)

E por todas estas razones minguauase la iusticia e el derecho, porque los que auíen de iudgar los pleytos, non podíen en cierto ni complidamiente dar los iuycios, ante los dauan a uentura e a su uoluntad; e los que recibíen el danno, no podíen auer iusticia ni emienda, assí cuemo deuíen.

【語句】 **minguauase** > se menguaba なくなる **complidamiente** = perfectamente, con exactitud 正確に、正しく **ante** (s.XIII-XV) adv. > antes むしろ **ventura** (s.XIII-XV) = contingencia, casualidad **cuemo** (s.XII-XIV) > como…のように

【訳】 そして、すべてこうした理由のために正義と公正が失われた。なぜなら、係争を裁くべき者は、確かな、そして完全な判決を下すことができず、自分の意のままに勝手な判断をして、またその被害者も然るべき判決や補償が得られなかったからである。

(5)

Onde nos, por toller todos estos males que dicho auemos, fiziemos estas leyes que son scriptas en este libro, a seruicio de Dios e a pro comunal de todos los de nuestro sennorío, porque connoscan e entiendan ciertamiente el derecho e sepan obrar por él e guardarse de fazer yerro, porque no cayan en pena. E tomámoslas de los buenos fueros e de buenas costumbres de Castiella e de León e del derecho que fallamos que es más comunal e más prouechoso para las gentes en todo el mundo.

【語句】 **onde** (s.XIII-XV) = por lo cual, por lo tanto よって **scriptas** > escritas 書かれた **obrar** = hacer **guardarse de** (s.XIII-XV) = tener cuidado de …に気をつける **cayan** > caigan caer の接続法 **comunal** (s.XIII-XV) = común 共通の

【訳】 よって予は、これらの諸悪を正すべく、神への奉仕と人民すべてに共通の利益のために、また、人々が公正を確かに知り、理解してそれにより行動し、また、誤りを犯して罰を受けることがないように、この書に書かれた法を編纂した。そして、これをカスティーリャとレオンの良き慣習と、すべての人々の共通の利益になると判断した法律に基づいて作成した。

(6)

Por que tenemos por bien e mandamos que se iudguen por ellas e no por otra ley ni por otro fuero. Onde quien contra esto fiziesse, dezimos que erraríe en tres maneras. La primera, contra Dios, cuya es complidamiente la iusticia e la uerdad por que este libro es fecho; la segunda, contra sennor natural, despreciando so fecho e so mandamiento; la tercera, mostrándose por soberuio e por torticero, nol¹¹⁵ plaziendo el derecho conosçido e prouechoso comunalmiente a todos.

* * *

【語句】 **tener** (x.XII-XV) = estimar, creer, juzgar 判断する、判断する **cuyo** > de quien, de que …の (「所有」の意味をもつ関係形容詞) **por que** = por la que …のゆえに **es fecho** = se ha hecho 作られた **señor natural** = señor legítimo 正当な主君 **so** > su 彼の **torticero** (s.XIV-XV) = injusto 不正な **plaziendo**, **placer** > **agradar** 喜ばせる、満足させる

【訳】 予は、他の法や条例ではなくこの法律によって裁かれることがよいと判断し、かく命じる。よって、これに背く者は次の三点により過ちを犯していると言える。第一に、この書が編纂されたのは正義と真実によるが、それはすべて神のものであるがゆえに、神に過ちを犯している。第二に、正当な主君の業と命令を軽んじているがゆえに、主君に対して過ちを犯している。第三に、皆が知るところの、共通の利益となる法が気に入らず、高慢で不正な態度をとっているためである。

(7)

Aquí comienza el primero libro que muestra qué cosas son las leyes e fabla de la Sancta Trinidad e de la fe cathólica e de los

¹¹⁵ nol plaziendo > no agrádandele. 現代語では現在分詞構文にある代名詞は現在分詞の後につく。

artículos della e de los sacramientos de Santa Iglesia e del
Apostóligo e de los otros prelados que los pueden dar.

* * *

【語句】**sacramientos** (s.XIII) > sacramentos 秘跡 **prelado** (s.XIV-) 高位聖職者

【訳】ここに、第一部が始まる。法とは何かを示し、聖三位一体、カトリック教および、その教え、聖教会、使徒、その他許される高位聖職者が与える秘跡について述べる。

(8)

Ley tanto quiere dezir cuemo castigo o ensennamiento scripto que
liega a omne que non faga mal o quel aduze a seer leal faziendo
derecho. E fuero tanto quiere dezir cuemo ley derechamientre
usada por luengo tiempo por scriptura o sin ella. E postura es
lamada¹¹⁶ todo paramiento bueno que faze el rey o¹¹⁷ otri por su
mandado, o lo fazen los omnes entre sí, e es a pro comunal de la
tierra.

* * *

【語句】**liega**, legar = hacer llegar, conducir 導く **enseñamiento** = enseñanza
教え **derechamientre** (s.XIII-XIV) = rectamente 正しく **luengo** (s.X-XV) =
largo 長い **paramiento** (s.XIII) = establecimiento, estatuto 法令。 **otri**
(s.XIII-XV) > otro 他

【訳】(8) 法とは、悪事をなさないように人を導き、また正しい生活の中で
忠誠を守らせるために書かれた刑罰と教えのことである。条例とは長きに
わたり正しく使用された成文または非成文の法をいう。そして、法令は王
や他の者が命令によって布告したり、人々が土地に共通の利益のために互
いに定める法規である。

(9) (10)

[前掲]

¹¹⁶ pron. [əamada].

¹¹⁷ 現代語では o の前の接続詞は u となる。u otro。

●課題

【課題 8a】 次の Pignarre (1967, p.44)の説明を読み、中世の人々の関心が典礼劇から世俗劇に移った理由について考察しなさい。また、アルフォンソ 10 世に触れている部分について、あなたの意見を述べなさい。

Seulement il arriva que le souci de réalisme, en s'introduisant, laissa la porte ouverte au comique, c'est-à-dire au profane. A la vue de la croix, de la couronne d'épines, du roseau, des clous, le coeur se serrait; mais quand paraissaient un Moïse cornu à barbe d'étope ou Elisabeth enceinte, ou encore l'ânesse de Balaam cabriolant et discourant, le rire qui les saluait rapprochait la représentation sacrée de ces "jeux par dérision" qu'en Espagne les ordonnances du roi Alphonse X avaient bannis du saint lieu. Aussi bien le démon comique ne tardera pas à entraîner le drame au dehors.

【課題 8b】 次の López Morales (1991)の意見を読み、法律文を歴史の資料とする時の問題点について考察しなさい。

En la obra jurídica de Alfonso X, o inspirada por él, se reconocen dos vertientes bien diferenciadas: una, ejemplificada por el *Fuero real*, obra legislativa e hispánica, y otra, de carácter doctrinal, enciclopédico, en la que se recogen numerosas regulaciones de otros textos y decretos extranjeros. A esta segunda pertenecen las *Partidas*. No es esta obra el producto de una legislación original, por lo que su letra no siempre resulta reveladora de situaciones castellanas del momento. (p.251)

(...)

No es posible sacar esta ley de su contexto y hacer interpretaciones inadecuadas, sin tener en cuenta, además, ni el carácter de las *Partidas* ni las fuentes de la ley. Esta ley, igual que casi todas las de la primera *Partida*, carece de valor testimonial y no debe ser esgrimida como testigo de la existencia de una tradición teatral profana y litúrgica en la Castilla del siglo XIII. (p.252)

【課題 8c】 **estoy** は例外的に 2 音節のように見えるが、実は語頭の **e** はラテン語にはなく後から発達したものである。このことを考慮に入れて、**estar** と **dar** の直説法現在の活用形を比較しなさい。とくに **estar** の語尾にアクセントがある理由を考察しなさい。

【参考】

- González Ollé, F. 1980. *Lengua y literatura españolas medievales*. Barcelona. Ariel.
- López Estrada, Francisco. 1979. *Introducción a la literatura medieval española*, Madrid, Gredos.
- López Morales, Humberto. 1991. "Alfonso X y el teatro medieval castellano", *Revista de Filología Española*, tomo 71, pp.227-252.
- Penny, Ralph. 1991. *Gramática histórica del español*, Barcelona, Ariel.
- Pignarre, Robert. 岩瀬孝訳. 1969. 『世界演劇史』白水社
- 鈴木康久. 1996. 『西ゴート王国の遺産－近代スペイン成立の歴史』中公新書(とくに 11 章)
- 山田信彦. 1992. 『スペイン法の歴史』彩流社(とくに 5 章)

9. 迷える愛…フアン・ルイス 『良き愛の書』

Juan Ruiz, *Libro de Buen Amor* (1330)

Madrid から北東に延びる国道 2 号線を行くと、小一時間で Guadalajara に到着する。そこから国道を外して少し北に行くと小山の麓に Hita という村がある。留学中の夏期休暇に「イタの中世フェスティバル」(Festival Medieval de Hita)が開催されることを知り、友人を誘ってドライブをした。ここはスペイン文学史の授業で扱われた『良き愛の書』(Libro de Buen Amor)の著者 Juan Ruiz が聖職に就いていた土地なのでどうしても見ておきたかった。



Hita

一般にスペインの石造建築物の保存状態はよく、文学にゆかりのある土地の往時の姿を今でも容易に想像することができる。また郊外の景観を壊して興ざめにさせる広告がないのもありがたい。中世フェスティバルという催しはさらにその雰囲気醸し出してくれ。イワシの鉄板焼きをほおぼりながら、独特の衣装をつけて村中を練り歩く人たちを見ていると、私たちも一緒について行きたくなる気分になった。

作者の謎

Libro de Buen Amor は 4 行の連が 1700 以上も続く大著であり、中世特有の教化文学の代表作である。Juan Ruiz が庶民を相手に恋愛について説教する。扱われるテーマは聖母とキリストへの賛歌から世俗の恋愛術にまでわたり、品行方正であるべき司祭の立場にもかかわらず、作者の奔放な女性遍歴の物語としても読める。多分に文学的創作であると思われるが 14 世紀の庶民の生活を垣間見るようで興味深い。

Juan Ruiz は唯一この作品しか残しておらず、また歴史上にもほとんど記録が残っていないため、その背景がよくわからない。実は Juan Ruiz という名前であったのかどうかもあやしい。確かに次に見る 19 連に "yo, Juan Ruiz" と記されているが、それはごく平凡な名前なので作者の遊び心からの偽名であるという可能性もある。

姓名が平凡ならば何かの特徴を示すべきであるが、この作品ではそれが

Arcipreste de Hita 「イタの首席司祭」ということになる。はたして Hita は現在の Hita 村で、彼がその司祭だったのであろうか。あるいはこれも作者の勝手な詐称なのだろうか。これも謎に包まれたままである。



Festival Medieval de Hita

また、arcipreste 「首席司祭」という名称から村の規模も相当なものだろうと想像していたが、フェスティバルの行列の後について一巡りしてみたところ、とても小さな村であることがわかった。イタリアのスペイン中世文学研究者 Margherita Morreale (1990) の調査によれば Hita にはユダヤ人の居住者も多く、当時かなり重要な土地であったというが…。

線過去

次は作者の敬虔な信仰心を表す聖母マリア賛歌の一部である (González Ollé, 1980)。

(2)

| | |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 19 | Porque de todo bien es comienzo e raíz la Virgen Santa María, por ende yo, Juan Ruiz açipreste de Fita, d'ella primero fiz' cantar de los sus gozos siete, que así diz' |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

【語句】 **por ende** = por eso それゆえ **açipreste** > arcipreste 首席司祭 **fiz** > hice 私は作った **ansí** > así このように

【訳】19 聖母マリア様はすべての善の根源であられるので、イタの首席司祭である私フアン・ルイスは、はじめに彼女について次の七つの喜びの歌を作った。

(3)

| | |
|-----------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <i>Gozos de Santa María</i> | |
| 20 | O María, luz del día Tú me guía todavía |
| 21 | Gáname graçia e bendición, e de Jhesú consolaçión, que pueda con devoçión cantar de tu alegría. |

【語句】 **guía** guiar の命令形 **todavía** (s.XIII-XIV) = siempre 常に

【訳】「聖母マリアの喜び」20 ああ、陽光のようなマリア様、常に私を導きたまえ。21 あなたの喜びを敬虔な心で歌えますよう、私に恵みと祝福とイエスの慰みを与えたまえ。

(4)

| | |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 22 | El primer gozo que s' lea: en çibdad de Galilea Nazaret creo que sea, oviste mensajería |
| 23 | del ángel que a ti vino, Grabíel santo e dino, tróxote mensax' divino, díxote: "Ave María". |

【語句】 's lea > se lía leerse 「読まれる」の線過去3人称単数¹¹⁸ **çibdad** > ciudad 町 **creo que sea**¹¹⁹ > creo que era …であったと思う **oviste** = tuviste

¹¹⁸ この lea は接続法ではなく4行目の sea と同様に線過去形と考えたい。leía ではなく lea となったのは Galilea との脚韻のためであろう。

¹¹⁹ seer (> Mod. ser) の接続法ではなく、線過去 seía の別形であろう。27

あなたは持った **mensajería** > mensaje お告げ、知らせ **Grabiél** > Gabriel ガブリエル **dino** (s. XII-XIV) > digno 立派な **tróxote** > te traje あなたにもたらした **mensax'** > mensaje お告げ **díxote** > te dijo あなたに言った

【訳】22 書に記された最初の歓びは、ガリレアの町、たしかナザレという所で、あなたが知らせを受けられたことです。(23) あなたの許にやってきた立派な天使聖ガブリエルが伝えた知らせです。天使はこう言いました / 「アベ、マリア」。

現代スペイン語では ar 動詞は **aba** という語尾が特徴であり、er 動詞と ir 動詞は **ía** という語尾が特徴である。**aba** と **ía** は同じ機能を担うにも関わらず形が似ていないが、実は **ía** はかつての **iba** という語尾の **b** が消失したものであり、消失の前は **ba** という部分が全部の動詞に共通していた。

現代スペイン語の線過去の不規則形は **ser** の **era**, **ir** の **iba**, **ver** の **veía** の 3 つだけである。**era** はラテン語の不規則形を継承しているが、中世には上の(22)に見られるように、**sea** (または **seía**) という規則形も存在した。**ir** の線過去 **iba** という「不規則形」は先に見たような古い規則形 **iba** の名残りである。そして **ver** が元は **veer** (<Lat. *videre*) であったことからすれば、**veía** も歴史的に見れば規則形ということになる。同様な例が(22)の **lea** である。これは **leer** の接続法ではなく線過去の **leía** の別形である。このように **se(e)r** と **ve(e)r** と **leer** は本来同じ線過去形であったが、**ser** はラテン語の線過去形を継承し、**ver** は不定詞が短縮し、**leer** だけが他の規則変化形に足並みを揃えた¹²⁰。

作品の謎

この作品の面白さは作者が聖職者であるのに世俗の恋愛術を歌っていることにある。たとえば次は老司祭が若い女性に言い寄る場面である。

(10)

Aquí dize de cómo fué hablar con Doña Endrina el Arçipreste.

653

Ay, Dios! Quán hermosa viene Doña Endrina por la plaça!

Qué talle, qué donaire, qué alto cuello de garça!

連には **seía** がある。

¹²⁰ なお、(22)で、**seía**, **leía** ではなく **sea**, **lea** となっているのは AAAB 型の韻律(ea, ea, ea, ía) に合わせたものと考えられる。

Qué cabellos, qué boquilla, qué color, qué buenandança!

Con saetas de amor fiere quando los sus ojos alça.

654

Pero tal lugar non era para fablar en amores:

a mí luego me venieron muchos miedos e tenblores,

los mis pies e las mis manos non eran de sí señores,

perdí seso, perdí fuerça, mudáronse mis colores.

【語句】 **fermosa** (s.XII-XIV) > hermosa 美しい **buenandança** = buena manera de andar 美しい歩き方 **fiere, ferir** (s.XII-XVIII) > hierre, herir 傷つける。

【訳】 653 ああ神よ、広場を歩いてこちらに来るエンドリナさんのなんと美しいことか。/ なんとという体つき、なんとという優雅さ、その首は鷲(さぎ)のようになんとほっそりとしていることか！ なんとという髪、小さな口、肌の色、歩き方の美しいこと！ / 彼女が視線を向けると愛の矢で人を傷つける。(654) しかしこんな場所は愛を語らうにはふさわしくない。/ たちまち私はとても恐くなり震えはじめた。/ 私は自分の足も手も自由にならない / 私は分別を失い、力がぬけて顔色も悪くなった。

このようにして始まる **Endrina** との恋の話はとても長くなるが、要約すると最初の求愛に失敗した司祭が男女の仲を取り持つ老婆の助けを借りて思いを遂げるという話である。「神への愛」(amor a Dios)こそが書名の「良き愛」(buen amor)であり、「世俗の愛」などは「迷える愛」(loco amor)にすぎないということを説くのが作者の意図であったはずなのに、逆に迷える愛の説明の方が断然多く、生き生きとした描写が随所で精彩を放っている。また、たとえば恋を語るには人目につく場所を避けなければいけない、相手の気を引くには嘘も方便、金の力に頼るべし、などのアドバイスがしっかりと定型詩で歌われているので現代の読者も思わず笑ってしまう。

聖母マリア賛歌と恋の手練手管を同書に並べた作者の真意は不明だが、中世の峻厳な道德律の支配を逃れつつある 14 世紀に書かれた作品の舞台には退廃的な都市生活に広がる社会の現実が反映されているようにも思える。

■ テキスト

全編 4 行 1728 連から成る。書名『良き愛の書』*Libro de Buan Amor* は次の第 13 連にもとづいて後に R. Menéndez Pidal がつけたものである。

(1)

| | |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 13 | Tú, Señor e Dios mío, que al ome formeste, Enforma e ayuda a mí, tu açipreste, Que pueda fazer <i>Libro de Buen Amor</i> aqueste, Que los cuerpos alegre e a las almas preste. |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

【語句】 **Enforma**, enformar > informar = instruir 教える **preste**, prestar = ayudar, favorecer 救う

【訳】 13 人をお創りになった主なる神よ、/ 肉体に喜びを与え、精神を救う / この良き愛の書を作るために、/ あなたの首席司祭であるわれを教え導きたまえ。

次の (2) ~ (9) は聖母マリアへの讃歌であり、(10) ~ (18) は老司祭が若い女性に話しかける場面を描いている。

(2) ~ (4)

[前掲]

(5)

| | |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 24 | Tú, desde el mandado oíste, omilmente lo resçebiste, luego virgen conçebiste al fijo que Dios en ti envía |
| 25 | En Belem acaeçió el segundo quando nasció e sin dolor apareçió de ti, Virgen, el Mexía. |

【語句】 **desde** (s.XIII-XV) = después de que …した後で **mandado** (s.XII-XIV) = mensaje お告げ **omilmente** (s.XIV-XV) > humildemente 慎ましく **resçebiste** > recibiste あなたは受け取った **luego** (s. XII-XV) = prontamente すぐに **Mexía** > Mesías 救世主

【訳】 24 あなたはお告げを聞き、慎ましくそれを受け取られました。やがて神があなたに賜れた御子を、乙女の体で身ごもられました。25 ベツレヘムで起きた第二の歓びは、救世主が聖母のあなたから痛みもなくお生まれ

になったときのことです。

(6)

| | |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 26 | El terçero cuentan las Leys quando venieron los reys e adoraron al que veys en tu braço, do yazía. |
| 27 | Ofreçió 'l mirra Gaspar Melchior fue ençienso dar, oro ofreçió Baltasar al que Dios e ome seía. |

【語句】 **Leys** = Biblia 聖書 **veys**¹²¹ > veías あなたが見ていた **do** (s.XII-) > donde ... …の場所に **Ofreçió 'l** > le ofreció 彼に捧げた **fue ençienso dar** > fue a dar encienso 香を献上しに行った **ome** (s.XIII-XVII) > hombre 人 **seía** = era, ser の線過去 3 人称単数

【訳】 26 第三の歓びは、聖書に記されてあるとおり、あなたの腕の中に眠り、あなたが見つめる御子に礼拝するために、王たちがやってきたときのことです。27 神であり人である御子に、ガスパル王は没薬を、メルチョル王は香を献上し、バルタサル王は金を差し上げました。

(7)

| | |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 28 | Alegría quarta e buena fue quando la ¹²² Madalena te dixo, gozo sin pena, que el tu fijo ¹²³ vevía. |
| 29 | El quinto plazer oviste quando al tu fijo viste sobir al çielo e diste graçias a Dios o sobía. |

【語句】 **Madalena** > Magdalena マグダレナ **vevía** > vivía 生きていた **oviste**

¹²¹ veer の線過去は veies であったが、脚韻をそろえるため veys とされた。

¹²² 固有名詞の前に定冠詞をつけるのは現代語では俗語的な用法である。

¹²³ 定冠詞＋所有形容詞に注意。cf. 29b.

= **tuviste** あなたは持った **sobir** > **subir** 昇る **o** (s.XII-XIV) = **en donde**…の場所へ

【訳】 28 第四のすばらしき歡びは、マグダレナが、悲しみではなく喜びとともに、あなたの御子が生きている、とあなたに知らせた時のことです。
29 第五の歡びは、御子が天に昇り、神の許に行かれるのを、あなたをご覧になり、神に感謝を捧げた時のことです。

(8)

| | |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 30 | Madre, el tu gozo sesto, quando en los discípulos presto fue Spíritu Santo puesto en tu santa compañía |
| 31 | Del seteno, Madre santa, la Iglesia toda canta: sobiste con gloria tanta al çielo e quanta y avía. |

【語句】 **presto** (s.XIII-) = pronto すぐに **seteno** (s.XIV-) = séptimo 第七の。
y (s.XII-XV) = allí あそこに

【訳】 30 聖母様、あなたの第六の歡びは、あなたとともにいた使徒たちの前に聖霊が降りられた時のことです。31 聖母様、教会の皆が第七の歡びを歌っています。その場で満たされた大いなる栄光とともに天に昇られた時のことです。

(9)

| | |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 32 | Reinas con tu fijo quisto, nuestro Señor Jhesú Cristo: por ti sēa de nos visto en la Gloria sin fallía. |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

【語句】 **quisto** (s.XIV-XVIII) > querido 愛された **fallía** (s.XIV-XV) = falta 間違い

【訳】 32 今あなたはその愛児、われらが主イエスキリストとともに、女王とられました。かならずや主の御姿があなたの御力によりわれわれの目に見られんことを。

(10)

[前掲]

(11)

655

Unas palabras tenía pensadas por le dezir,
el miedo de las conpañas me façían ál departir:
apenas me conoşía nin sabía por dó ir,
con mi voluntat mis dichos non se podían seguir.

656

Fablar con muger en plaça es cosa muy descubierta:
a bezes mal perro atado (es) tras mala puerta abierta
bueno es jugar fermoso, echar alguna cobierta;
ado es lugar seguro, es bien hablar cosa çierta.

【語句】 **por le dezir** > para decirle **ál** (s.XII-XVII) = otra cosa 別のこと
departir (s.XII-)¹²⁴ = hablar 話す **dó** (s.XII-)¹²⁵ > dónde どこへ **cobierta**
(s.XIV-) = simulación 別のふり **ado** (s.XIV-XVII) > a donde, donde ...…の場
所で

【訳】 655 私は話したいことがあったが、/ まわりの人々の目が怖くて別
のことを話した。/ 彼女が私を認めると私はどうしてよいかわからなくな
った。/ 私の言っていることは思っていることとちぐはぐになった。/ 656
広場で女性と話すなど危険きわまりない。/ よく獰猛(どうもう)な犬が開い
た戸口に繋がれていることがある。/ うまくごまかし、真意は隠しておく
べきだ。/ 安全な場所で本当のことを話せばよい。

(12)

657

"Señora¹²⁶, la mi sobrina, que en Toledo seía,

¹²⁴ 現代語では **departir** は格式語である。El Ministro de Defensa alemán **deartió** cordialmente con su colega estadounidense por espacio de una hora. ドイツの国防大臣は米国の国防大臣と1時間に渡ってなごやかに会談した。

¹²⁵ **do** は今日では古語として詩などで用いられる。

¹²⁶ 女性に対する敬称。現代語の未婚の女性への敬称 **señorita** は18世紀から

se vos encomienda mucho, mill saludes vos enbía;
si ovies' lugar e tienpo, por quanto de vos oía,
deséavos mucho ver e conosçervos querría.

658

Querían allá mis parientes casarme en esta saçón
con una donçella rica, fija de Don Pepiön¹²⁷;
a todos di por respuesta que la non quería, non:
de aquella sería mi cuerpo que tiene mi coraçón."

【語句】**seía** (ser の線過去 3 人称単数) = estaba ... にいた **encomendarse a ...**
... を頼りにする **parientes** (s.XIII-XIV) = padres 両親

【訳】 657 「お嬢さん、実はトレドにいる私の姪が / あなたをすっかり
信頼しており、私はご挨拶を頼まれました。 / あなたのお噂をうかがって
おりますので、もし機会がございましたら、あなたにお会いしてお知り合
いになりたいそうです。 / 658 また、今私は両親に縁談を勧められておりま
す。 / 相手は金持ちの子女でドン・ペピオンの娘です。 / 私は皆に嫌だと返
事しておきました。 / 私の身は私の心にあるあの人のものです。

(13)

659

Abaxé más la palabra, dixel que en juego fablava
porque toda aquella gente de la plaça nos mirava;
desque vi que eran idos¹²⁸, que ome ay non fincava,
començel dezir mi quexa del amor que me afincava

* * *

【語句】**Abaxé** > bajé 声を低くする **ay** > ahí そこに **fincaba** = quedaba 残
っていた **quexa** (s.XIII-) > queja 苦しみ **afincaba**, **afincar** (s.XII-) = apremiar
苦しめる **desque** = después de que した後で

【訳】 659 私は声を落として、今のは冗談です。 / 広場の人々が皆私たち

使われるようになった。

¹²⁷ **pepión** は当時の少額貨幣の名。

¹²⁸ 自動詞の完了形の助動詞は **ser** が使われていた。また、過去分詞は主語
の性数に一致する。

を見ていたからです。 / 彼らが立ち去り人影がなくなるのを確かめて、 / 私は自分を苦しめる愛の悩みを打ち明けはじめた。

(14)

664

Señora, yo non me atrevo a dezirvos más razones,
fasta que me respondades a estos pocos sermones:
dezitme vuestro talante, veremos los coraçones."

Ella dixo: "Vuestros dichos non los preçio dos piñones.

665

Bien así engañan muchos a otras muchas Endrinas,
el ome tan engañoso así engaña a sus vezinas;
non cuidedes que só loca por oír vuestras parlinas,
buscat a quien engañedes con vuestras falsas espinas."

【語句】 **sermón** = habla, palabras 話、言葉 **talante** = voluntad, deseo 望み
cuidedes = penséis 考えないで **só** > soy 私は...である **parlinas** = hablas, parlerías 話、おしゃべり

【訳】 664 お嬢さん、あえてこれ以上は申しません、 / この私のわずかな言葉のお返事がいただけるまでは。 / 何がお望みか教えてください。二人の気持ちを打ち明けましょう。 / 彼女はこう言った。「あなたの話などこれっぽっちも気にならないわ。 665 そんな風にして多くの男性が多くのエンドリナをたぶらかし、 / こんな嘘つきの男がまわりの女性を騙すのね。 / あなたの戯言(たわごと)などを聞くほど私の頭がおかしいなどと思わないで。 / あなたの偽りの刺で騙せるような人をお探しなさい。

(15)

666

Yo le dixee: "Ya, sañuda, anden fermosos trebejos;
son los dedos en las manos¹²⁹, pero non todos parejos:
todos los omes non somos de unos fechos non co(n)sejos;
la peña tien' blanco e prieto, pero todos son conejos.

¹²⁹ las manos > Mod. la mano. 現代語ならばそれぞれに配分されたものは単数で表す。

667

A las vegadas lastan justos por pecadores,
a muchos enpeesçen los ajenos errores,
faz' mal culpa de malo a buenos e a mejores:
deven tener la pena a los sus fazedores.

【語句】 **Ya** (s.XII-XV) = Oh! おや、まあ! **trebejos** (s.XIII-) = juguete おもちゃ **consejos** = parecer 意見 **peña** = piel para forro 裏地の皮 **vegadas** > veces 度 **lastan** (s.XIV-XV) = padecer 苦しむ **enpeesçen** (s.XIV) > empecer 妨げる

【訳】 666 私は彼女にこう言った「おや、ご立腹ですね。上手にお話しになりますね。 / どの指も同じ手の中にありますが、みな同じではありません。 / 男たちも、それぞれ行いも考えも同じではないのです。 / ウサギだって白いのも黒いのもありますが、それでも皆ウサギに変わりはありません。 667 ときには正しい者が罪人に代って苦しい目に遭い、 / 他人の過ちのせいで多くの者が迷惑いたします。 / 善人が、またもっとも心の正しい人が悪人の罪をかぶるのです。 / 罰はその張本人に与えなければなりません。

(16)

668

El yerro que otro fizo, a mí non faga mal;
avet por bien que vos fable allí so aquel portal,
non vos vean aquí todos lo(s) que andan por la cal;
aquí vos fablé uno, allí, vos hablaré ál."

669

Paso a paso Doña Endrina so el portal es entrada¹³⁰,
bien loçana e orgullosa, bien mansa e sosegada,
los ojos baxó por tierra, en el poyo asentada;
yo torné en la mi fabla que tenía començada.

【語句】 **cal** (s.XIII-XV) > calle 通り **fablé** > hablé 私は話した **ál** > otra cosa 別のこと **tornar** (s.XII-XV) = regresar, volver 戻る

【訳】 668 他人が犯した過ちで私を苦しめないでください。 / あの門の下

¹³⁰ 自動詞の現在完了。

でお話しさせてください。 / あなたが通りの通行人の目に触れないように。
 / 実はここで話したこととあちらで話そうと思うことは違うのです」 669
少しずつドニャ・エンドリナは門の中に入っていった。 / 若々しくそして
堂々と、かと思えば、素直におとなしく、 / 下を向いて、石の腰掛けに座
った。 / 私は言いかけていたことをまた話しはじめた。

(17)

670

"Escúcheme, señora, la vuestra cortesía
un poquillo, que vos diga la muerte mía:
cuidades que vos fablo en engaño e en folía,
e non sé qué me faga¹³¹ contra vuestra porfía.

671

A Dios juro, señora, para aquesta tierra,
que quanto vos é dicho de la verdat non yerra;
estades enfríada más que la nief de la sierra,
e sodes atán moça que esto me atierra.

【語句】 **folía** (s.XII-XV) = locura, desvarío 馬鹿げたこと、狂気 **en folía** = en
broma 冗談で **para ... > por ...** ...にかけて(誓う) **nief** > nieve 雪 **sodes** > sois
あなたは…だ **atierra**¹³² (s.XIII-XV) = abatir, derribar 落胆させる、がっかり
させる

【訳】 670 「お嬢さん、聞いてください。 / 私の死ぬほどの気持ちを話さ
せてください。 / あなたは私が嘘や冗談を言っていると思っていらっしゃ
る。 / 私はあなたの頑(かたくな)な気持ちをどうしたらよいのかわかりませ
ん。 / 671 お嬢さん、この世のすべてと神にかけて申します。 / あなたにお
話したことは真実に違(たが)うことはございません。 / あなたは山の雪より
も冷たいお方です。 / そしてあまりに幼いので、わたしはがっかりしてお
ります。

(18)

672

¹³¹ 現代語の間接疑問文では No sé qué me hago ...となる。

¹³² 現代語の aterrarse は語根母音変化をしない。 > Mod. aterrarse.

Fablo en aventura con vuestra moçedad,
cuidades que vos fablo lisonja e vanidad
non me puedo entender en¹³³ vuestra chica edad;
querríedes jugar la pella¹³⁴, más que estar en poridad.

【語句】 **en aventura** = al alzar あてずっぽうに、むやみに **cuidades** = peinsáis あなたは考える **pella** > pelota 鞠(まり) **poridad** > puridad = secreto 秘密

【訳】 672 私は幼いあなたに何を話してよいのやら。 / あなたは私がお世辞や戯言を弄しているとお考えです。 / 私はあなたの幼さが理解できないのです。 / あなたは秘め事よりも鞠つき遊びがお望みなのでしょうか。

●課題

【課題 9a】 現代スペイン語の線過去形が他の時制とくらべて規則的である歴史的理由を考えなさい。

【課題 9b】 スペイン語の動詞活用を「語根＋活用語尾」(cantá-bamos)と分けて説明する方法と、「語根＋法・時制語尾＋人称語尾」(cantá-ba-mos)と分けて説明する方法を比較しなさい。

【課題 9c】 次の Valbuena Prat (1974)の説明を肯定する観点から、または批判する観点から Juan Ruiz のテキストを読み気づいたことを書きなさい。

"Como las obras de Boccaccio y de Chaucer, el *Libro de buen amor* pertenece a un momento de crisis de los ideales de la antigua Edad Media." (p.154) "El Arcipreste vive en la época de pleno choque entre la corriente ascética de la Edad Media anterior y el triunfo de la vida que culminará en el gran Renacimiento". (p.159) "En todo el libro aparece la doble posición ascética y sensual, que produce un conjunto tan representativo de la época." (p.160).

【参考】

González Ollé, F. 1980. *Lengua y literatura españolas medievales*. Barcelona.

¹³³ entenderse en > Mod. entenderse con.

¹³⁴ jugar la pella > Mod. jugar a la pelota.

Ariel.

Morreale, Margarita. 1990. "El Libro del Arcipreste de Hita", en J.F. Arcina
Rovira et al. (eds.) *Historia de la literatura española, I*, Catedra.

Valbuena Prat, Ángel. 1974. *Historia de la literatura española*, octava ed.
Barcelona. Editorial Gustavo Gili.

10. 形式の統一… ドン・フアン・マヌエル『ルカノール伯爵』

Don Juan Manuel, *El Conde Lucanor* (1335)

今回紹介する Don Juan Manuel (1282-1348) の代表作『ルカノール伯爵』*El Conde Lucanor* の形式上の首尾一貫性は徹底している。全編 51 話を通して例外なく次のように進行する。はじめに Conde Lucanor という貴族が Patronio という相談役に「実は…ということで困っている」と話しかけて人生のさまざまな悩みを相談する。Patronio は適切なたとえ話をして結論へと導き、Conde Lucanor はそれに納得し、さらに著者である Don Juan Manuel が教訓を含んだ短詞で締めくくる。多少の変化はあるが基本的にこの枠組みを崩さない。ちょうど毎回の放送番組の開始と終了の部分が同じ形式になるのと似ている。形式を統一するという作者の意図は読者にとって単調なワンパターンになるのだろうか、それとも快適な繰り返しになるのだろうか。



作者の姿

生真面目と言ってよいほどの作者の性格は作品の随所に現れている。たとえば次の序文を読むと作者としての意識が強く感じられる。これほどまでに自分の作品の伝承のあり方を懸念することは当時としては珍しい¹³⁵。

(1)

Et porque don Iohan vio e sabe que en los libros contesçe muchos yerros en los trasladar, porque las letras semejan unas a otras, cuydando por la una letra que es otra, en escriviéndolo, múdasse toda la razón et por aventura confóndesse, et los que

¹³⁵ テキストは González Ollé. 1980。

después fallan aquello escrito, ponen la culpa al que fizo el libro; et porque don Iohan se reçeló desto, ruega a los que leyeren qualquier libro que fuere trasladado del que él conpuso o de los libros que él fizo, que si fallaren alguna palabra mal puesta, que non pongan la culpa a él fasta que bean el libro mismo que don Iohan fizo, que es emendado, en muchos logares, de su letra. Et los libros que él fizo son éstos, que él a fecho fasta aquí (...) Et estos libros están en el monesterio de los frayres Predicadores que él fizo en Peñafiel.

【語句】 **trasladar** = transcribir 転記する **semejan** = parecerse 似ている **cuydando, cuydar** = pensar 考える **confóndasse** > se confunda 混同する **desto** > de esto ここから **fallaren, fallar** > hallar 見つける **bean** > vean ver 見るの接続法 3 人称複数 **monesterio** > monasterio 修道院。

【訳】 さて、ドン・ファンは書物を筆写する際の文字の類似による見誤りから多くの誤記が生まれ、その結果意味が取り違えられ、ときに混乱が生じ、後世の人々がそれを著者の責任にするのを見聞している。ドン・ファンはこれを懸念し、彼のいずれかの本の写しを読む人々に対し、なにか不適切な言葉を見つけたとしても、著者自身の手で多くの訂正をほどこした原著を見るまでは著者のせいにはしないことを要望している。ちなみに、今日まであらわした書物は次のとおりである。(…) これらはすべて、自ら建立したペニャフィエルの説教修道士のための修道院に保管されてある。(牛島・上田訳→写真)

作者はこの説話集を書くにあたり自由に創造するのではなく、題材をアラビアの寓話、聖人伝、西洋古典、スペインの伝承などの規範に求めている。そして典型的な教育者のようにわかりやすさと楽しさを追求しながら、念入りな文体で読者に教訓を示している。このように *El Conde Lucanor* は形式も内容も確かに筋を通した「真面目な」作品である。本書に見られる峻厳かつ信仰篤い Castilla の貴族の生活や思想は同時代の Juan Ruiz の『良き恋の書』 *Libro de Buen Amor* の奔放な明るさとは好対照を成している。

活性化するメンタリティー

El Conde Lucanor の教訓は恒久の真理を含んでいる。牛島信明氏は訳書の解説で「本書に収められたたとえ話はいずれも時間・空間を超えて人間の心に響き合う、ありふれた、それゆえ陳腐でさえある精神的状況 (…) をテーマにしている。そうした古今東西に偏在する〈人間性〉をテーマとし、

おまけにそこに教訓を添えていくのであれば、勢い退屈で色褪せたものになりがちであろう。しかし、ここにあるたとえ話にはかび臭さや抹香臭さはなく、いずれもわれわれに共通のメンタリティを心地よく活性化させつつ、静かに躍動している」と記している。それを可能にさせた秘密は内容の豊かさとともに効果的に繰り返される形式の統一にもあるのだろう。

■テキスト

Don Juan Manuel は明快・素朴な筆致で独自の文学世界を繰り広げている。シェイクスピアの「じゃじゃ馬ならし」、アンデルセンの「裸の王様」の古い形や、悪魔に魂を売り渡す物語なども含み、内容・様式ともに完成度の高い第一級の説話文学である。

全編(第一部)は 51 話 (exemplos) から成り、次はその第二話である。出典はイソップ (Esopo) 物語である。

(2)

EXEMPLO II

El omne bueno et su fijo eran labradores et moravan çerca de una villa. Et un día que fazían y mercado, dixo a su fijo que fuesen amos allá para comprar algunas cosas que avían menester; et acordaron de levar una vestia en que lo traxiesen. Et yendo amos a mercado, levavan la vestia sin ninguna carga et yvan amos de pie et encontraron unos omnes que vinían daquela villa do ellos yvan. Et de que fablaron en uno et se partiron los unos de los otros, aquellos omnes que encontraron, conmençaron a departir ellos entre sí et dizían que non les paresçia de buen recabdo aquel omne et su fijo, pues levavan la vestia descargada et yr entre amos de pie (...) Et entonçe mandó el omne bueno a su fijo que subiese en la vestia.

【語句】 **omne** > hombre 男 **moravan**, morar = vivir 住む **y** > ahí そこで **dixo** > dijo, decir 言うの点過去 3 人称単数 **amos** > ambos 両者、二人 **avían menester** = necesitar 必要とする **levar** > llevar 運ぶ **vestia** > bestia 家畜 **daquella** > de aquella **do** > adonde 「場所・方向」を示す関係副詞。

【訳】 その善良な農夫と息子はある村はずれに住んでおりました。町に市がたつある日のこと、農夫は息子を誘って必要な品の買い物のために、それを運ぶロバを連れていくことに決めました。そして、ロバには何も載せ

ないで市場にむかって二人が歩いて行くと、目指す町のほうから数人の男たちがやって来るのに出くわしました。挨拶を交わして別れると、その男たちは口々に、ロバに何も載せないで二人共が歩いているようじゃ、あの農夫も息子も、あまり賢くはなさそうだ、と言いました。(…)そこで、農夫は息子にロバに乗るように言いました。

(3)

Et yendo así por el camino, fallaron otros, et de que se partieron dellos, conmençaron a dezir que lo errara mucho aquel omne bueno, porque yva él de pie, que era viejo et cansado, et el moço, que podría sufrir lazeria, yva en la vestia. Preguntó entonçe el omne bueno a su fijo que quel paresçia de lo que aquellos dizían; et él dixol quel paresçia que dizían razón. Estonçe mandó a su fijo que dicese de la vestia et subió él en ella.

【語句】 **dizían** > decían, decir の線過去 3 人称複数 **dicese**, **dicir** = bajar 降りる

【訳】 こうして、さらに道を進んで行くと、また数人の男たちに出会いました。別れ際に男たちは、年寄りの疲れた老人が歩いているのに、つらいことなど平気な若者がロバに乗っているのはおかしい話だ、と言いはじめました。そこで、農夫が息子に男たちの話をどう思うかと聞くと、息子は男たちの言うことが正しい、と答えました。そこで農夫は息子を降ろし、自分がロバに乗りました。

(4)

Et a poca pieça toparon con otros, et dixieron que fazia muy desaguizado dexar el moço, que era tierno et non podría sufrir lazeria, yr de pie, et yr el omne bueno, que era usado de pararse a las lazerias, en la vestia. Estonçe preguntó el omne bueno a su fijo que qué paresçie destes que esto dizían. Et el moço dixol que, segund él cuydava, quel dizían verdat. Estonçe mandó el omne bueno a su fijo que subiese en la vestia porque no fuese ninguno dellos de pie.

【語句】 **pieça** = rato 短い時間 **lazeria** (s.XIII) = miseria, pobreza **usado**, usar (s.XIV, XV)= acostumbrar, tener costumbre de **pararse a** = sufrir

【訳】しばらくしてまた別の男たちに出会うと、彼らは、まだ小さくつらいことに耐えられない子供を歩かせ、苦勞に慣れた大人がロバで行くのはとんでもないことだ、と言いました。農夫は息子に男たちの言うことをどう思うか聞きました。息子は自分も男たちの言っていることが本当だと思う、と答えました。そこで、農夫は二人共歩かないですむように息子もロバに乗せました。

(5)

Et yendo así encontraron otros omnes et començaron a dezir que aquella vestia en que yvan era tan flaca que abés podría andar bien por el camino; et pues así era, que fazían muy grant yerro yr entramos en la vestia. Et el omne bueno preguntó al su fijo que qué semejava daquello que aquellos omes buenos dizían; et el moço dixo a su padre quel semejava verdat aquello. Estonçe el padre respondió a su fijo en esta manera:

【語句】 **abés** > apenas ほとんど...でない **entramos** > ambos 二人

【訳】(5) さらに行くと別の男たちに出会いました。彼らは、二人の乗っているロバは弱っていて歩くのがつらそうだ。だから二人が乗って行くなるととんでもない、と言いはじめました。農夫が息子に男たちの言うことをどう思うかと聞くと、息子は、男たち言うとおりでと思う、と答えました。そこで、農夫は息子に次のように言いました。

(6)

(...) Ruégote que me digas qué es lo que podemos fazer en que las gentes non puedan travar; ca ya **fuemos** entramos de pie, et dixieron que non fazíamos bien; et **fu** yo de pie et tú en la vestia, et dixieron que errávamos; et **fu** yo en la vestia et tú de pie, et dixieron que era yerro; et agora **yamos** amos en la vestia, et dizen que fazemos mal. Pues en ninguna guisa non puede ser que alguna destas cosas non fagamos, et ya todas las fiziemos, et todos dizen que son yerro, et esto fiz yo porque tomasses exiemplo de las cosas que te acaesçiesen en tu fazienda; ca çierto sey que nunca farás cosa de que todos digan bien.

【語句】 **travar** = criticar 非難する **agora** > ahora 今 **yamos** = vamos, ir の

現在 1 人称複数 **guisa** = *manera* 方法 **fagamos** > *hagamos*, *hacer* 「する」の接続法現在 1 人称複数 **fiziemos** > *hicimos*, *hacer* 「する」の点過去 1 人称複数 **sey** > *sé*, *ser* の命令形。

【訳】 (...) それではおまえに聞くが、他人にとやかく言われずにできることなどあるだろうか。二人で歩いて行ってもよくないというし、わしが歩いておまえがロバに乗っても間違いだという。わしがロバに乗っておまえが歩いてても間違いだというし、二人共ロバに乗っても、誤ったことをしているという。この中のいずれかをしなければならぬのに、すべてを試してみたところ、全部間違いだと言われたのだ。実はこれはわしがおまえにこれからの人生の教訓にするようにと欲してしたことなのだ。何事であれ万人がよいと言ってくれることなどないということ肝に銘じるのだ。

動詞 **ir**

今回取りあげるのは動詞 **ir**「行く」である。この不定詞形と現在形(*voy*, *vas*, *va*, *vamos*, *vais*, *van*)はまったく似ていない。まるで不定詞形が **var** であるかのようだ。実は **ir** の現在形は別のラテン語 **vadum**「川の浅瀬」の派生動詞 **vadere**「行く」という動詞に由来する。ラテン語 **ire** の現在形(*eo*)が極端に短く形式を補充する必要があったのだろう。

ところが上の文中に **vamos** ではなくて **yamos** (= *imos*) という興味深い形が見つかる。これは **ir** 動詞の規則的な変化形であるが、このような形は 1 人称複数(*imos*)や 2 人称の複数(*ides*) しか見つからない。これらは 2 音節なので形を補強する必要がなかったのだろう。現代スペイン語では *imos*, *ides* が消えて *vamos*, *vais* となり現在形の活用形が統一された。

また文中には **ir** の点過去形の **fu** (>*fui*) や **fuemos** (>*fuiimos*) がある。このように **ser** の点過去と同じ形になった理由を **Federico Hanssen** の *Gramática Histórica de la Lengua Castellana* は「方向」を示す **ir** が「場所」を示す **ser** と融合した結果であると説明しているが、それとともにラテン語の **ire** の過去形 *ii* が極端に短かかったため、やはりここでも同じように形式上の補強が必要だったのだと思われる。

次は有名な「牛乳売り女の計算」**cuentas de la lechera** の話である。この **cuentas...** は現代スペイン語でも「取らぬ狸の皮算用」という意味でよく使われる。

(7)

EXEMPLO VII

Señor conde --dixo Patronio--, una muger fue que avie nombre doña Truana et era asaz más pobre que rica; et un día yva al mercado et levava una olla de miel en la cabeça. Et yendo por el camino, comenzó a cuydar que vendría aquella olla de miel et que compraría una partida de huevos, et de aquellos huevos nazçirían gallinas e depués, de aquellos dineros que valdrían, compraría ovejas, et assi, comprando de las ganancias que faría, que fallóse por más rica que ninguna de sus vezinas.

【語句】 **avía** > tenía 持っていた **asaz** = bastante 十分に **vendría** > vendería, vender 「売る」の過去未来 **fallóse** > se halló ...になった。

【訳】 伯爵様、一パトロニオは語りはじめた—トルアーナという名の豊かというよりはずっと貧しい女がおりました。ある日のこと、蜂蜜を入れた瓶（かめ）を頭にかついで市場に向かっておりましたが、その道すがらこのような想像をしたのです。まず蜂蜜を売ってその金で卵を一箱買い、その卵から雛がかえればそれを売って今度は羊を買う、そして…、というように次々に儲けを増やせば、いつか村一番の金持ちになれるだろうと考えたのでございます。

(8)

Et con aquella riqueza que ella cuydava que avía, asmó cómmo casaría sus fijos et sus fijas, et cómmo yría aguardada por la calle con yernos et con nueras et cómmo dirían por ella cómmo fuera de buena ventura en llegar a tan grant riqueza, seyendo tan pobre commo solía seer.

【語句】 **asmó**, asmar = pensar 考える **aguardada**, aguardar = proteger 守る。

【訳】 そして彼女は空想のなかで手に入れた富で自分の子供たちを結婚させ、嫁や婿に囲まれて村を歩く自分の姿を想像し、そうすれば、村人たちは、むかし貧しかったあの女がよくもまああんなに財をなして幸せになったものだ、と噂するだろうと考えて悦に入れておりました。

Et pensando en esto començó a reyr con grand plazer que avía de la su buena andança, et, en riendo, dio con la mano en su fuente, et entonce cayol la olla de la miel en tierra et quebróse. Quando vio la olla quebrada, començó a fazer muy grand duelo, toviendo que avía perdido todo lo que cuydava que avría si la olla no le quebrara. E porque puso todo su pensamiento por fuza vana, non se fizo al cabo nada de lo que ella cuidava.

【語句】 **fuente** > frente 額(ひたい) **toviendo**, tener > teniendo, tener 持つ、考える **fuza**, fuzia = confianza 期待

【訳】 このように想像して喜びを抑えきれなくなって思わず声をたてて笑い出し、額をぴしゃりとたたいたのでございます。すると、蜜の入った瓶が地面に落ちて割れてしまいました。無残にも粉々になった瓶を見ると悲嘆にくれて、瓶が割れさえしなければ、手に入ったはずのものがみな失われてしまったことをひどく嘆きはじめました。はかない望みにすべての期待をかけていたので、結局あてにしていたことがひとつも実現されなかったのでございます。

物語の枠構造

作者 Don Juan Manuel は、ルカノール伯爵(Conde Lucanor) が相談役のパトロニオにさまざまな困難の解決法を相談し、パトロニオがたとえ話をしながら適切な助言を与える、という構造を一貫して用いている。ここに、作者ルカノール伯爵とパトロニオ-たとえ話中の登場人物という 3 つの枠構造が設定されるが、各説話の末尾に付された格言で、枠構造の一番外側に位置する作者自身が三人称で登場し、話全体を記録させた上、自ら教訓詩を書いている。つまり、パトロニオのたとえ話がルカノール伯爵によって受け入れられることにより、「単なる寓話が間接的に歴史の枠に組みこまれ、それがさらに、作品の中に顔を出すドン・フアンのつくる最後の二行詩によって、作者自身の生や歴史的状況と結びつけられている」¹³⁶ことに注目したい。

こうした枠構造を見るために、次は第二十九話全体を読むことにしよう。

¹³⁶ 牛島 (1997), p.85.

(10)

EXEMPLO XXIX

- Patronio, un mio pariente vive en una tierra do non ha tanto poder que pueda estrañar cuanta escatimas le fazen et los que han poder en la tierra querrían muy de grado que fiziesse él alguna cosa por que hobiessen achaque para seer contra él. Et aquel mio pariente tiene que le es muy grave cosa de sufrir aquellas terrerías quel' fazen, et querría aventurarlo todo ante que sufrir tanto pesar de cada día. Et porque yo quería que él acertasse en lo mejor, ruégovos que me digades en qué manera le aconseje por que passe lo mejor que pudiere en aquella tierra.

【語句】 **estrañar** = rehuir, esquivar 避ける **escatima** = agravio 侮辱、攻撃
terrería = desaguisado 不正、暴力

【訳】 パトロニオよ、わしの親戚の一人が、住んでおる土地で十分な勢力を持たないがゆえに何かと嫌がらせを受けている。その他の有力者たちは彼を攻撃するための口実を得んとして、彼にけしかけてなんらかの拳に出させようとしているのだ。一か八かこちらから打って出て決着をつけたい、というのだ。わしはその者に最善の行動をとらせたいので、彼がかの地でできるだけうまくやるにはどのような助言をしたらよいものか、ぜひそちに教えてもらいたい。

(11)

Señor conde Lucanor, dixo Patronio, para que vós le podades aconsejar en esto, plazerme ya que sopiéssedes lo que contesçió una vez a un raposo que se fezo muerto.

El conde le preguntó cómo fuera aquello.

【語句】 **plazerme ya** > me placería ...であれば幸いです **fezo** > hizo hacer
の点過去 3 人称単数

【訳】 ルカノール伯爵様、一パトロニオはこたえた—この件でよき助言をしていただくために、ある時死んだふりをした狐に起こったことを知っていただければ幸いです。

伯爵はどのようなことであつたのかとたずねた。

(12)

Señor conde, dixo Patronio, un raposo entró una noche en un corral do avía gallinas. Et andando en roýdo con las gallinas, quando él cuidó que se podría ir, era ya de día e las gentes andavan ya todos por las calles. Et desde que él vio que no se podía asconder, salió escondidamente a la calle e tendióse assí commo si fuesse muerto.

【語句】 **do** > donde 「場所」の関係副詞 **asconder** > esconder 隠れる

【訳】伯爵様、一パトロニオは語りはじめた—ある晩、狐が鶏のいる裏庭に侵入し、鶏を追いかけ回しました。そして、そろそろ帰ろうかと思ったときには、とっくに陽がのぼり往来はにぎわっておりました。もはや逃げ隠れはできない、と観念してそっと外に出て、そこで死んだふりをして横になりました。

(13)

Quando las gentes lo vieron, cuydaron que era muerto et non cató ninguno por él.

A cabo de una pieça passó por ý un omne e dixo que los cabellos de la fuente del raposo que eran buenos para poner en la fuente de los moços pequeños porque no les aojen. Et trasquiló con unas tiseras de los cabellos de la fuente del raposo.

【語句】 **cabello** = pelo 髪の毛 **fuente** > frente 額(ひたい) **aojen**, aojar = causar el mal de ojo 目の病気にする **tiseras** > tijeras はさみ。

【訳】それを見た人々はてっきり死んでいるものと思い、気にも留めませんでした。

しばらくしてひとりの男が通りかかり、狐の額(ひたい)の毛は悪魔の目を避けるのに効くという話だから、わしの子供たちの額につけてやるために切り取っていくことにしよう、と言い、はさみで狐の額の毛を切り取りました。

(14)

Después vino otro et dixo esso mismo de los cabellos del lomo. Et otro, de las yjadas. Et tantos dixieron esto fasta que lo

trasquilaron todo. Et por todo esto, nunca se movió el raposo, porque entendía que aquellos cabellos non le fazían daño en los perder.

Después vino otro e dixo que la uña del polgar del raposo que era buena para guaresçer de los panarizos; e sacógela. Et el raposo non se movió.

【語句】 **polgar** > pulgar 親指 **guaresçer de** = curar 治療する **panarizo** = panadizo ひょうそ（手や足の指の化膿による炎症）。

【訳】そして、またひとりの男がやってきて、背中の毛について同じことを言い、さらに次の男は脇腹の毛について同じことを言って、切り取っていきました。そしてこういしたことが何度も繰り返されたあげく、とうとう狐は丸裸にされてしまいました。ところが狐は何があってもじっと動こうとはしませんでした。毛などいくら切られても大したことではないと知っていたからでございます。

また、ひとりの男がやってきて、狐の親指の爪は指の腫れ物に効く、と言って引き抜きました。これでも狐はじっとしておりました。

(15)

Et después vino otro que dixo que el diente del raposo era bueno para el dolor de los dientes; e sacógelo. Et el raposo non se movió.

Et después, a cabo de otra pieça, vino otro que dixo que el corazón era bueno para el dolor del corazón et metió mano a un cochiello para sacarle el corazón. Et el raposo vio quel querían sacar el corazón e que si gelo sacassen, non era cosa que se pudiesse cobrar et que la vida era perdida et tovo que era mejor de se aventurar a quequier quel pudiesse venir, que soffrir cosa porque se perdesse todo. Et aventuróse e puñó en guaresçer et escapó muy bien.

【語句】 **cochiello** > cuchillo ナイフ **quequier quel** > cualquier que le.

【訳】また、ひとりの男がやってきて、狐の歯は歯痛に効く、と言って引き抜きました。やはり狐はじっとしておりました。

それからしばらくして、別の男がやって来て、狐の心臓は心臓の痛みに効く、と言いながら、ナイフを手にして切り取ろうといたしました。これ

を見た狐は心臓を取られて命をなくしては取り返しがつかない、すべてを失うことになるよりも、ここはあらゆる危険をおかしてでも逃げ出すほうが賢明だ、と思いました。こうして腹を据えると、必死にもがいて、うまく逃げ出すことができました。

(16)

Et vós, señor conde, conseiad a aquel vuestro pariente que si Dios le echó en tierra do non puede estrañar lo quel fazen commo él querría o commo le cumplía, que en quanto las cosas quel fizieren fueren atales que se puedan soffrir sin grand daño e sin grand mengua, que dé a entender que se non siente dello e que les dé passada. Ca en quanto da omne a entender que se non tiene por maltrecho de lo que contra él an fecho, non está tan envergonçado; mas desque da a entender que se tiene por maltrecho de lo que ha reçevido, si dende adelante non faze todo lo que deve por non fincar menguado, non está tan bien commo ante.

【語句】 **envergonçado** > avergonzado 恥じている。

【訳】 さて、伯爵様、天の配剤で自分の思いどおりに敵の脅威をのがれることのできない土地に住んでおられる縁者のかたに、敵どものなすことが、それほどの被害もなく耐えられるものであれば、あまり気にせず我慢するよう助言されたらよろしいでしょう。身にふりかかる被害も気にならないほどであることを人に分からせさえすれば、不名誉とはならないからでございます。しかし、他人から受けた侮辱によって傷ついたことが世間に知られてしまったのに、自分の威信を回復するために手を尽くさないとしたら、話はちがいます。

(17)

Et por ende a las cosas passaderas, pues no se pueden estrañar como deben, es mejor de les dar passada; mas si llegare el fecho a alguna cosa que sea gran daño o gran mengua, estonce se aventure e non lo sufra, ca mejor es la pérdida o la muerte, defendiendo homne su derecho e su honra et su estado, que vevir pasando en estas cosas mal e deshonoradamente.

【語句】 **vevir** > vivir 生きる

【訳】したがって、些細なことであるかぎり、それがいかにしても避けられないとしても、放っておいてよろしいでしょうが、もし、重大なことになり不名誉をもたらすことになったら、そのときこそ、意を決すべきで、我慢などしてはなりません。自らの権利と名誉と地位を守り、敗れ去るか死ぬほうが、恥をさらしながら苦痛を堪え忍んで生きるよりもよいからでございます。

(18)

El conde tovo éste por buen conseio. Et don Ioan fízolo
escribir en este libro e fizo estos viessos que dizen assí:
*Sufre las cosas en quanto divieres,
estraña las otras en quanto pudieres.*

【語句】 **viessos** > versos 詩 **divieres** > debieres deber の接続法未来 2 人称単数 **estraña** > evita 避ける。

【訳】(18) 伯爵はこれを良い助言だと思った。ドン・フアンはこの話をこの本に書きとらせ、次のような詩を作った。

甘受すべきことは我慢し
そうでないことは力を尽くし退けよ

この話は『七賢人物語』(*Libro de los siete sabios*)にある。当時よく知られていたらしく、Juan Ruiz の『良き愛の書』(*Libro de buen amor*,1412-1425 行)にも載せられている。

●課題

【課題 10a】現代スペイン語の動詞の中で不定詞が単音節になるものを探し、その不規則性を歴史的に考察しなさい。

【課題 10b】それまでのスペインの文学作品と比較しながら Don Juan Manuel の作者としての意識について考察しなさい。

【課題 10c】枠構造の物語の例をスペインと日本を含めた世界の文学から探しなさい。この形式で物語る効果について考察しなさい。

【参考】

- Alcina Branch, Juan. 1978². *El Conde Lucanor y otros cuentos medievales*. Barcelona. Editorial Bruguera.
- Alvar, Carlos y Pilar Palanco. 1984. *Don Juan Manuel. El Conde Lucanor. Edición y notas*. Barcelona. Planeta.
- González Ollé, F. 1980. *Lengua y literatura españolas medievales*. Barcelona. Ariel.
- Hashimoto, Ichiro. 1984. 橋本一郎(訳注)『ドン・フアン・マヌエル。ルカノール伯爵』大学書林
- Moreno Baez, Enrique. 1979. *El Conde Lucanor. En versión española moderna*. Madrid. Castalia.
- 牛島信明. 1997. 『スペイン古典文学史』名古屋大学出版会。
- 牛島信明・上田博人訳. 1994 『スペイン中世・黄金世紀文学選集3. ルカノール伯爵』国書刊行会

11. 競い合う神々…『トロヤ戦記』

Crónica Troyana (1400 年頃)

「一日しかスペインにいらなければ Toledo に行け」という勧めを何度か耳にしたことがある。たしかに古都 Toledo は魅力的だが移動時間を考えると難しい。Toledo にはゆっくりと時間をかけて訪れたい。本当に一日しかなければ Madrid を見るべきだと思う。早朝の Retiro 公園で運動をしている人たちを見ながら Prado 美術館の開館時間を待つ、午前中ゆっくり美術品と共に過ごした後、Plaza Mayor の周辺で昼食をとる、午後は Gran Vía から Plaza de España



Cibeles, Madrid

に至り Cervantes と Don Quijote y Sancho Panza の像を見る、夕刻は Palacio Real から Parque de Oeste に広がる日没の景色を眺める、という徒歩のコースは何度辿っても飽きない。夜に時間の余裕があれば Puerta del Sol 界隈の喧騒に飲み込まれるのもよいだろう。

Madrid を散歩すると古代の神々に出会う。Retiro 公園の正門に面する Alcalá 通りと Paseo del Prado が交差するロータリーに小アジアの大地の女神 Cibeles の噴水がある【写真-11a】。また南に下るとローマの海神 Neptuno の噴水にぶつかる【写真-11b】。その斜め前が Prado 美術館だ。Paseo del Prado は 500m ほどの短い通りであるが、緑陰に囲まれた絶好の散歩道 (paseo) である。



Neptuno, Madrid

美を競う

Prado 美術館に入れば古代ギリシャ・ローマ神話をテーマにした多くの有名な美術品が鑑賞できる。たとえばルーベンス (Peter Paul Rubens) の「パリスの審判」El Juicio de Paris (1638 年) や「三美神」Las Tres Gracias (1636 年) は図版などで見慣れた作品だが、実物に勝るものはない。美術館の各

所でわき起こる歓声を聞くと、世界に1つしか存在しない作品に対面した興奮が伝わってくる。

晦渋な古代神話の世界をやさしく解説してくれる Thomas Bulfinch の *The Age of Fable* (1855 年) はトロヤ戦争の発端について次のように述べている。「アテナは智慧の女神でありましたが、ある時ひどくばからしいことをしました。彼女は美を我が手にしめようとしてヘラやアプロディテと競争したのであります。」(野上弥生子訳『ギリシャ・ローマ神話』岩波文庫)。確かに三女神 (Rubens の描いた *Las Tres Gracias*) が美貌を競い合うなどということは「ばからしいこと」に違いない。神や人にはほかに代え難い固有の価値があるのだから、それを競ったり比較したりするのは愚かなことだ。その審判をさせられたのが Rubens の絵にもあるパリスで、彼はアプロディテが出した交換条件に惑わされ、彼女に賞 (林檎) を与えてしまう。その報酬として彼女の援助によりメネラオスの妻ヘレネを奪い、故郷のトロヤに連れて帰った。それに腹を立てたメネラオスとその兄アガメムノンはギリシャの大軍を率いてトロヤを攻撃する。戦いは長期に及び、最後は大勢のギリシア兵が潜む木馬が城内に引き入れられ、彼らの働きでトロヤは陥落した。以上がよく知られている「トロヤ戦争」の経緯である¹³⁷。

ここで取り上げるのは 1400 年頃にラテン語から翻訳された『トロヤ戦記』*Crónica troyana* 中の、トロヤの姫カサンドラがパリスとヘレネの結婚に反対し、不吉な予言をする場面である¹³⁸。

(1)

E lo qual vjnjendo a notiçia de Casandra, fija del rrey Prjamo, en commo Paris avia tomado por su muger a Elena, Casandra començó el esquiuo clamor e agras e dolorosas bozes, gritando e diciendo en sensibles lloros e amargo sentjmjento: "E para que, malaventurados troyanos, vos daes a plazer e alegrias por las bodas de Paris?, por causa de las bodas de las quales tantos males e daños uos son por venjr; e por las quales lloraredes uestras muertes e de vuestros fijos, los quales ante los padres veredes agramente padesçer crueles muertes...

¹³⁷ cf. 高津春繁(1960)『ギリシャ・ローマ神話辞典』「トロイア戦争」「カッサンドラ」の項。

¹³⁸ テキストは González Ollé, 1980 による。

【語句】 **lo qual** > **lo cual** そのこと (パリスがヘレネと結婚すること)
noticia = conocimiento (...の[de])知るところ **esquiuo** = terrible 恐ろしい
clamor = grito 叫び **agro** = desagradable, áspero, desabrido 耳障りな
sentibles > sensible 悲痛な **uos son por venjr** = os llegarán そなたたちのところへやって来ることであろう。

【訳】 パリスがヘレネと結婚するというその知らせがプリアモス王の娘カサンドラに届くと、彼女は恐ろしい叫びと悲痛な声をあげ、悲しそうに泣きながら辛い気持ちで次のように大声で言った。「不幸なトロヤの人々よ、なぜパリスの結婚をそれほどまでに喜び、歓迎するのか。この結婚のために多くの災いと危害がそなたたちに降りかかるだろう。そのためにそなたたち自身と子らの死を泣き悲しむことになるろう、その子らは親の目の前で残酷な死を迎えることだろう」

形容詞の位置

スペイン語では一般に形容詞は名詞の後につく。一方、文章内の太字のように形容詞が名詞の前に来ると特殊な効果を感じられる。ラテン語では「形容詞＋名詞」の語順が普通であった¹³⁹。逆に「名詞＋形容詞」の語順になると「強調」の意味が込められていた。しかしスペイン語ではこの「強調」の意味が薄れていき、結果として逆に主観的に強調されるときに「形容詞＋名詞」の順になった¹⁴⁰。興味深いことにラテン語の「形容詞＋名詞」からスペイン語の「名詞＋形容詞」へという語順の変化は、ラテン語の「目的語＋動詞」からスペイン語の「動詞＋目的語」への語順の変化と平行している¹⁴¹。この2つの変化は互いに関係があるのだろうか。偶然の一致で

¹³⁹ cf. Dangel (1995:113, 2001:154): "On affirme souvent que l'ordre des mots est libre en latin. Pourtant tout dans les habitudes langagières de cette langue prouve le contraire. Il est ainsi établi que l'adjectif qualificatif précède ordinairement le substantif, l'averbe le verbe." cf. 後述の【補説】

¹⁴⁰ cf. Urrutia Cárdenas et al. (1988:83-86): "En latín clásico lo normal era la anteposición del atributivo al nombre, adquiriendo el adjetivo un carácter enfático en el orden inverso."

¹⁴¹ cf. Cano Aguilar (1988:132-133): "El orden latino adjetivo + sustantivo (con excepciones bien delimitadas fue sustituido progresivamente en época tardía por el de sustantivo + adjetivo, al irse perdiendo, por el uso, el valor expresivo que en época clásica se asociaba a este último orden, y al irse generalizando la secuencia lineal de Núcleo + Complemento (cfr. el cambio Objeto + Verbo > Verbo +

なければ共通の原因を探さなければならない。

歴史的に関係のない日本語とスペイン語を比較すると次のように様々なケースで語順が逆になっていることがわかる。

| | 日本語 | スペイン語 |
|-----|--------------------|---------------------------|
| 名詞句 | 大きな <u>本</u> | <u>libro</u> - grande |
| 動詞句 | 本を <u>読む</u> | <u>leer</u> - un libro |
| 助動詞 | 読ま <u>せる</u> | <u>hacer</u> - leer |
| 副詞句 | 駅 <u>で</u> | <u>en</u> - la estación |
| 副詞節 | 雨が降った <u>とき</u> | <u>cuando</u> - llovió |
| 従属節 | 彼が来る <u>と</u> （言う） | (dice) <u>que</u> - viene |

これも単なる偶然（の不一致）だとは思われない。上の下線部を「軸」とすると日本語では軸が後にあり、スペイン語では軸が前にあるという一般化ができる。その軸（たとえば名詞）が数学の定数だとすると軸以外（たとえば形容詞）が変数になる。反対に本文の太字のような「形容詞＋名詞」の語順ではこの原則とは異なるので形容詞は変数にならない。そこで、たとえば *esquivo clamor* 「恐ろしい叫び声」の *esquivo* という形容詞はほかの形容詞から客観的に区別して（変数として）名詞を限定するのではなく、（名詞に固有な定数として）主観的に名詞 *clamor* を修飾することになる。

【補説】

先述(注 2)のように *Dangel* は「ふつう性質形容詞に係る実詞に先行」とすると明言している。さらに「この配置法は非常に慣用化しており、クインティリアーヌスはその過剰適用を戒め、将来の弁論家たちに、単調に陥らぬよう、かかる機械的自動化を断ち切るように促しているほどである。しかし、ラテン語使用者が、語順を厳密に遵守し、絶対的な規範に従う感性をもっているからこそ、その遵守事項に対するあらゆる変更が、表現上の逸脱として認知されているのである」と述べている。一方、日本で発行されているラテン語の参考書の多くは「名詞＋形容詞」の語順の方が普通であると述べている¹⁴²。

Objeto). De ahí que en romance el adjetivo antepuesto al nombre sea el que presenta especiales valores significativos".

¹⁴² cf. 泉井 (1952:25), 呉 (1952:36)、樋口、藤井 (1963:20), 松平・国原 (1968:35), 大西 (1997:75), 風間 (1998:164)。英語圏でも Gavin Betts

実例を見よう。たとえばカエサルの『ガリア戦記』やキケロの『カティリナ弾劾』、同『友情論』を読むと、やはり形容詞＋名詞のほうが普通であることがわかる。García Yebra y Escolar Sobrino (1980), Campos Rodríguez (1975), García Yebra (1975)の版で調べるとそれぞれ次のような結果になった。『ガリア戦記』(G.と略す:I-XXX)：「形容詞＋名詞」66例 vs. 「名詞＋形容詞」15例；『カティリナへの弾劾』(C.と略す:I-VII)：44例 vs. 3例；『友情論』(A.と略す:I-X)：24例 vs. 4例。例¹⁴³：repentino eius adventu (por la llegada repentina de él, G.XIII), diuterniorem impunitatem (impunidad más duradera, G.XIV); nocturnum praesidium (guardia nocturna, C.I), fortes viri (varones animosos, C.I); humanosque casus (vicisitudes humanas, A.II), in perfecto et spectato viro (en un varón hecho y probado, A.II), adversis rebus (por las cosas adversas, A.X). 次は「名詞＋形容詞」のわずかな例の中から抽出したものである。homines bellicosos (hombres bellicosos, G.X), locis pattentibus maximeque frumentariis (lugares abiertos y muy trigueros, G.X), viri fortes (hombres animosos, C.I), conatus tuos nefarios (tus intentos nfarios, C.V).

競争が招く悲劇

神話や物語で予言が行われると必ずと言ってよいほどそれが実現する。ここでもカサンドラの予言通りに女神たちの愚かな競い合いが多く、英雄と兵士の命を奪うことになった。神話の中で彼女はほかにも正しい予言を繰り返すのだが、悲しいことに一つとして民に聞き入れられたことがない。

現在のCibelesの噴水はMadridのサッカーチームReal Madridが勝利するとファンが集って氣勢を上げる場所である。一方、対抗するAtlético de MadridチームはNeptunoの噴水に押し寄せる。どちらも熱狂の渦の中ではめを外し、ファン同志の争いや神々の像を破壊するという暴力行為におよ

(1998:3)は次のように説明している。"Adjectives when used attributively generally comes after their noun: **Brutus nobilis, the noble Brutus**". 一方、大村(1963:22)は attributive の形容詞は名詞の前に置かれる、と述べている。デル・コラル(1950:19)は「ラテン語では修飾語なる形容詞はそのかかっている名詞の前に（日本語のように）置くのは美しいと云われているが、その後には置くことも多くある。故に自由に前にも後にも置いてよいわけである」という。次のSmith (1938:23-24)も同様に「前後どちらでもよい」という："Adjectives in Latin come either before or after the nouns they qualify".

¹⁴³ populi Romani, rei publicae などの成句は除く。また、たとえ含めても「形容詞＋名詞」の語順の方が多い。

ぶこともある。スポーツに限らずどのような競争でも勝つことだけを求めて目がくらむと悲しい結果を招くことにもなりかねない。カサンドラの予言が的中したように。

■テキスト

トロヤ物語のテーマは中世ヨーロッパ各国の文学に見られるが、イベリア半島に伝わったものは原典『イリアッド』(La Ilíada) から離れてかなり自由な筋書きとなっている。ここに取り上げる 2 つのテキストは、パリスとヘレネーの結婚に不吉なものと感じとったトロヤの女性占い師カサンドラの悲痛な予言と(1,2)、ギリシアの戦士アキレウスの獅子奮迅ぶりを描いたものである(3~6)。

(1)

[前掲]

(2)

O gente çiega, que non vedes njn conosçedes la cruel muerte que vos es por venjr! Por que non fazedes por qualquier via que sea, o siquiera por fuerça, que Helena sea quitada e partida de Paris su non deuido e jnjusto marido? Non trabaiades, con quanta quexa e pesa podedes, a que sea rrestituyda a su legjtjmo marido antes que la cruel espada se esfuerçe e venga en estrago e fjnal destruyçion de todos vosotros? Pensaes por aventura quel furto e rrobo de Paris deua pasar sjn graue pena e cruel vengança, por la qual es por venjr fjnal perdiçion e muerte? (121)

【語句】 por aventura = quizás, por casualidad, acaso ひょっとして。

【訳】 「ああ、盲目の民よ、そなたたちに訪れるはずの残酷な死が見えないのか、それに気づかないのか！なぜ、ヘレネを、本来あってはならない不当な夫パリスから、いかようにしてでも力づくでも取り戻そうとしないのか。剣が力をふるい、そなたたち皆の苦難と最期に至る前に、どのような苦しみを伴ってでも彼女を正しい夫に返そうとしないのか。よもやパリスの略奪が最後の破滅と死に至らしめる悲しみと残酷な報復を受けずに済むと思っているのか。…」

(3)

Grand mortandad se faze e muchos caen de los griegos, pero mas caen de sus enemigos. E caso que de la parte de los griegos oviese asaz caualleros e gentiles omnes e de grand esfuerço e ardimento e bien valientes por sus personas, enpero a grand pena podian rresistir a la puxança e poderio de sus enemjgos, los quales bien eran tres tantos que ellos.

【語句】 caso que = en caso de que ... …の場合は、…の場合でも（接続法が用いられているので「逆接」の意味となる） asaz = bastantes, muchos 多くの gentil omne = noble 貴族 esfuerço = ánimo, vigor 勇気 bien = muy とでも (cf. 現代ラテンアメリカの用法) ardimiento = valor, denuedo 勇気、勇ましさ enpero = sin embargo しかし tres tantos que = tres veces más que ...…の三倍

【訳】大量の死者が出た中で、ギリシア兵の死者の数も多かったが、敵の死者の数はそれを越えた。ギリシア側には勇猛果敢な多くの騎士や貴族がいたには違いないのだが、それでも三倍の数にもなる敵の攻勢を防ぐことは困難であった。

時制

戦闘場面を活写するため所々に現在形が用いられている。

(4)

E verdaderamente los griegos fueran ende muertos cruelmente todos quantos ende eran si non fuera aquel maraujlloso cauallero en armas, Archiles, el qual con mucho estudio penso en el grand numero de sus enemjgos e sus fuerças e contenplando en ellos e mjrandolos a todas partes, vido andar al rey Theutran en medio de los suyos, el qual contra los griegos fazia muy grand estrago.

【語句】 ende = ahí, allí そこに、あそこに fuera, ser = estuviera, estar estudio = empeño, ahinco, aplicación 努力 vido (強変化) > vio (弱変化) estrago = daño 損害

【訳】あの驚くべき騎士アキレウスがいなければ、ギリシア兵たちの多くは疑いなく死んでいたであろう。アキレウスは多勢の敵とその勢力をしつ

かりと見据え、周囲を見渡すと、味方の兵に守られて進むテウトラン王を見つけた。彼はギリシアの兵に多大な損害を与えていた。

(5)

Por lo qual el mesmo Archiles se mete con mucha furia por medio de las batallas destraçando e ronpiendo e matando a diestro e sjnjestro por donde quier que alcançaua, faziendo el mortal estrago en sus enemjgos, non perdonando a vida a quantos delante de sy falla e le ocupauan la via quel fazia derechamente por llegar al rey Theutran.

【語句】 batalla = escuadrón 隊形、隊列 destraçar > destrozar 破壊する

【訳】 それによって、ほかならぬアキレウスは怒りに燃え、敵の隊列に切り込み、右に左に手の届く限り木っ端みじんに破壊し、敵に致命的な損害を与えた。そしてテウトラン王を目指す自分の前に立ちはだかり、行く手の邪魔をするような者を容赦しなかった。

(6)

Asi que Archiles, commo el leon quando brama, vjno poderosamente al rey Theutran e cometelo en su gran fuerça dandole muchos e muy fieros golpes de espada, firiendo grauemente, tanto que le desenlaço el yelmo. E despues tomo el rrey por fuerça e derribolo de la silla a tierra. E, commo el rey fuese ya caydo en tierra, Archiles, ençendido en furia, alço el braço con la espada por lo ferir cruelmente e lo traer a muerte.

【語句】 cometer > acometer, embestir 襲いかかる、攻撃する fiero = extraordinario 途方もない

【訳】 そこでアキレウスは猛り狂う獅子のようにテウトラン王に向かってぐんぐんと進み、満身の力を込めて切りつけた。したたかに何度も剣を振るい、重傷を負わせ、しまいには王の兜も打ち砕いた。そして王をむんずとつかみ鞍から大地へと引きずり降ろした。すでに王は地面に達していたので、アキレウスは怒りに燃えながら、容赦なく切りつけ命を奪おうと剣を持った腕を掲げた。

commo の節内の接続法

commo el rey **fuese** ya caydo en tierra, (...)に接続法が使われている。ラテン語では「原因、理由、譲歩」を示す **cum** の後では接続法が用いられた¹⁴⁴。中世や古典期スペイン語でも「原因、理由」を示す **como** (**commo**)の後で接続法が使用されている（直説法も用いられた）¹⁴⁵。この古いスペイン語の用法はラテン語の用法を真似たものと考えられる。これを「ラテン語法」(**latinismo**)と呼ぶ。また「トロヤ物語」のような翻訳文学にも多い。現代語でも接続法過去形が使用されることがある¹⁴⁶。一方、接続法現在形は非常に稀である。

●課題

【課題 11a】 テキスト(2)~(6)を訳しなさい。訳しながら気づいたことを述べなさい。

【課題 11b】 形容詞と名詞の語順について日本語とラテン語と現代スペイン語を比較し、気づいたことを述べなさい。

【課題 11c】 中世スペイン語の作品を1つ選び、その中で **como** 節の中の直説法と接続法の分布を調べなさい。

【参考】

Betts, Gavin. 1998. *Latin, a complete course*. London. Teach Yourself Books

¹⁴⁴ Bosh, *Sintaxis Latina*, p.180. 樋口他『詳解ラテン文法』研究社, p.92.

¹⁴⁵ Frede Jensen y Thomas Lathrop. *The Syntax of the Old Spanish Subjunctive*, Mouton, p.69. Qual, como el fijo **sea** en poder del padre, ninguna cosa non puede destinar ni dar. (*El fuero de Teruel*, ca. 1250, 447,2) / Y como **sea** natural a estos no fazer lo que prometen, escusase como en el processo parece. (*Celestina*, 269, 6) / Y, como me viesse de buen ingenio, holgauase mucho. (*Lazarillo*, 78,5). / Et commo **es** ella muy falaguera, en poco tiempo fueron todos muy pagados della. (*Lucanor*, 112, 14). / Pero como **soy** cierto de tu limpieza de sangre y hechos, me estoy remirando si soy yo Calisto. (*Celestina*, 211, 29)

¹⁴⁶ Como **fuesen** muy pocos, tuvieron que rendirse. (Esbozo, p.549) / Como **viniese** cansado, se acostó. (María Moliner, s.v. *como*, p.684) / Como **sea** la vida milicia, es menester vivir armados. (id.)

- Campos Rodríguez, Francisco. 1975. *M.T.Cicerón. Catilnarias*. Madrid. Gredos.
- Cano Aguilar, Rafael. 1988. *El español a través de los tiempos*. Madrid. Arco / Libros.
- Dangel, Jacquiline. 1995. *Histoire de la langue latine*. Presses Universitaires de France, Collection QUE SAIS-JE? 遠山一郎・高田大介訳 2001『ラテン語の歴史』白水社。p.154.
- デル・コラル。1950.『ラテン語四ヶ年』ドン・ボスコ社
- García Yebra, Valentín. 1975. *M.T.Cicerón. De amicitia*. Madrid. Gredos.
- García Yebra, Valentín e Hipólito Escolar Sobrino. 1980. *César, Guerra de las Galias. Libros I-II-III*. Madrid. Gredos.
- Gavin Betts, *Teach yourself Latin*. Hodder & Stoughton
- González Ollé, F. 1980. *Lengua y literatura españolas medievales*. Barcelona. Ariel.
- 樋口勝彦・藤井昇。1963.『詳解ラテン文法』研究社
- 泉井久之助。1952.『ラテン広文典』白水社
- 風間喜代三。1998.『ラテン語とギリシャ語』三省堂
- 呉茂一。1952.『ラテン語入門』岩波書店
- 松平千秋・国原吉之助。1968.『新ラテン文法』南江堂
- 大村雄治。1963.『大村実習ラテン語』白水社
- 大西英文。1997.『はじめてのラテン語』講談社
- Smith, F. Kinchin. 1938. *Latin*, London. Teach Yourself Books
- Urrutia Cárdenas, Hernán y Manuela Álvarez Álvarez. 1988. *Esquema de morfosintaxis histórica del español*. Bilbao: Universidad de Deusto.

12. 文法の誕生…アントニオ・デ・ネブリハ『カスティーリャ語文法』

Antonio Nebrija, *Gramática de la Lengua Castellana* (1492)

Sevilla 発 Cadiz 行きの列車は途中 Lebrija という小さな駅に停車する。ここはスペイン語研究史の最重要人物の一人 Antonio de Nebrija (1444-1522) の生誕地なので途中下車の価値がある。真夏のある日スペインの友人を誘って出かけたところ、町役場の前にこの偉大な文法学者の座像を見つけた。役場や土地の人に聞いても彼の生誕の家はわからなかったが、それでも Andalucía の青い空の下に白壁が映える美しい町を次の列車が来るまで半日ぶらぶらと散歩を楽しむことができた。

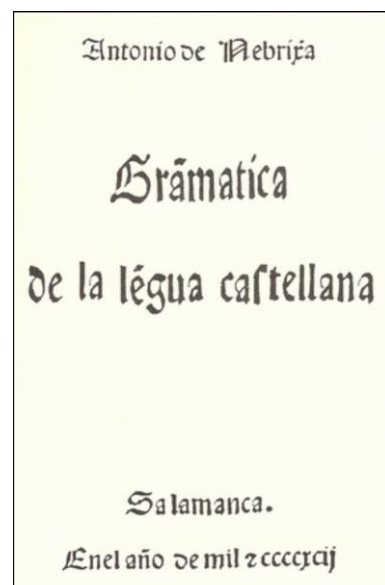


Antonio de Nebrija

Nebrija の『カスティーリャ語文法』*Gramática de la Lengua Castellana* が Salamanca で印刷されたのは 1492 年である。それまでスペイン語だけでなく他のヨーロッパの諸言語でも体系的な文法書はなかったので、Nebrija は近代語文法学の先駆者と見なされている。当時の文法研究の主な対象はラテン語を中心とする古典語であった。

「秩序正しく未来永劫に」

このスペイン語文法学史上の記念碑的作品はいかなる意図で書かれたのであろうか。Isabel 女王に捧げられた序文によれば、本書には 3 つの「効用」(provecho)があるという。第一の効用はカスティーリャ語の統一と普及である。「現在と未来にわたってこの(カスティーリャの)言葉で書かれるものが、秩序正しく、未来永劫にわたって普及することを願って」と書かれている。次の節の「ヘブライ語、



ギリシャ語、ラテン語について申し上げましたこと」とは「常に言語が帝国の伴侶であった」(siempre la lengua fue compañera del imperio)ことを示している¹⁴⁷。

(1)

(...) Lo que diximos de la lengua ebraica, griega τ latina, podemos mui más claramente mostrar en la castellana; que tuvo su niñez en el tiempo de los juezes τ reies de Castilla τ de León, τ començó a mostrar sus fuerças en tiempo del mui esclarecido τ digno de toda la eternidad el Rei don Alfonso el Sabio, por cuio mandado se escriuieron las Siete Partidas, la General Istoría, τ fueron trasladados muchos libros de latín τ arábigo en nuestra lengua castellana; la qual se estendió después hasta Aragón τ Navarra, τ de allí a Italia, siguiendo la compañía de los infantes que embiamos a imperar en aquellos reinos. (...)

【語句】 **diximos** > dijimos **ebraico** > hebreo ヘブライ語の "ט" [i] > y **juez** = cada uno de los caudillos que conjuntamente gobernaron a Castilla en sus orígenes (Dic. RAE, s.v.) 統治者 **trasladar** = traducir 翻訳する **arábigo** > árabe アラビア語 **estendió** > extendió **compañía** = unidad de infantería, de ingenieros de un servicio, mandada normalmente por un capitán y que casi siempre forma parte de un batallón (id.) 部隊 **infante** = soldado que sirve a pie 歩兵

【訳】 ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語について申し上げたことはカスティーリャ語についてもさらに明らかに示すことができます。カスティーリャ語はカスティーリャとレオンの統治者や諸王の時代に幼少期を過ごし、聡明な、かつ永遠に記憶に留められるべきアルフォンソ賢王の時代に勢力を示しはじめました。アルフォンソ賢王の命令の下(もと)に『七部法典』と『総年代記』が執筆され、多くの書物がラテン語とアラビア語から我らの言語であるカスティーリャ語に翻訳されました。この言語はその後アラゴンとナバラ、さらにそこからイタリアにまで、かの地を支配すべく派遣した歩兵部隊と歩みを揃えて普及したのでございます。

引き続き Nebrija は本書の第二の効用として、母国語を理解することが

¹⁴⁷ テキストは Quilis, 1980 による。

ラテン語の習得を容易にすると述べている。このように、ふだんとくに意識することのない母国語の文法を考察することがほかの言語の習得にもつながるといふ発想は500年後の現代言語学の一部門である対照分析(análisis contrastivo)と共通している。

x の発音

スペイン語の強い摩擦音[x]の成立過程を見よう。これを知ると、たとえば México がスペイン語で「メキシコ」でなく「メヒコ」と発音される理由と、スペインでは Méjico と綴り、メキシコでは México と綴る理由がわかる。

上のテキストに **diximos** (> **dijimos**) 「我々は語った」と **juezes** (> **jueces**) 「統治者(複数)」という語がある。当時 **x** は[ʃ シュ]発音され、**j** は[ʒ ジュ]と発音されていた。後者の[ʒ ジュ]16世紀中頃に無声化して [ʃ シュ]という音に合流した。さらにこの音は次第に変化して[x フ]という口の奥で発音される音になった。この変化が完了したのは17世紀の中頃である。

「メキシコ」は当初 México と書かれ、[méfiko] 「メシコ」と発音されていた。そして17世紀以降は[méxiko] 「メヒコ」という発音に変わったが、México 本国で使われる綴り字は México という形がそのまま残された。1815年スペイン王立アカデミーは **x** の文字を[ks]に用いるように定め(例 examen)、一方 **j** の文字を[x]の発音にあてたので、スペインでは「メキシコ」を Méjico のように書くようになった。メキシコ本国で用いられる México という書き方について、スペイン語史の専門家 Rafael Lapeza (*Historia de la Lengua Española*) は「尊重すべき、また複雑な歴史的な理由による」(...) se debe a razones históricas tan respetables como complejas と述べている¹⁴⁸。

彼らはわが『文法』によって我らの言語を知ることになる

さて、この文法書の第三の効用は Nebrija 論に必ずと言ってよいほど引用される次の節にある。

(4)

El tercero provecho deste mi trabajo puede ser aquel que, cuando en Salamanca di la muestra de aquesta obra a vuestra real Majestad, τ me preguntó que para qué podía aprovechar, el mui reverendo padre Obispo de Ávila me arrebató la respuesta; τ, respondiéndome por mí,

¹⁴⁸ スペインでも最近の出版物では México と書かれるようになった。

dixo que después que vuestra Alteza metiese debaxo de su iugo muchos pueblos bárbaros τ naciones de peregrinas lenguas, τ con el vencimiento aquellos ternían necesidad de recibir las leies quel vencedor pone al vencido, τ con ellas nuestra lengua, entonces, por esta mi *Arte*, podrían venir en el conocimiento della, como agora nos otros deprendemos el arte de la gramática latina para deprender el latín. I cierto assí es que no sola mente los enemigos de nuestra fe, que tienen ia necesidad de saber el lenguaje castellano, mas los vizcainos, navarros, franceses, italianos, τ todos los otros que tienen algún trato τ conversación en España τ necesidad de nuestra lengua, si no vienen desde niños a la deprender por uso, podrán la más aina saber por esta mi obra. (...)

【語句】 **peregrino** = que anda por tierras extrañas 外国にいる **ternían** > tendrían **aina** aprisa, presto 早く **esta mi obra** > esta obra mía

【訳】 わが書物の第三の効用は次のことをごさいます。サラマンカにおいて私が本書の見本を陛下に捧げたとき、陛下はこれが何の役に立つのかとおたずねになりました。そのとき私にかわってアビラの司教猊下が引き取り、次のようにお答えになりました。猊下(げいか)は、陛下が言語を異(こと)にする多くの異民族や国々を支配下に治められた暁(あかつき)に、その勝利によって彼らが、勝者が敗者に課す法律と、それにとまなう我らの言語を受け入れる必要にせまられたとき、まさに現在われわれがラテン語文法によってラテン語を学んでいるのと同様に、彼らはわが『文法』によってわれらの言語を知ることになるでしょう、とお答えになりました。これは確かに至言と申せましようが、カスティーリャ語を理解する必要にせまられるわれらの信仰の敵どもだけでなく、ビスカヤ人、ナバラ人、フランス人、イタリア人、そのほかスペインでなんらかの交渉と対話をもち、われらの言語を必要としている人々も、幼少時からそれを使いながら習得するのでない場合には、この私の書物によって、より早くそれを知ることができるようになるでしょう。

Nebrija の『カスティーリャ語文法』が刊行された 1492 年 8 月 18 日、コロンブス Cristóbal Colón の船隊は Canarias 諸島の Gomera 島で未知の大洋に乗り出す準備をしていた。もちろん Nebrija はこれから起こる新大陸との接触を予知していたわけではない。しかし、偶然とはいえ同年同月に行われた Colón の航海と Nebrija が述べた『文法』の存在理由の歴史的符合はとて

も興味深い。その後の世界史の大展開とともに広域に普及した今日のスペイン語の姿には私たちが惹きつけてやまない魅力がある。

■テキスト

(1)

[前掲]

(2)

(...) Ésta hasta nuestra edad anduvo suelta τ fuera de regla, τ a esta causa a recibido en pocos siglos muchas mudanças; por que si la queremos cotejar con la de oi a quinientos años, hallaremos tanta diferencia τ diversidad cuanta puede ser maior entre dos lenguas. I por que mi pensamiento τ gana siempre fue engrandecer las cosas de nuestra nación, τ dar a los ombres de mi lengua obras en que mejor pueden emplear su ocio, que agora lo gastan leyendo novelas o istorias embueltas en mil mentiras τ errores, acordé ante todas las otras cosas reduzir en artificio este nuestro lenguaje castellano, para que lo que agora τ de aquí adelante en él se escriviere pueda quedar en un tenor, τ estender se en toda la duración de los tiempos que están por venir, como vemos que se a hecho en la lengua griega τ latina, las cuales por aver estado debaxo de arte, aun que sobre ellas an passado muchos siglos, toda vía quedan en una uniformidad.

【語句】 mudança = acción y efecto de mudar o mudarse 変化 de oi a > de hoy
hace tenor = constitución u orden firme y estable de algo 確固とした秩序

【訳】この言語(カスティーリャ語)は今日に至るまで自由で、規則にも従っていなかったため、わずか数世紀の間に多くの変化を被りました。かりに今日の言語と五百年前の言語を比べようとすれば、あたかも二つの言語の間よりも大きいと言えるほどの相違と変容が見つかることでしょう。私の意図と願いは、常にわれらの国家の諸物を偉大なものに高め、今日われらの言語を話す人々が多くのでたらめと誤りに満ちた小説や物語を読み、無駄な時間を費やしているため、よりよき時をすごすための書物を彼らに与えることをございますから、なにもましてこのわれらのカスティーリャの言葉を技法にまとめることを思い立ちました。これは、ギリシャ語やラテ

ン語がその文典のもとにあったため長い年月を経た今日でも統一を保っているのと同じように、現在と未来にわたってこの(カスティーリャの)言葉で書かれるものが、秩序正しく、未来永劫にわたって普及することを願ってのことです。

(3)

(...) I seguir se a otro no menor provecho que a queste a los ombres de nuestra lengua que querrán estudiar la gramática del latín; por que después que sintieren bien el arte del castellano, lo cual no será mui dificil, por que es sobre la lengua que ia ellos sienten, cuando passaren al latín no avrá cosa tan escura que no se les haga mui ligera, maior mente entreveniendó aquel *Arte de la Gramática* que me mandó hazer vuestra Alteza, contraponiendó línea por línea el romance al latín; por la cual forma de enseñar no sería maravilla saber la gramática latina, no digo io en pocos meses, más aún en pocos días, τ mucho mejor que hasta aquí se deprendía en muchos años.

【語句】 I seguir se a > Y se seguirá それに続いて…もあるでしょう
a queste > este この効用 sintieren, sentir < experimentar 経験する、体得する
escura > oscura 不明な、理解が困難な entreveniendó, entrevenir > intervenir
romance ロマンズ語、ここではカスティーリャ語 deprendía, deprender
(s.XIII-XV) > aprender

【訳】さらに、これに劣らず大きな効用が、ラテン語を学ぼうとするわれらの言語の人々にもたらされることでしょう。と申しますのは、カスティーリャ語の文典をよく理解することは自分がすでに経験している言語についてのことなのでそれほど困難ではありませんし、その後ラテン語の学習に移るとき、陛下が私に編纂をお命じになった『文典』(ラテン語文典)を参照し、ロマンス語を一行ずつラテン語と比較していけば理解が困難になるほどの難問にぶつかることはないでしょう。こうした教授法を用いれば、これまでは何年もかかって学んでいたよりも数段優れた形で、数ヶ月と言わず数日でラテン語文法を習得することも不思議ではありません。

(4)

[前掲]

(5)¹⁴⁹

Nombre es una parte de las diez partes de la oración, que se declina por casos, sin tiempos, τ significa cuerpo o cosa. Digo cuerpo, como *ombre, piedra, árbol*; digo cosa como *dios, ánima, gramática*. Llámase nombre, por que por él se nombran las cosas, τ así como de *onoma* en griego, los latinos hizieron *nomen*, así de *nomen* nos otros hezimos nombre. Los accidentes del nombre son seis: calidad, especie, figura, género, número, declinación por casos. Calidad en el nombre es aquello por lo cual el nombre común se distingue del propio. Proprio nombre es aquél que conviene a uno solo, como *César, Pompeio*. Común nombre es aquél que conviene a muchos particulares, que los latinos llaman apelativo, como *ombre* es común a *Cesar τ Pompeio; ciudad, a Sevilla, i Córdoba*. (...)

【語句】 hezimos > hicimos proprio > propio

【訳】 名詞は十品詞の一部であり、格によって曲用し、時制がなく、物体または事物を示す。物体とは「人間」「石」「樹木」のようなものをいい、事物とは「神」「魂」「文法」などをいう。名詞と呼ばれるのは、それによって事物が名指されるからである。ちょうどギリシャ語の「オノマ」からラテン人は「ノメン」を作ったようにわれわれはラテン語の「ノメン」から「ノンブレ」(名詞)を作った。名詞の性質は六つあり、それは特性、種、形相、性、数、格変化である。特性はそれにより普通名詞が固有名詞と区別されるものである。固有名詞は、たとえば「カエサル」や「ポンペイウス」のように一つだけのものに適用されるものである。普通名詞は、たとえば「人間」が「カエサル」にも「ポンペイウス」にも共通であり、「都市」が「セビリヤ」にも「コルドバ」にも共通であるように、多くの個体に適用されるもので、これをラテン人は通称名詞と呼んでいる。(...)

(6)¹⁵⁰

Assí como en muchas cosas la lengua castellana abunda sobre el latín, assí por el contrario, la lengua latina sobra al castellano, como en esto de la conjugación. El latín tiene tres bozes: activa, verbo

¹⁴⁹ Libro tercero, cap. II

¹⁵⁰ Cap. XI

impersonal, passiva; el castellano no tiene sino sola el activa. El verbo impersonal suple lo por las terceras personas del plural del verbo activo del mismo tiempo τ modo, o por las terceras personas del singular, haciendo en ellas reciprocación τ retorno con este pronombre *se*; τ así por lo que en el latín dizen *curritur, currebatur*, nos otros dezimos *corren, corrían*, o *córrese, corriase*; τ así por todo lo restante de la conjugación. (...)

【語句】 **mesma** > misma

【訳】 このように多くの面でカスティーリャ語はラテン語よりも豊かであるが、逆に動詞活用のようにラテン語のほうが豊かな面もある。ラテン語は能動態、非人称動詞、受動態という三つの態を持つが、カスティーリャ語は能動態だけである。非人称動詞はそれを同じ時制と法の能動動詞の三人称複数か、または三人称単数で *se* という代名詞をともなう再帰形によって補う。たとえば、ラテン語で *curritur, currebatur* というとき、我々は *corren, corrían*, または *córrese, corriase* という。これはほかのすべての活用も同様である。(...)

●課題

【課題 12a】 次の文を読み、母語話者と外国人という異なる立場から文法書と辞書の需要について考察しなさい。

その後の『スペイン語文法』の運命を辿ると、Alatorre が説明しているように、あまり芳しくない。

Extrañamente, a pesar de que la vaga "profesía" imperial de Nebrija se convitió muy poco después en inesperada y esplendorosa realidad, su *Gramática* no tuvo nunca el provecho que dijo el obispo de Ávila. En efecto, después de 1492 no volvió a imprimirse más (y cuando se reeditó, muy entrado el siglo XVIII, lo fue por razones de mera curiosidad o erudición). Extrañamente también, a lo largo de los tres siglos que duró el imperio español fueron poquísimas las gramática que se compusieron e imprimieron en España. (p.200)

(不思議なことに、ネブリハの帝国に関する漠たる「予言」がその直後に予期せぬ輝かしき現実と化したにもかかわらず、彼の『文法』は、かのアビラ司教が述べていた効用が発揮されたことはけ

ってなかった。実際 1492 年以降再版されなかったのである(18 世紀もかなり過ぎた頃再版されはしたが、これは単に好奇心を満たすか、または研究上の必要からであった)。またこれも不思議なことに、スペイン帝国の支配が続く 3 世紀の間スペインで編纂され印刷された文法書は非常に少ない。)

引用文の下線で示したように、Alatorre は Nebrija の文法書が再版されなかった事実と植民地時代に他の文法書も書かれなかったことを不思議だと述べている。それに対して、ネブリハの『ラテン語入門』(*Introductiones latinae*, Salamanca, 1481)は大いに普及したし、また彼の『スペイン語-ラテン語辞典』(*Vocabulario latino-español*, Salamanca, 1492)も版を重ねた¹⁵¹。

【課題 12b】 Méjico, mejicano と México, mexicano という 2 つの異なるスペルをコーパスや WEB で調べ、その分布について考察しなさい。

【課題 12c】 品詞論について Nebrija の文法書と現代言語学の方法を比較しなさい。

【参考】

Alatorre, Antonio. 1989. *Los 1,001 años de la lengua española*. México: Fondo de Cultura Económica.

Quilis, Antonio. 1980. *Estudio y edición de gramática de la lengua castellana*, Editora Nacional, Madrid.

¹⁵¹ cf. A. Alatorre (op.cit., p.204): "A diferencia de la *Gramática castellana*, el *Dioccionario* de Nebrija fue reeditado innumerables veces, con arreglos y adiciones."